ミッションパイロット

デイビッド・ゲイツ物語

God works in dangerous and difficult places

Eileen E. Lantry
with David and Becky Gates

ミッションパイロット

デイビッド・ゲイツ物語

はじめに

私たちは神様を信じ、神様が存在なさることを知っており、そのみわざを見ています。そして無条件に神様に信頼していると口にします。それなのになぜ、神様が私たちの人生において奇跡を行われると驚くのでしょうか？

この“ミッションパイロット”は神様の偉大な働きと導き、デイビッドとベッキーの人生への神様の驚くべき介入を世の人々に叫んでいます。

皆さんは、乳飲み子のデイビッドの内臓が正しく機能するように働かれた、神様のみ手の巧みなわざを認めるでしょう。デイビッドが８歳のとき、ある特別な女の子に、大きくなったら結婚しようと申し込むように、神様が彼に強く印象づけられた理由がわかるでしょう。神様が十代のデイビッドをなぜ飛行機事故から救われたかもわかるでしょうし、また彼の飛行機がハイジャックされて背中にピストルの銃口を感じたときには身震いすることでしょう。神様が彼らを召し、備え、導き、そして何の経済的保証もなく、ただまったく神様に頼って５人の子供たちをジャングルの村に連れて行くようにと、彼らの心を動かされたとき、デイビッドとベッキーを特別な奉仕のために選ばれたということを疑う余地はないでしょう。

長年デイビッドに敬服してきた私どもにとって、この本は感謝の念を確かなものとさせてくれます。この本の美しいところは物語の終わりが述べられていないところです。なぜならまだ終わりが来ていないからです。私がこれを書いている今もなお、デイビッドと彼の愛するベッキー、そして５人の子供たちは南米のジャングルで奉仕しています。ほとんど毎日、神様は直接のしるしをもって新たな展望を開き、彼の伝道の働きを広げるために介入しておられます。数々の物語は、皆さんの神様への愛と、そして神様に栄光を帰すためにこのような人生を選び、危険なところで神様に仕えている宣教師夫婦への敬服の念を増し加えることでしょう。

世の中が物に溢れているこの時代に、今なお神様がどのようにして宣教師を召し、備え、宣教地に送り、奉仕の中で全く神様に頼る

ようにさせられるかを知り、また目の当たりにして、力が与えられます。ゲイツ家族の献身的な奉仕によって、あなたの人生は祝福され、豊かにされるでしょう。心と魂で、ジャングルでの彼らの質素な生活に参加し、大きく広がる熱帯雨林の上空を飛び、町に潜む盗賊が襲撃したときの天使の守りを経験して、神様はあなたもお守りになるのだということを知ってください。

デイビッドや彼の家族、またアメリインディアン〔アメリカ大陸先住民〕のために祈るとき、あなたに与えられている祝福を数えてみてください。そして、「神様が私にするようにと召してくださった働きにおいて、神様の導きに変わらぬ信頼をおくという平安な生活を体験しているだろうか？」と自分自身に問いかけてみてください。

イスラエル・レイトー
セブンスデー・アドベンチスト中部アメリカ部局長

2001年９月
フロリダ州マイアミにて

最近の家族写真
2001年カトリーナのローレルブロックアカデミー卒業式にて
後列左からケイティ、カルロス、リナ
前列左からベッキー、カトリーナ、デイビッド、クリストファー

メキシコへ飛び立つ飛行機（セスナ 185）の中で

目　次

1 章	ハイジャック！	5
2 章	回顧の時	16
3 章	刑務所で	24
4 章	ベッキーを想って	32
5 章	刑務所での挑戦	42
6 章	暗雲の切れ目が	53
7 章	長い、長い夜	58
8 章	再び家へ！	67
9 章	神様のそばの天使たち	72
10 章	過大なストレス	81
11 章	新しい運営のもとで	87
12 章	ガイアナアドベンチスト医療飛行機サービス（GAMAS）生まれる	97
13 章	マイアミからカイカンへ	104
14 章	デイビスインディアン実業学校	110
15 章	闇の中での悩み	122
16 章	ジャングルでの暮らし	125
17 章	ヨルダン川が分かれる	134
18 章	驚きと病	145
19 章	神様により前進	151
20 章	犠牲への召命	156
21 章	テレビ伝道の奇跡	163
22 章	無限	170
23 章	吼えたける獅子	177
24 章	神様に難しすぎることがあるだろうか？	180
25 章	神様はまた働かれた	189

1章

ハイジャック！

「きれいですね。教授！霧が高原をおおっていますよ」

20代半ばのアメリカ人ミッションパイロット、デイビッド・ゲイツは、セスナ185スカイワゴンの操縦席で前方にもたれかかり、地平線をじっと見つめました。厚い雲が南メキシコのシエラ・マドレ山脈の上に重くのしかかっています。

「このあたりは1日中、たくさん雨が降ったに違いありません」と彼は続けて言いました。「自分たちの病院の滑走路は小規模で、着陸するにはかなり危険です」とデイビッドははっきりしたボリビア訛りのスペイン語で、操縦席の隣に座っている年配のメキシコ人に話しかけました。

「機長！どうしたのですか？」

「滑走路が低地にあるので、もし丈の低い草が水で覆われていたら、表面は氷のように滑りやすいのです。たとえ着陸速度が遅くてもブレーキは使い物になりません。飛行機を制御できないし、木に突っ込むでしょう」。10年以上のパイロット経験から、デイビッドは直面している危険性がわかり、緊迫した面持ちで座っていました。

「それでは私たちはどうするのですか？」とチャンテ教授は尋ねました。

「その周辺を低空飛行で何度か旋回します。高台のほうに平坦な場所を見つけられるかもしれません」。飛行機は高度を下げ、雲の下に出ました。

「あそこですよ」と、彼は左側を指差しました。沈みかけている夕陽が教会病院、高校、看護学校をひときわ浮きあがらせていました。敷地の境界周辺に医者や看護師、その他の働き人の住んでいる

家がひとかたまりになっていました。「滑走路の近くのあの小さな家がわかりますか？あそこが私の家族が住んでいる所です。きっとベッキーや子供たちが今空を見上げていますよ。飛行場で私のラジオの修理が終わらなかったので、彼女に電話することができなかったのです」。デイビッドはもう一度、今度はもっと低空で家の辺りを旋回しました。

「やっぱり思ったとおりでした。草地を水の膜が覆っています。あそこに着陸するのはもってのほかです。しかしまた無防地帯に飛行機を置いていくのも危険です。唯一安全な場所は格納庫の中です」

「その通りですね。この数ヶ月の間に何機かの個人飛行機がハイジャックされたと聞いています」とセブンスデー・アドベンチスト教会学校の責任者である教授は同意しました。

「燃料計が最低使用燃料値を示しています。暗くなっているし、明かりがないので、どうするか今、決めないといけません」

その時、「あなたがたを召された方は真実であられるから、このことをして下さるであろう」という、デイビッドの好きな聖書の約束が頭にひらめきました。

「ありがとうございます、主よ。どうぞ正しい決断ができるように助けてください」と、デイビッドは心の中で祈りました。

「病院に並行する道路があります。高台にあるし、乾いています。また夜のこの時間にはめったに車は来ません」。デイビッドは誰かが手を振っているのを見るまで、学校の上空を旋回しました。それから目を凝らして道路を見ました。１台の車もありません。地面に向かって降下し、着陸し、道路わきの広い場所に飛行機を止めました。まもなくひとりの教師と警備員がトラックで到着しました。

「滑走路に着陸しなくて良かったですよ。１日中雨が降り続いていました」と警備員は言いました。「私が今晩飛行機に残ります。中に閉じ込めて鍵をしめていいですよ」

「いつでも出たいときに出られますよ。ただノブを回すだけだから」とデイビッドは言いました。しかしおびえた声で警備員は叫びました。「いいえ、だめです。自由に出入りができることを誰にも

知られたくありません。このあたりでは安全というものはないのですから」
「私は朝早く戻ってきます。おやすみなさい。神様が共にいてくださいますように」と、デイビッドは呼びかけました。
デイビッドは青々と茂った緑のキャンパスを、砂利道に添って通り抜け、遠くに暗くなっていく山並みを見上げました。彼が家の木戸口に近づくと、「お父さん！お帰りなさい！」と幼い娘ふたりが喜びの喚声を上げました。１歳のカルロスは両手を広げて、丸々と太った足でヨチヨチと歩いてきました。みんなにこにこ笑っています。金髪の美しい彼らの母親が愛する人に会うために走ってきました。
デイビッドはひとりひとりを抱きしめ、それぞれにキスをしながら、「王様でもこんな出迎えはしてもらえないよ」と、喜びにあふれて言いました。ベッキーはみんなを夕食のテーブルに向かわせました。デイビッドがお祈りした後、ベッキーは子供たちの食べ物を整え、デイビッドの隣に座りました。彼女は彼の手を握りしめ、ほほえみました。
「あなたの飛行機が着陸する音を聞くといつもわくわくするの。そして神様に感謝の祈りをささげるのよ」
「僕は君の横に座って、君の美味しい料理を食べながら、子供たちのおしゃべりを聞いていると、天の喜びのようなものを感じるよ。今日起きたいろんな問題の後では、これは安らぎだね」
食事が済んだ後、「片付けは後にして、さあ、リビングルームに行ってお父さんの話を聞きましょう」と、ベッキーが提案しました。３人の子供たち全員がわくわくして父親を見上げながら、膝によじ登りました。
「何度も何度も女の子の膿んだ歯を抜こうとしたけどダメだった。歯の根っこが曲がっていて、それが先のほうでつながっていたんだよ。あごの骨を砕かなければならないかもしれない。でも痛くて女の子が叫んだとき、できるだけ早く手術のできる歯医者さんと一緒に戻ってくると約束したんだ。その喜びようを見たら、今日あちこちたくさん立ち寄らなければならなかったけど、十分報われたよ」

「そんなに痛くてかわいそうに・・・。イエス様が治してくださるようにお祈りするわ」と、いつも同情的な小さいリナが話をさえぎりました。
「ありがとう。お祈りしてくれるとうれしいよ」。そしてデイビッドは続けて言いました、「教授とお父さんは、教授の助けを必要とし問題と向き合っている、遠く離れたいくつかの学校を訪問したんだ。明日もう少し訪問するところがある。明日は燃料が必要だから朝早く出発しないといけない」
「眠い人たちがいるようね。みんな寝る時間だわ。子供たちはお父さんになかなか会えないので、起きてあなたを待っていてもいいと言ったの」と、ベッキーが笑顔で言いました。

＊＊＊＊＊＊

次の朝６時、ふたりの高校生がゲイツ家のドアをノックしました。
「機長。あなたの飛行機の周りに兵士がいます。あなたの書類を見たいと言っています」
「大丈夫！すぐにそこに行くと言ってくれないか」
デイビッドはベッキーの方を振り返って、「書類は確かに全部きちんと整っているから。えーと」と、指で数えながら言いました。「アドラの働きに感謝しているこの国の大統領の手紙は持っているし、加えてアドラからの信任状もある。民間航空の責任者からの認可も得ている。１つは移民局から、もう１つは税関から。ここで飛行機を運用するのに必要な書類は全部整っている」
デイビッドはドアのほうに向かって歩き出しました。それから立ち止まって、ベッキーのほうへ戻ってきました。「君にキスをするのを忘れるところだった。万が一、もう会えないといけないから、君にキスをしたい・・・」と、デイビッドは冗談を言いました。冗談を言ったものの、彼はしばらくの間ベッキーをしっかり抱きしめていました。ベッキーはそのことについて何もおかしいとは感じなかったと後で言いました。それからデイビッドは外に出て教授に会いました。生徒たちと一緒に彼らは、学校のトラックで飛行機を置いてきたところに行きました。

「おはようございます。皆さん」。デイビッドは飛行機のそばに立っている兵士たちに挨拶をしました。「私の書類を見たいのですよね。全部そろっていますよ」。責任ある立場の将校が書類を受け取り、注意深く見ました。そしてデイビッドが真実を言っていると認めました。デイビッドは名札でその将校の名前がゴンザレスであると気がつきました。

ゴンザレスは、「あなたは２年前にこの飛行機を操縦していたパイロットですか？」と尋ねました。

「いいえ。私はこの飛行機を１年半しか操縦していません。前のパイロットは２年ほど前に去りました。私はデイビッド・ゲイツです」。デイビッドの返事に、彼は困惑した表情をしました。将校が無線機で話している間､兵士たちは自分たちのトラックに戻り、寄り集まって話をしていました。それから兵士たちはデイビッドと教授のところに戻って来ました。「私たちは指示を待たねばなりません。ここで待っていてください」と将校が言いました。

「すみません、今日はいくつかの緊急要請が入っています。たった今電報が届き、ひとりの男性が危篤状態で彼を搬送しないといけません。また歯が感染症になっている女の子を助けたいのです」

「それでも、司令官が命令を下すまでここを動くことはできない」と将校は言いました。

デイビッドは遅れていることにイライラしました。兵士たちが待っている間、彼は気をもんで飛行機の周りを行ったり来たりしていました。彼は将校のほうを振り返って、「あなたたちは夕べずっとここにいたのですか？」と尋ねました。

「はい」と答えが返ってきました。

「夕食か朝食は食べましたか？」と尋ねると、「何も食べていません」と将校は答えました。

デイビッドは兵士の数を数え、近くに立っている生徒のひとりを呼んで言いました。「病院に行って、これらの兵士たちのために10人分の食事を持ってきてくれないだろうか？彼らはおなかが空いている」。生徒たちはトラックに乗り込み、走り去っていきました。

しばらくして彼らは、兵士たちひとりひとりの朝食を携えて戻ってきました。デイビッドはそこを通り過ぎようとしていたトラック

を止めて、ひと箱の炭酸飲料を買いました。彼はひとりひとりの兵士にそれを手渡しました。彼らの食事が終わり、ジュースを飲み終えると、将校ゴンザレスがデイビッドに笑いかけ､｢おいしい食事だった。ありがとう｣と、言いました。

やっと兵士たちは、無線で司令官の声を聞きました。トラックに駆け戻り、しばらくそれを聞き、そしてメッセージを持って帰ってきました。

「司令官はあなたに特別な滑走路に飛ぶように言っています」

デイビッドはその場所の名前がわかりました。

「でもそれは閉鎖されている滑走路ですよ」と彼は答えました。

「司令官はそこで私たちに会います」

不安の念がデイビッドを襲い、冷や汗が出てきました。武装した兵士たちに囲まれて閉鎖されている滑走路に着陸！何か恐ろしくひどいことのようだ。

「将校、むしろそこからちょうど５マイル（８ｋｍ）離れている民間の滑走路に着陸したいのですが。私が別の滑走路に行く理由は何もないし、書類は全部そろっているのはおわかりでしょう。だから問題は何もないはずです」

「あなたはすぐ戻れます。司令官が書類を調べる間のほんのわずかの滞在です」。デイビッドは将校を信じませんでした。時間が経つにつれて彼はますます不安になり、彼らの要求を拒み続けました。

ついにひとりの兵士がデイビッドの背中に銃をつきつけ、「飛行機に入れ」と命令しました。

彼はもう選択の余地がないことがわかりました。議論は無駄なようでした。将校ともうひとりの兵士が飛行機の後ろの席に乗り込み、教授とデイビッドは操縦席に乗りました。「習慣なのですが」とデイビッドは後ろの席の兵士ふたりを見ながら、「いつも飛行機に乗る前には天の神様の守りをお祈りしています。帽子をとり、目を閉じてもらえませんか？」と言いました。兵士たちはデイビッドに従いました。「天の神様、兵士ひとりひとりの上に、教授の上に、そして私の上に神様の祝福がありますように。天使が私たちを危険と悪から守ってくださいますように。イエス様のお名前によって感謝してお祈りします。アーメン」

デイビッドは懸念を抱いたまま離陸しました。修理のために無線を飛行機から取り外してあったので、彼の状況や目的地を誰にも知らせる方法がありませんでした。ベッキーと話すための何かが与えられていればよかったのですが・・・。

飛行中、デイビッドはあたかも無線で連絡を取り合っているかのように行動しようと決心しました。マイクを口のところに持ってきて、教区事務所を呼んでいるふりをしました。「どうぞ、私たちが閉鎖中の滑走路へ向かっていることを、今すぐメキシコ市に通告してください。書類上の問題があるのかもしれません。それを処理する弁護士を急遽送ってください」

将校ゴンザレスはデイビッドの後ろに座っていて、ひと言ひと言注意深く聞いていました。彼はデイビッドが通じていない無線に話しているとは知りませんでした。「了解、了解。数分の内に着陸します。どうぞすぐに法的な助言者を送ってください」と、デイビッドは無線を終えました。

閉鎖中の滑走路に着陸することをいまだにためらいながら、デイビッドは後ろにいる将校に、「民間の滑走路に着陸します」と言いました。

「いけない。それはできない。私は指示したところに着陸するようにと司令官から命令されている」

「でもあなたは私にすぐ家に戻るだろうといいました。燃料が必要です。十分にありません」

「ダメだ！司令官の言ったところに着陸しなさい！」と彼はきつく言いました。

「だったらあなたは私を銃で撃たないといけませんね。私は他の滑走路に着陸しますから」将校ゴンザレスの動きがひどく神経質になってきました。

民間空港に着陸して、デイビッドは飛行機に燃料を入れました。彼は将校の携帯無線に叫んでいる司令官の声を耳にしました。「なぜ彼をそこに着陸させたのだ！」と、その声は怒って叫んでいました。「パイロットが、燃料が必要だと言って命令に従わなかったのです」と、ゴンザレスは説明しました。

デイビッドは空港のタクシー運転手にそっと話しました。「注意して聞いてください。私はハイジャックされました。私の妻か教会病院の誰かに電話して、空軍基地に拘束されるだろうと思うと伝えてください」。デイビッドは誰かが彼を探し出してくれるだろう、あるいは適切な人に連絡してくれるだろうと確信しました。

飛行機の後部に４人の男を乗せ、デイビッドは離陸し、閉鎖中の滑走路に向かいました。着陸するや否や、デイビッドは頭がふらふらするような感情の波を感じました。ひとりの兵士が、「すみませんが、飛行機から降りて、ここに立ってください。手錠をかけるので両手を背中の後ろに回してください。あなたに目隠しをする間、おとなしく壁に向かって立ってください」と丁寧に命じました。それからデイビッドは、「彼の背中にマシンガンを突きつけろ。もし動いたらともかく撃て」というもう１つの命令を聞きました。

（これは現実だろうか？）とデイビッドは思いました。彼が身動きもせずじっと立っていると、兵士たちががさごそと音を立て、飛行機の中をくまなく探しているのが聞こえました。しばらくして彼らは、デイビッドと教授をトラックの荷台に乗せました。その地域の道路を知っていたので、デイビッドは、空軍基地に彼らを連れて行くルートに向きを変えていると気がつきました。彼は聖書が語っているバプテスマのヨハネの事を考えました。「この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである」（ヨハネによる福音書１：７）。（神様、どうかこれから何が起きようとそばにいてくださり、あなたを証しできるように助けてください）と彼は祈りました。

トラックが止まり、兵士たちは目隠しをしたままの彼らを連れて、低いドアの並んだ長くて狭い廊下を急ぎました。頭をぶつけるのを恐れて、デイビッドはできるだけ低く身をかがめました。やっと部屋に入りました。

「座れ！」と荒い声の尋問者が彼らに命令しました。しばらくして、看守がデイビッドを残したまま、教授を別の部屋に連れて行き、すぐに尋問が始まりました。１時間の間、兵士たちがデイビッドに質問をしました。それから今度は教授に１時間の尋問をしている間、デイビッドを他の部屋に移しました。このサイクルを何度も繰り返

しました。デイビッドは、（これはよく練られた計画の一部だ）と心の中で思いました。
　多くの的外れの質問に困惑しながらも、デイビッドは神様に知恵を求めながら注意深く答えました。
　「お前たちはみんな善良な人たちなんだろう？」
　「そうです」。
　「違法なことは何もしていないだろうな？」
　「もちろんしていません」
　「だがお前は聖書を配った」
　外国人が聖書を配ることは法律で禁止されていると知っていたので、デイビッドは自分ではそのようなことは一度もしていませんでした。それで彼は、「いいえ、私は一度もそのようなことはしていません。私は有資格の看護師で、医療の働きをしています」と答えました。
　「彼は聖書を配っていたと書け」
　「もしそう書くなら、私はその書類にサインをしません」
　「わかった。取り消せ」
　尋問のやり取りは１日中続きました。ついに将校ゴンザレスはすべてを止めました。彼の声は親切そうでした。「この人たちは何も食べていないだろ？彼らは今朝私たちにおいしい朝食を食べさせてくれたのだ。少なくても彼らに昼食を与えよう。もうひとりの男を連れて来い。彼らの目隠しをはずして、手錠を前のほうに移せ。チキンサンドイッチでいいか？」
　教授は「はい、ありがとうございます」と答えました。
　デイビッドは「えり好みをすると思われたくないのですが、もしかまわなければ、私には卵サンドイッチを作ってくれませんか？」とつけ加えました。
　「かまいませんよ。彼にはチキンサンドイッチを持ってこい。パイロットには卵サンドイッチをあげるように」
　サンドイッチを二、三口食べた後で、デイビッドは、ポケットに友人や教会指導者の連絡先が書いてある小さな紙切れを入れていたのを思い出しました。小さな字でたくさんの名前、電話番号そして住所が書いてありました。敵の手に渡ると情報が悪用されてしまう

可能性がありました。彼は偽りの罪で教会関係者だれひとりとして逮捕されてほしくありませんでした。
（どうしようか？神様、知恵が必要です）と彼は考えました。アイデアが頭に浮かびました。部屋を見渡しました。兵士たちは自分たちの間で静かに話しをしています。彼は手錠をかけられた両手をポケットに伸ばして、小さな一片の紙切れを取り出し、それを卵サンドイッチに押し込み、そのまま食べました。噛み応えのあるサンドイッチを食べた後、彼はホッとしました。
食べ終わると、彼らはまた目隠しをされ、背中の後ろで手錠をかけられ、教授は尋問室に押し込められました。１時間サイクルの尋問がまた始まりました。午後遅く、デイビッドは尋問に対する教授の答えを初めて聞くことができました。たまたま誰かがドアを半開きにしておいたのでした。
「私はゲイツ機長をほとんど知りません。先日初めて会ったばかりです。彼が何をしているのか私は知りません」
デイビッドは身をよじりました。教授と彼は、デイビッドがミッションパイロットとして働き始めてから、ずっと一緒に親密に働いてきました。（彼は恐怖のあまり精神的に参っている。励ましが必要だ）とデイビッドは思いました。
兵士たちがさらに質問するためにデイビッドを連れにきたとき、彼は教授に話しました。「真実を話さないといけません。もしあなたが真実を曲げ始めたら、神様はあなたを守ることができません。あなたが偽りを言っていると彼が察知したら、あなたは自分自身を痛めつけることになります。私たちは天使が私たちを取り囲んでいるのを知っています。兵士たちは神様の許しがなければ私たちに触ることはできません。事実、今私たちは捕虜の身ですが、本当は彼らが捕虜であり、神様が彼らに許されたことしかできないのです。どうぞ、真実を話すことを恐れないでください」
教授は顔を尋問者のほうに向けて、「すみません。私は真実を言うべきでした。私はデイビッド・ゲイツと一緒に仕事をし、彼をよく知っています。ほとんど２年間、私たちはすべての事を一緒にやってきました。どうぞ私の陳述を訂正してください。私は怖かったのです」と言いました。将校ゴンザレスは全てを削除しました。

それから目隠しが取り外されました。デイビッドは、秘書が古いタイプライターで20ページほどタイプしたのを見ました。兵士たちが言ったことからは、なぜデイビッドが逮捕されたかの手がかりはいっさい得られませんでした。

「それを読んで、あなたの署名をしなさい」と将校は言いました。

デイビッドと教授は命じられたとおりにしました。そして彼らはまた目隠しをされ、兵士たちにトラックの荷台に連れて行かれました。デイビッドは、彼らは刑務所へ向かって山越えの長いドライブをしているのだろうと思いました。町を通り抜けているときには周囲の音でそれとわかりました。たった数マイル離れたところに、彼の大切な妻と、小さな女の子ふたり、リナとカトリーナ、そして新しく養子にしたカルロスが彼を待っていました。父親のヤコブが住んでいる丘を過ぎ、商人がヨセフをエジプトに連れて行ったとき、ヨセフがどのように感じたか、今わかったような気がしました。デイビッドが神様の知恵と導きを祈ったとき、なぜ神様はこのようなことを許されたのでしょうか？神様はちょうどヨセフを送られたように、神様を知らない人たちへの証として、彼を見知らぬ所へ送る計画を持っておられたのでしょうか？

困惑し、寂しさを覚え、デイビッドは家族と一緒にいたいと願いました。心は破れんばかりでした。もう一度彼は家族に会えるでしょうか？

２章

回顧の時

デイビッドと教授が運転台の方に身を寄せて体を丸めていると、雨が激しく降っていました。曲がりくねった道路と低速ギアが、山越えの行程に入ったことを物語っていました。デイビッドはその朝、コートも着ずに半袖シャツで家を出ていました。彼は冷たい風が骨の髄まで染み入るのを感じ、震え始めました。

「機長、寒そうですね」と兵士が言いました。

「あぁ、少し寒いね」と彼は答えました。

兵士は自分の上着を脱ぐと、デイビッドの体の前面を覆うようにそれをかぶせ、やさしそうな声で、「私の上着を着なさい。持っていていいですよ」と言いました。

「どうもありがとうございます」とデイビッドは大きな声で言いました。そして、（主よ、昼食を与えてくれたり、この兵士が自分のコートを貸してくれたり、これらの親切な行為はあなたがすべてご支配していらっしゃることを示しています。この旅で出会う恵まれない人たちに小さな親切ができる洞察力を与えてください）と彼は心の中で祈りました。

目隠しをされたまま、その夜、曲がりくねった山道をガタガタと進む車の中で、デイビッドは考えました。（これから先何が起こるか心配することはない。）彼はそれを神様のみ手にゆだねました。暗闇と寒さの中で愛するベッキーに心を集中しました。大事にしている思い出を思い起こすと、長い年月が消え去り、思い出がありありとよみがえってきました。

デイビッドは、自分が赤ん坊のときに神様の奇跡によって救われた話を両親が語ってくれたことを思い出しました。彼は生まれつき

の腸閉塞と軸捻転（小腸が断続的に閉塞することと盲腸が左側に位置していること）で、腸のぜん動運動がありませんでした。すなわち腸内の食物を送り出す神経回路の働きが機能していなかったのです。医者は出産後の母親に、「ゲイツ夫人、あなたのご長男は生きられません。回復手術を試みましたが、多分生きることは無理でしょう」と言いました。

医者はデイビッドが生後３週間のうちに３回もの手術を彼に施しました。まず小腸の手術をしましたが、成功しませんでした。その次に、機能しないかなりの部分の腸を切り取りましたが、なんの甲斐もありませんでした。３度目に胃の一部を作り変えて腸に食物が重力で流れていくように工夫したものの、それも全く機能せず、生後３週間食物は何も腸を通りませんでした。

「残念ですが、私どもにできることはこれ以上何もありません。あなたのお子さんは助からないでしょう」と、医者は悲しげに言いました。

母親はその当時メリーランド州にあるワシントンミッショナリー大学で看護教師をしており、父親のチャールズは近くの神学院で学んでいました。信仰を持って、デイビッドの両親はレスリー・ハーディング医師に彼らの赤ん坊のために油を注ぎ、癒しの祈りをしてくれるように頼みました。すると 24 時間たたないうちに、看護師は初めて腸のぜん動運動の音を聞きました。医者は赤ん坊の腹部のレントゲン造影をするように指示しました。医者は驚きでぞくぞくしながら、「盲腸は正しい位置に戻っているし、この赤ん坊のぜん動運動をつかさどる神経回路は全く機能していなかったのに、もう腸は正常に機能している！」と、叫びました。続けてこの懐疑的な医者が、「もし神が存在するなら、神がこの赤ん坊の命を救われたのです。神は彼のために偉大な計画を備えていらっしゃるにちがいありません」と言いました。

宣教師であるデイビッドの両親は、わずか１歳の彼を連れてボリビアのジャングルに行きました。デイビッドはスペイン語を話して育ちました。牧師であり、ミッションパイロットであった彼の父親は、デイビッドが３歳のとき、低地のジャングルから家族を連れてラ・パズの街を訪問しました。海抜 14,000 フィート(約 4,300m)の

高地でこの小さな男の子は高山病にかかりました。そこで初めてちらっと見た金髪のかわいい女の子を、今でも彼は覚えています。その少女の母親が、「デイビッド、私たちの娘、６歳のベッキー・スーよ」と彼に紹介しました。

ベッキーはゲームやパズルを持ち出してきましたが、遊び始める前に、「あなたの髪を整えてもいい？」と、笑顔で言いました。母親のような彼女の気配りは、デイビッドをいい気持ちにさせてくれました。

その後で彼女は、「指に絵の具をつけて絵を描きましょう！窓から見える、雪をかぶったお山を描くことができるわ」と誘いました。彼女は色々なアイデアで、デイビッドが頭痛と吐き気を忘れるまで彼の注意を引きつけていました。

ボリビアで 10 歳のデイビッド

セブンスデー・アドベンチスト・ボリビアミッションの会計士であるベッキーの父親モンロー・デール・ダッカーソンは、デイビッドが住んでいるジャングルの低地をよく訪問しました。彼はたまに家族も連れてきました。そんな時、デイビッドが喜んで自分の計画を話すと、ベッキーはそれに合わせました。彼らは素足でジャングルを歩きながら、花を集めたり、色とりどりの蝶や珍しい虫を捕まえたり、また時には一緒にぬり絵をしたりしました。

「アイスクリームやガムを買うのにお金が要るね。何かいいアイデアがある？」と、ある日デイビッドはベッキーに尋ねました。

「わたしのかわいい猿のジョジョの絵を描きましょうよ」と、ベッキーは提案しました。絵を描く間、ジョジョがじっとしていなかったので少し時間がかかりました。

ジョジョの絵を描き終えるとデイビッドが、「僕らが描いた君のペットの絵が気に入ったよ。いい考えがある！缶詰のふたを探して、穴を開け、その穴に額になるように糸を通すんだ。そのふたの額に僕らの猿の絵と一番うまく描けたぬり絵を貼り付けて、それを売ろうよ」と言いました。この幼い事業家たちは村の家々で立ち止まりながら、多くの買い手を見つけました。

ゲイツ家とダッカーソン家は一度、病人の手当をするためにそれぞれの村に立ち止まりながら、小型のモーターボートで一緒に伝道旅行をしたことがあります。その旅の途中でデイビッドは５歳の誕生日を迎えたのを覚えています。デイビッドとベッキーのふたりは、少し大きくなってからは、ボートのへさきから魚釣りをするのが好きでした。デイビッドは自分たちが釣った魚を水に投げ入れて、魚が泳いでいくのを見ながらベッキーの笑い声を聞くのが好きでした。

「木の上に家を作ろうよ」、ある日デイビッドが言いました。

「でも、あの高さの木には登れないわ」とベッキーが反対しました。「違うよ。木を切り倒して、枝のなかに家を作るのさ。斧となたの使い方は知っているよ」とデイビッドは答えました。ボリビアのジャングルには何百万本という木があったので、この小さな建築家たちは心置きなく１本の木を切り倒しました。木が倒れるまで３日間、なたや斧を振るいました。枝の中に心地よい木の家を作るため、今は地に横たわっている木に素足で登るのは簡単でした。しかし木の葉が枯れてしまうと、その家はもうあまり魅力的でなく、彼らは他の冒険に向かっていました。

ミッション本部が低地に土地を買い、二家族は牛牧場を始める仕事に携わりました。地元の学生はここで、学校に通う学費を稼ぐために１年間働くことができました。ベッキーの家族は小さな家に住んでいたので、デイビッドの家族が尋ねてきたときは、子供たち全員が同じ部屋に寝なければなりませんでした。

「すごいわ！寝る前にお話しながら楽しめるわ」とベッキーがくすくす笑いました。その夜、デイビッドはベッキーの上のハンモックで寝ました。デイビッドを眠りにつかせるためにハンモックを揺らそうと、ベッキーは足でそれを押していましたが、突然デイビッドは気分が悪くなり吐いてしまったのです。デイビッドに吐き気をも

よおさせたと責められるのを恐れて、ベッキーは寝たふりをしていました。

デイビッドが８歳になったとき、「僕が大きくなったら君と結婚したいけど」とベッキーに伝えました。「結婚？わかったわ。大きくなったら喜んであなたと結婚するわ」と 11 歳の女の子は答えました。

ベッキーに婚約プレゼントをあげなくてはと考えながら、デイビッドはサンタ・アナの小さな町の店に貯金を持って行きました。

「香水がほしいんです」

「香水がほしいって？もうガールフレンドがいるのかい？」と店の主人が尋ねました。

「そんな感じかな・・・」と彼は冷静に答えました。

自分の買い物に満足して、彼はきれいな小瓶の香水をベッキーにプレゼントしました。数日して、ベッキーの兄のジミーが、「君がやった香水を妹がどう使っているか知っている？ペットの猿をシャワーに入れた後、その猿に香水をつけているんだよ」とデイビッドに話しかけました。

ベッキー、15 歳、猿のジョジョと

デイビッドは、彼女は婚約プレゼントを猿に使っているんだと悲嘆にくれました。彼は女の子のことがわかっていなかったし、ましてこの猿がベッキーにとって、どれ程特別かということを理解していませんでした。７年間彼女はどこへ行くにもその猿ジョジョを連れて行き、身づくろいをしてやり、心から愛していました。毎週金曜日彼女は自分がシャワーをとった後、ジョジョをシャワーに入れました。自分に香水をつけてから、ジョジョにも香水をつけまし

た。
　ベッキーが 13 歳になったとき、父親がカルフォルニアのロマリンダで勉強できるようにと、一家はアメリカに戻りました。ベッキーは高校時代、ルイジアナ、アーカンソー、ケンタッキーそしてテネシーと多くの学校を転々とし、デイビッドとベッキーは何年間もお互いに会うことはありませんでした。彼は、ベッキーが愛のプレゼントの香水を拒んでいなかったとはつゆ知らず、何年も後になって、彼女の動機がわかりました。彼女は、彼女の大切なプレゼントを自分が一番愛している動物と分かち合っていたのでした。
　デイビッドが 11 歳のときに、彼の一家はミシガンにあるアンドリュース大学へ向けて南アメリカを離れました。後に彼らはテネシーのカレッジ・デールに 10 年間住みました。デイビッドは再びベッキーに出会ったとき、ゾクゾクしたのを覚えています。しかし時と環境は彼らを変えていました。そして彼は気まずいものを感じ始めていました。サザン・ミッショナリーカレッジの学生である彼女が、高校生の男の子に興味を持つだろうかと。
　ベッキーは内心、まだデイビッドに対して特別な感情を抱いているとわかっていました。毎年デイビッドの誕生日には彼のことを思い、また昔のお互いの約束の事を考えていました。彼らはやがて一緒になれるでしょうか？
　ある安息日、大学のそばに住んでいたゲイツ一家は、ベッキーと彼女のルームメイトのジョイを昼食に招待しました。食事の後、「乳牛を飼っているんだ。一緒に来ない？」とデイビッドは話を持ちかけました。
　彼らが納屋に向かって歩いているとき、デイビッドはジョイに向かって「君の長い金髪はとてもきれいだね・・・」と言いました。ベッキーは嫉妬のうずきを感じ、（彼は彼女の事を気にかけている、私ではない！）と思いました。
　その時、彼女は自分の短い髪を伸ばす決心をしました。
　デイビッドもベッキーも、子供の頃の約束については何も口にしませんでした。年齢や教育の違いがあまりにも大きいように思われ、そして互いに他の人とデートしていました。がっかりしながら、デ

イビッドはもはやベッキーと結婚するチャンスはないのだと結論づけました。
　実際、彼らがたまたま出会うときにはいつも、友人として簡単に挨拶するぐらいでした。しかしたとえ彼らがおしゃべりをしても、ベッキーは、（彼はまだ子供で、今は私なんかに興味がないんだわ）と思いました。そしてデイビッドは、彼女にとって自分は若すぎると思っていました。彼らの子供時代の夢は終わりを告げているようでした。
　突然トラックがスピードを落として停止し、デイビッドの心地よい空想が破られました。門がきしむ音が聞こえ、彼らは刑務所に着きました。将校ゴンザレスは彼らの目隠しをはずし、自分についてくるようにと言いました。デイビッドは彼の腕時計をちらりと見ました。朝の３時！男たちは友だちのように話しながら進んで行きました。彼らが入るとき、刑務所の看守が挨拶をしました。
　「囚人２名を連れてきた。彼らをそこの監房Ａに入れなさい。だが、その監房のドアの鍵はかけないように」と将校は言いました。
　「将校、どういう意味ですか？彼らは囚人です。彼らの監房の鍵をかけないようにとおっしゃるのですか？」
　「ああ、この紳士たちは逃亡しない。またドアは開けたままにしておくように。これは命令だ。わかったか？」
　「はい！」
　将校は去るとき、大声で「おやすみなさい。紳士の皆さん！」と言いました。
　看守はデイビッドと教授のところに歩みよりました。
　「私は長い間ここで働いているが、ドアの鍵をかけない囚人は初めてだ。奇妙なことだ。だがひとつ言っておく。ドアの外に足を出すな。出したらお前たちを撃つ」と言いました。
　自分のベッドに横たわり、デイビッドは教授のほうを向いて、「逮捕されて以来３度目の親切な行為ですね。将校の態度は、私たちは囚人ですが、本当の囚人ではないことを示していませんか？確かに神様のみ手がこの背後にあります。今はわかりませんが、神様が計画を持っていらっしゃると確信できます。神様が私たちを召さ

れ、そして神様は忠実な方なので、私たちは神様に信頼できます。
ご自分の時に、神様はそれをなさるでしょう」と、言いました。

３章

刑務所で

デイビッドと教授はその監房に２日間いました。彼らは聖書の約束を語り合いながら時を過ごしました。神様はこれから先のために、彼らの信仰を力づけようとして小休止を与えられたのでしょうか。それともバプテスマのヨハネのように、「光についてあかし」（ヨハネ 1:8）する備えをするために、刑務所での時間を与えておられたのでしょうか。「神を愛するものたち、ご計画に従って召されたものたちと共に働いて万事を益としてくださる方が、どのようにして働かれるのか見るのは興味深いことです」とデイビッドは言いました。

３日目に看守が、「ついて来い」と命じました。

彼らを乗せたトラックは地方検事の事務所がある近くの町へ行きました。審問室では多くの事務員たちがタイプライターを打って働いていました。ひとりの事務官が立ち上がり、デイビッドと教授の告訴文を読み始めました。その時初めて、なぜハイジャックされたかがわかりました。

「お前たちは、飛行機の使用を含め、いくつかの罪で告訴されている」。デイビッドは、彼らが考えつくことができる限りのあらゆる違法活動を並べ立てるのを聞きました。「お前たちは、このすべての罪で告発されている」と、単調な口調で事務官が言いました。

デイビッドは、自分が今まで一度も飛行機を不法に運用したことはないのを知っていました。しかし審問責任者は一度も彼らに発言の機会を与えませんでした。（この政府の役人たちはまるで至近距離から銃を撃ちまくって、いっせいに弾丸を浴びせかけようとしているようだ）とデイビッドは思いました。

「告発が真実であるのを証明する証人がいる。彼は喜んでお前たちの事を証言するだろう」。デイビッドは、やはり囚人であるひとりの男の名前を聞きました。
「彼らを刑務所に連れて行け」と、役人は言いました。
デイビッドはその証人の名前を記憶し、自分で疑いを晴らそうとしました。（刑務所に着いたらその男と会い、なぜ彼が全く嘘の証言をしたのか探り出そう。）
トラックに戻ると、デイビッドは自分たちが政府の刑務所に連れて行かれることがわかりました。刑務所に入って行くとき、デイビッドは、（嘘の証言をした男を捜さなければならない）と改めて決心しました。看守は背後のドアを閉め、彼らの指紋を取りました。その瞬間から、自分を告発した男と対決しようという思いはデイビッドの心から消えてしまいました。
看守はデイビッドと教授を刑務所の奥に連れて行きました。すぐに他の囚人たちが一塊りになって、彼らの周りに集まってきました。「お前さんたちは大物犯罪者だ！」と彼らは叫びました。
「どういう意味ですか？」とデイビッドは尋ねました。
彼らの手には最近の新聞が握られていました。第１面に「セブンスデー・アドベンチスト病院が医者や看護師、飛行機などを不法活動に使っていた疑い。彼らは、犯罪を犯すように看護学生を訓練している。機関の指導者を逮捕」という見出しがありました。
デイビッドは、これは神様の教会の名誉を汚す政治的な策略だとわかりました。
「あなたがたは、新聞の１面に書いてあることを読んで全部信じているのですか？誰かが嘘を言っているのです。私たちは教会の宣教師です。これが真実です」と、デイビッドは囚人たちに向き直って言いました。
「いいや、違うね。わしらはお前さんたちが金を持っているのを知っているさ。いい服を着ているじゃないか。それが、他の犯罪者と同じようにお前さんたちが金を持っていることを証明している」と囚人が言いました。
「いいえ、私たちはお金を持っていません」
「いいや、お前さんたちはたくさん金をもっているはずだ」

「悪いけど、あなたがたは間違っています。私たちは犯罪に関与したことは一度もないし、お金も持っていません」
　囚人の代表者が、叫びました。「お前さんたちに聞いてもらいたいことがある。この刑務所では入所者のわれわれがすべての事を運営している。お前さんたちはわれわれに金を支払う必要がある。もし金を払わないなら、１日２回すべてのトイレを掃除しないといけない」
「それで？」とデイビッドは答えました。
「お前さんたちはトイレの掃除なんかしたくないだろう？お前さんたちは明らかにそんなことは一度もしたことのない立場の人間さ」
「私は看護師です。セブンスデー・アドベンチスト教会の宣教師です。立派過ぎてトイレの掃除ができないような人間ではないですよ」
「ゲイツさん、トイレ掃除なんかはしたくないはずだ。排泄物があちこちに浮かんでいるんだぞ。建物の外で配水管が全部めちゃめちゃになっていて、雨季になると雨が流れ込んで内容物がトイレ全体に浮かぶのさ。毎日その汚物を全部すくい出さないといけないんだよ。あんたは絶対にそんな汚い仕事には関わり合いたくないに決まっている」
「あなたは私を誤解しているようですね。私は看護師で、患者さんの下の世話をしたことがあると言いましたよね。かつて老人ホームで働きましたが、そこのお年寄りの世話をするのはなんでもありませんでしたよ。私を試してごらんなさい」
「いいや、ゲイツさん。あんたにチャンスをやろう。あんたがそんな仕事はしたくないと言うのはわかっているさ。２日のうちに決めたらいい。それでも金を払わなかったら、その仕事をしないといけないってことさ」
「今すぐ、あなたに言えます。バケツとシャベルを持ってきてください。そしたら働き始めますよ。２日たっても私の答えは同じです。私は一銭も払いません」と、デイビッドは答えました。
　すると教授がデイビッドをさえぎり、「私は反対です。お金を払ったほうがいいかもしれない」と言いました。

デイビッドは教授を見て言いました。「教授、あなたがそうしたかったらお金を払ったらいいですよ。自分で決めないといけませんから。でも、私は汚い仕事をするのはかまいません。母親たちはオムツを換えるのは何ともないようです。最初は汚いオムツを換えるのはいい気持ちはしないだろうけど、２、３回したら慣れてくるようです。大した事じゃないですよ」

その夜、看守たちは入所者たちを５つの長い列に整列させました。デイビッドと教授は違う列に並ぶよう命じられました。看守たちは各列の人数を数えてから、囚人たちにそれぞれの監房に行くように命じ、１つの監房に 70 人を入れると、扉に鍵をかけました。監房の中で、デイビッドはそれぞれの列の間隔が約 90cm ほどで、ほとんど天井に届くぐらいまで並んでいるセメントのベッドの長い列を見ました。

監房のリーダーが、「ベッド代として３ドル払え。でなければ床に寝ろ」と、新しい入所者に言いました。

強情だと感じながらも、デイビッドはもし何もかもお金を払い始めると、彼らの要求にはきりがないと判断しました。彼らはますますお金を欲しがることでしょう。その上、ベッドは床と同じくらい硬かったのです。

「私は床に寝ます」と彼は監房のリーダーに言いました。

「お前は新顔だから俺のベッドの横に寝ろ」と、リーダーは命じました。

彼がぐっすり寝ているのに気づくと、デイビッドは新しい問題を解決しなければなりませんでした。（この男たちは私の持ち物全部を盗むだろう。どうしようか？）と彼は思いました。監房は蒸し暑かったので、（財布、かぎ、くし、そしてペンを靴の中に入れよう。それから靴をシャツでくるんで、それを枕にしてズボンだけはいて寝よう）と決めました。問題を解決すると、彼は横になりました。でこぼこした枕に頭を休めた途端に、大事なことを思い出しました。お祈りするのを忘れていたのでした。

彼は誰かが彼をめがけて物を投げたり、卑猥な言葉を浴びせかけるのを覚悟しながら起き上がり、ひざまずきました。しかし何も起

きませんでした。それで彼は自分の友である神様に気持ちを注ぎ出し始めました。
「主よ、私にはあなたが必要です。あなたがなぜ、私がこのような苦しみの経験をするのを許されたのか理解できません。このように扱われるのは嫌いです。落胆し失望しています。あなたは、どれだけの人たちが私たちの飛行機の来るのを待っているかご存知です。今、誰が彼らを助けるのですか？あなたが私に任された仕事を誰がするのですか？働きは終わりません。
教会は飛行機を取り戻したでしょうか？なぜこのようにひどく不愉快な場所に落ち着くことになったのですか？ここにあなたが私を置かれている理由は何ですか？私がどんなに恐ろしく感じているか、あなたに言わなければなりません。あなたが私と一緒におられることはわかっています。これに耐えられるよう助けてください。あなたに信頼することを教えてください。私が理解していないときでも、あなたを証する知恵を与えてください。ベッキーや子供たちと一緒にいてください。そしてあなたの時がきたら、また私たちを一緒にさせてください。私は哀れな状況ですが、あなたを愛しています。私のために多くの苦しみに会われたイエス様のお名前によって、このお祈りをおささげします」
デイビッドは再び横になりました。その時叫び声を聞きました。
「おい、あんた！あんたは修道士か何かかね？」
「ええ、そうですよ。私は宣教師です。私はセブンスデー・アドベンチスト教会で働いています」とデイビッドは答えました。
「神様を信じているのかい？」
「もちろんです！」
「神様がいると思っているのかい？」
「はい。神様がいらっしゃることを知っていますよ。神様を個人的に知っています」
「それなら、わしの質問に答えてくれないか」。デイビッドは知恵を求めて静かに祈りました。70対の耳が、彼らの話を聞いていました。まもなく他の声が話をさえぎりました。それから他の誰かが質問し、また他の誰かが、そしてまた他の誰かがと、２時間以上の間次々に質問し続けました。何度も何度も聖霊の神様は、デイビッド

の心に聖書の言葉を思い起こさせました。暗闇の中で、この男たちは心をあらわにして、ずっと知りたいと思っていた神様についての質問をしました。誰もが聞いており、引きつけけられていました。デイビッドは、神様がこの囚われの身の聴衆を備えておられたのだとわかりました。

次の朝、デイビッドは目が覚めると、すぐにひざまずきました。

「そのまま、そのまま、そのまま」と呼びかけながら、若い囚人が彼のところに駆けよってきました。「あなたと一緒に祈ってもかまいませんか？」

「全く構いませんよ。一緒に祈れてうれしいです」と言って、ふたりは一緒に祈りました。デイビッドは神様がほほ笑んでおられるのがわかりました。

次の日の夜、デイビッドが祈ろうとしてひざまずくと、３番めの男が仲間に加わりました。今や神様は、３人の神の子たちの祈りを聞いておられました。そしてそれが４人になり、５人、６人、７人となり、11 人までに増えました。彼らの心の願いを神様はご存知でした。神様は、神の家族に加わりたいという彼らの願いを知っておられました。彼らに励ましを与えるために、神様はデイビッドをこの惨めな場所に送られたのでしょうか？

多くの入所者が個人的にデイビッドのところに来て、自分たちの話をしました。ひとりの男は、「妻も子供もいる。自分は無実で、だれかが不当に犯罪者にまつりあげたんだ。７年の刑を言い渡され、妻も子供たちも苦しんでいる」と言いました。「自分は何も悪いことはしていない。家族の面倒を見る人がいないまま、自分はここに 15 年いないといけない」と、もうひとりの男は目に涙を浮かべて話しました。

悲しみの波がデイビッドに押し寄せてきました。彼もまた正義を期待できないとわかったのです。何年間の刑を言い渡されるのでしょうか？５歳と３歳の小さな女の子たちと、１歳のカルロスをベッキーはどうやって育てていくのでしょうか？

＊＊＊＊＊＊

デイビッドが逮捕されて３日、ベッキーは、彼がどこにいるのか、再び彼に会えるのか全く想像がつきませんでした。彼女はグアテマラの国境沿いに住んでいたもうひとりの宣教師、ロン・カニングが誘拐されたのを思い出していました。同じことがデイビッドの身にも起きたのだろうか？ゲリラはデイビッドをジャングルの隠れ家につれていったのだろうか？彼らは彼を拷問にかけているのだろうか？彼らは賠償金を要求するだろうか、それとも彼を殺すだろうか？「神様、彼を私の元に返してください」と神様に訴えながら、このような恐ろしい考えが彼女の心をいっぱいにしました。

これらの日々、ベッキーはまるで胃が締め付けられているかのように感じて、食べることができませんでした。浴室の体重計にのると、体重計の針は 100 ポンド（約 45ｋｇ）をさしていました。それは３日間のうちに 7 ポンド(約３ｋｇ)体重が減ったことを意味していました。無理に食べようとするのですが、ストレスのせいで、食べ物はほとんどのどを通りませんでした。

子供たちのためにも耐えなければならないと思いながら、彼女はひざまずいて神様に訴えました。「神様、あなたは私を助けてくださらなければなりません。まるで平静さを失ってしまいそうです。この混乱の中で、私は平安が必要です。今すぐそれが必要です。ヨハネ 14：17 の、『私は平安をあなたがたに残して行く。私の平安をあなたがたに与える。私が与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたは心を騒がせるな、またおじけるな』という約束を、私がどれ程好きか、あなたはご存知です」

その瞬間、ベッキーは神様の平安が押し寄せてくるのを感じました。数時間は、再び普通にしていることができましたが、そのすぐ後、圧倒されるほどの恐ろしい不安が彼女に襲ってきました。「どうか、神様、私にはあなたの平安が必要です。私はそれを失いかけています」と、彼女はひざまずき、願い事を繰り返しました。昼も、また落ち着かない夜の間もずっと、彼女は何度も何度もヨハネによる福音書 14：17 の約束を訴えました。彼女は、溺れる者があえぐように、その約束を頼みとしました。

友人たちが立ち寄り、「ベッキー、あなたはなぜそんなに信念が強いの？」と尋ねました。

「私は強くなんかないわ。イエス様にしがみついているだけよ。だってデイビッドに何が起きているのか全くわからないのですもの。神様の約束なしでは過ごすことができないわ。ひとつだけはっきりとわかっていることは、神様は特別な時に、特別な力をあたえてくださるということよ」と、ベッキーは答えました。

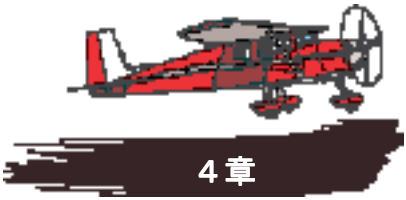
ある晩、３歳のカトリーナは母親が泣いているのを見て、「お母さん、天使はドアを開けることができるよ」と、言いました。

ベッキーは困惑して、「どんなドア？」と聞きました。

「ペテロのようによ」。ベッキーは何週間か前に、聖書の中の使徒ペテロの脱出の話を子供たちに読んであげたのを思い出しました。彼女はカトリーナに近づき、抱きしめました。

「カトリーナ、あなたのほうが母さんよりずっと信仰があるわ。思い出させてくれてありがとうね」

ベッキーは1時間おきに、ペテロ第1の手紙4：12、13で語っている、火のような激しい試練に遭遇しました。彼女は、神様が自分をキリストの苦しみを担う者としてくださっていることがわかりました。しかし、苦難の中にいる間は喜べませんでした。彼女は、いつか神様の栄光が現れたときに喜べるだろうと、そのことをただ信仰によって悟れただけでした。



４章

ベッキーを想って

２日目の晩、寝床を整えてから、ふたりの囚人の手をとって祈っていると、デイビッドは多くの目が自分をじっと見ているのがわかりました。横たわると部屋に沈黙がたちこめ、彼はイエスのやさしい臨在を感じました。

しかしなかなか眠れませんでした。彼は考えるのを止めることができませんでした。飛行機は彼の人生の中で大部分を占めており、今彼の思いは、逮捕と入獄の理由となった、失ったばかりの１機と、操縦してきた別の何機かの飛行機へと向かいました。神様が初めての飛行機を用いて、どんなに祝福してくださったかを思い出しました。少年の頃、よく父親と共に飛行しながら、高校の最終学年のうちに飛行訓練を受けることを待ち焦がれていました。その訓練費用を得る方法を探そうと決めた彼は、カレッジで仕事を見つけました。

すぐに彼は飛行機を所有している友人ふたりとパートナーになりました。長時間の労働をしてやっと支払いを終え、飛行機を買いました。彼は 18 歳で卒業する前に、自分の小さな飛行機を持ったのでした。

デイビッドが飛行機の操縦士免許を取る前に、ある日、辺境パイロットの経験を積んだ彼の父親が、デイビッドの飛行機で飛ぼうと、ジョージア州北部のジョージア・カンバーランド・アカデミーの舗装された小さな滑走路へ彼を連れ出しました。ゲイツ牧師は、滑走路の隣の畑でとうもろこしを刈っているコンバインに注意を払いながら、着陸練習を２回しました。

デイビッドは自分で着陸してみたいと思いました。「お前には扱いが難しいよ」と父親は忠告しました。「滑走路のそば近くで働い

ているコンバインのところに着陸してはいけない。そのあたりの歩道からそれなくてはいけない。お前が操縦する前に自分がまず着陸して、少し移動してくれるようにあの人に頼もう」

父親は通常の着陸をしたのですが、その直後、左の着陸ギアが折れ曲がり、左の車輪が飛行機からはずれてしまいました。左翼が落ちて、彼らはものすごい速さで畑を横切っていきました。輪を描いて動いていたコンバインが、彼らの前に現れました。飛行機の速度をコントロールできないまま、ゲイツ牧師は機首を下げて、時速70マイルでコンバインに真っ向からぶつかりました。このとっさの操縦さばきで、コンバインの運転手にはぶつかりませんでした。

“ベッキー・スー”セスナ 140

それから死のような静寂！デイビッドと父親が正気を取り戻すと、ふたりの切れた頭や腕から血が滴り落ちていました。肩にかけた固定ベルトが彼らの命を救いました。飛行機とコンバインはどちらもひどく壊れてしまいました。

近所の救急救命室の医師は彼らに包帯を巻きつけ、「傷はたいしたことはないが、全治までには時間がかかるでしょう」と言いました。

デイビッドは、回復するまでの間に、１学期間帰省していたベッキーから手紙を受け取りました。

「あなたの飛行機が壊れてしまって残念でしたね。私はいつも操縦の仕方を習いたいと思っていたの。そしてあなたの飛行機で習えたら、と考えていたのよ。だれも大けがをしなくて本当によかった」

飛行機には保険がかけてあったので、デイビッドは代わりの飛行機を購入しました。かすかな希望がデイビッドの頭にひらめきました。神様は、この事故を用いてベッキーとの前向きな交際へと導き、万事を益としてくださるだろうか？以前のガールフレンドは彼を離れて行ったので、彼女の手紙に返事を書くのは自由でした。すぐにふたりは、頻繁に手紙のやり取りをするようになりました。

その後しばらくして、ベッキーと彼女の両親がこのパイロットたちを見舞いにやって来ました。彼らが帰った後、デイビッドの父親が言いました。「お前に知らせることがある。ベッキーの母親が母さんに、ベッキーは、ボーイフレンドが彼女の人生目標である伝道活動にあまり興味を示さなかったから、別れたばかりだと言ったそうだ。デイビッド、ベッキーは今でもまだ、お前とした約束のことを話しているらしいよ」

デイビッドのカレッジデイル･アカデミー卒業式

「父さん、本当！僕はそのことでしばらくがっかりしていたんだ、もうベッキーとのチャンスはないと思ってね。それはすごいや」

デイビッドはピリピ 1:6 の約束を思い出しました。「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」

彼は祈りました。「神様、ありがとうございます。あなたにとって困難なことは何もありません。もしあなたがベッキーと僕が一緒にあなたのために働くのをお望みであるなら、どうしたらよいかをどうか教えてください」

いつでも、すぐ行動に移すデイビッドは、失望から抜け出て、山頂にいる気分になりました。彼はベッキーに手紙を書き、投函しましたが、４日後に戻ってきました。興奮していたので切手を貼り忘れていたのでした。

彼らの友情は急速に発展しました。ベッキーは、デイビッドのカレッジデールアカデミー卒業式に参列するために車でやってきました。式場の中央通路を行進してくる彼を、彼女はとても誇らしく思いました。式の後、冷たい風の吹く戸外に立って、彼女は震えをこらえていました。彼が卒業ガウンを脱いで優しく彼女の肩にかけてくれたとき、彼女の心臓は早鐘のように打ちました。

すぐに彼らは、伝道に対する互いの関心を話すようになりました。ベッキーはカレッジで医療技術を勉強していました。ある夕方、彼らがカレッジ構内を歩いていたとき、デイビッドは彼女にチャレンジを投げかけました。

「もし宣教師になりたかったら、僕らふたりは看護師になる必要がある。神様が僕らをどこに召されても、看護の技術は人々を助けることができるから」

「でも、デイビッド、私は絶対看護師にはならないといつも言っていたのよ。私たちの両親が看護師なのだから、家族の中に医療専門家はもう十分だと思わない？」

デイビッドは黙ったまま、ベッキーに考える時間を与えました。

「本当に、私は看護を専門にしようとは思ったことがないの」と彼女はゆっくりと話を続けました。「でも、もし私が病棟で働かなくてもよいなら、病人を助ける知識はきっと、私たちの伝道奉仕を強力にするでしょうね」

「僕も看護を専門にする気はないけど、ただ人々を助けるのに貴重な道具になると思う」

「いいわ、デイビッド、やってみるわ。看護科へ行って、登録しましょう」

看護科主任は頭を振りました。「気の毒だけど、もう今年受け入れることのできる学生は全部受け入れてしまったの。補欠のリストに載せることはできますよ。あなたたちの申し込み番号は 78 番と 79 番になるわ。でも、適性確認のための試験は受けられますよ」

数日後、デイビッドとベッキーはその結果をもらうために看護科に戻ってきました。
「あなたたちはよくやったわ」と主任は寸評しました。「補欠リストの７番と８番まで飛び越えましたよ。でもまだ、今年受け入れられるリストまでにはほど遠いわね」
３週間後、カレッジ登録の最初の日に、デイビッドはベッキーに提案しました。「僕は神様がこのことを望んでおられるという確信がある。今日は1科目も登録せずに、待って祈ろう」
２日目の朝、彼らは再び頼みに行きました。
「残念だけど、チャンスはありません」
なおも、熱心なふたりは、神様はすべてのことを可能になさるということ(マルコ 10:27 参照)を思い起こしながら、１日中待ちました。
「もしこれが私たちに対する神様のみこころなら、神様は解決してくださるでしょうね。そうでなければ、もっとよいプランを示してくださるわ」とベッキーは確信をもって言いました。
「登録は４時で終わる」とデイビッドは時計を見ながらぼそぼそと言いました。「登録までにちょうど５分残っている。何か進展があったかどうか見に行こう」。彼らは看護科指導教官の机のところに行きました。
看護科主任は、「空きが２つ残っているけれども、女生徒が２名来ると思う」と言いました。
「登録期間は２日間でしたが、彼女たちはまだ来ません。僕は学生部長に話そうと思います」とデイビッドが意見を言いました。
「あなたがそうしたいなら」と返事をして、彼女は登録する部屋の向こう側にある学生部長の机を指さしました。デイビッドは、伝道の場での奉仕のためによりふさわしくなるために看護科をとりたいという、彼らの希望を部長に伝えました。
「問題があります」とデイビッドはつけ加えました。「もし今年のクラスを取れなければ、僕たちはもう１年待つことはできません。僕たちは看護科をとりません。今とるか、それとも前に計画していた専門分野に進むか、どちらかです」
「ついてきなさい。看護科主任と話をしよう」

主任の机に近づきながら、部長は、「まだ登録しておらず、連絡のない学生が２名いるというのは本当かね？もしそうなら、今日はもうこんなに遅くなっているのだから、このふたりを看護科に入れてよいと思うのだが」と言いました。

登録終了のほんの数分後に、デイビッドとベッキーは署名をし、２年間の看護科コースに受け入れられたのでした。登録用の机から離れながら、ベッキーはデイビッドの方に振り向きました。

「神様はすごいこと！これで私たちは一緒に看護を学べるわ。最終学年でも専攻を変えることを、私、なんとも思わないわよ。これが神様のみこころだとわかるの」

ふたりは何もかも一緒にし始めましたが、ベッキーは看護科を終了するまでは結婚を待つべきだと感じていました。

デイビッドは反対しました。「ベッキー、君は何でもぐずぐずしている。君はただ早く動きたくないだけだ。たぶん僕は早く動きすぎるかもしれないけど、君は反対側に引き戻そうとしている。君は鋤で、ぼくはトラクターじゃないかな」

「神様は、私たちにはバランスが必要だということをご存知なのではないかしら。私は主を待ち望みたいと思うし、あなたはパウロに似て、いつも競技を走っているのね」と彼女は笑い、そしてデイビッドは反論しませんでした。

数ヵ月後、クラスが始まりました。彼らは友人の結婚式に、花嫁の付き添い役と花婿付き添い役として出席しました。祝いの席でひとりの友人が尋ねました。「君たちは結婚を予定しているのかい？」その質問を耳にしたベッキーの両親は、「彼らは、結婚を予定していると、今にも私たちに言うと思っているよ」と答えました。

「どういうことですか、『今にも』って？」とデイビッドが口をはさみました。「ベッキーはカレッジを終えるまで待ちたいと言っています。彼女の計画は１年か２年先なのに、『今にも』なんて、僕たちがなぜ考えられます？」

デイビッドがその年のクリスマスに家に帰ると、父親は彼を問い詰めました。

「お前はもう婚約したのかい？」

「いいえ、まず父さんに話をせずに婚約などしませんよ。父さんを尊敬していますから、意見を聞きます」
「お前はベッキーと結婚しようと考えているのかい？」
「ええ、僕は、彼女と結婚するつもりです」
「愛し、結婚したい人を確かに見つけたというのかい？」
「ええ、そうです。僕は彼女を見つけました。彼女はちょうど僕が求めている人です。僕らはふたりとも主を愛していて、宣教師になって助けを必要としている人たちのために奉仕するという、ひとつの大きな目標があります」
「そういう場合には、お前が正式に彼女に申し込んでいなくても、婚約したようなものだ」
「そうですね、僕らは気持ちの上では婚約しました。僕は彼女のものだし、彼女は僕のものです」
「母さんと私は話し合って、お前たちは理想的な組み合わせだと思った。お前たちがボリビアで育っていた間に、神様はお前たちふたりをお備えになったのだ。お前たちはいつも友だちだった。だが、気がかりなことがある。もしお前たちの関係がもっと親密になって、長く待ちすぎると、間違いを犯すかもしれない。それはお前たちの結婚をだめにするか、少なくとも傷つけることがあり得る。あるいは、お前たちの関係を保つために、数年待っている間に、お互いから離れるかもしれない。どちらにしても、私たちはそれには賛成しかねる。だから、もしお前たちが結婚したいのなら、私たちは祝福し、許すよ」
驚いたデイビッドは、今や、双方の両親共、彼らの結婚を支持していることがわかりました。すぐにデイビッドはベッキーに電話をかけ、「今忙しいかい？なんて美しい日だろう。僕はベッキー・スーをスピン（きりもみ降下）に連れ出せると思うよ」と言いました。「面白そうね」と彼女は応じました。「そこで会いましょう」。彼女は、彼のことを考えてほほえみました。彼女は、彼のちゃめっ気ある茶色の目、長いまつげや少し口元がゆがむほほえみをどんなに愛したことでしょう。彼女が彼を、「背高で、黒髪のハンサム」と呼ぶようになったとき、彼は彼女を「小柄で、ブロンドの美人」と呼び始めました。小さなセスナ 140 に何と命名したかを見せようと

して、興奮した彼が自分を連れ出した日のことを、彼女はまだ覚えています。飛行機の鼻先に大きな字で、「ベッキー・スー」と書いてありました。

しばらくして、ベッキーは空港に着き、デイビッドが「ベッキー・スー」での飛行の準備をしているところを見つけました。「すぐ君のところに行く」と彼はほほ笑んで言いました。彼はすばやく作業を終え、彼女のそばに歩いてきました。やさしく彼女の手をとり、彼女の青い目を見つめながら、「僕は前に一度君に頼んだけど、『ベッキー・スー』のそばでもう一度頼みたい。僕と結婚してくれる？」と彼は言いました。

ベッキーは美しい笑顔を見せました。「あなたと結婚したいわ」と彼女はささやきました。デイビッドは、心臓が幸福で破裂しそうに思えました。「飛行しながら詳しいこと話そう」と彼は言いました。彼は、どこを飛んだのか覚えていませんでした。ただ、自分の横に座っているこの愛らしい少女が、永遠に彼のものとなるのだということがわかりました。

デイビッドが最終滑走路へ向かって行くと、黄昏の空に沈んでいく太陽の周りに鮮やかな赤とオレンジ色が広がりました。ベッキーは目前の美しさを喜び、「見て、神様はこの特別の瞬間を祝うために世界を飾っておられるわ」と叫びました。着陸寸前に彼は、ベッキーのほおにキスをしました。初めてのキスでした。

「少し、早過ぎないこと？」と彼女は問いかけました。

「全然」と彼は平気で言いました。

「デイビッド、私は、次のキスはバレンタインデーまで待ってほしいわ」

「情けないお勧めだ」と彼は、彼女にほほ笑みかけながら言いました。

「でも、それが君の考えなら、僕はどうしようもない」

彼らが正式に婚約する前に、デイビッドは彼女の両親の許可を求めることにしました。そこで彼らは一晩中車を走らせて、1979 年 1 月 1 日の早朝に病院に着きました。彼女の父親は医療技師として、母親は救急室の看護婦として共に夜勤で働いているところでした。

デイビッドが最初にベッキーの父親を見つけました。

「こんな朝早くに、ここでお前たちはいったい何をしているんだい？ここにはクリスマスに来たばかりじゃないか」
デイビッドは、勇気をふるって、唐突にしゃべりました。「僕はあなたの娘さんと結婚したいのです」
デイル・デクセンはほほ笑みました。「考えさせてくれたまえ」彼は一息つき、目をパチパチさせました。「さてと、本当のことを言うと、もうそのことについては考えていた。私はうれしいよ」
幸福なふたりは、次にベッキーの母親パットが働いている救急室へと急ぎました。その病院で治療をさせないという保険の方針のことでわめいている、難しい患者にかかりっきりだったパットには、彼らが見えませんでした。
彼らは、彼女の機転のきいた言葉を聴きました。「あなたの手当てをしたいのですが、あなたの保険がそうさせてくれないのですよ。どうか１、２マイル先の病院へ行ってください。そうすればあなたを診てくれますから」
突然パットは顔を上げて、「ベッキー、デイビッド」と叫びました。そして彼らに駆け寄りました。その女性は、だれもいないのに叫んでいることに気づくまで、わめき続けていました。

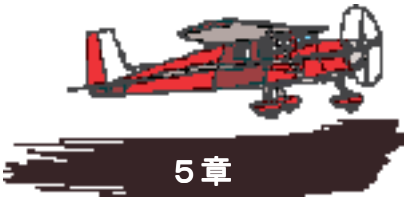
テネシー、エピソンのゲイツ家農場での結婚式

パットはすぐに感づきました。「あなたたちふたり、婚約するのね」と彼らを抱きしめながら、興奮して尋ねました。彼らの顔が答を告げていました。
ベッキーの姉妹ベッツィーと、やはりボリビアで成長した宣教師である彼女の婚約者テッド・バーグドルフも、まもなく結婚する予定でした。彼ら４人は、テネシー州カレッジデイル近くのゲイツ家農

場の、池の近くにある見晴台の木陰でダブル結婚式をすることに決めました。満開のバラの花が式場を飾りました。ベッキーの父親デイルは、娘と腕を組んで通路を歩いてきました。

牢獄の固いセメントの床に横たわり、デイビッドは愛する花嫁のことを再び思いめぐらしました。結婚式を執り行ったときの、父親と祖父の言葉が耳に聞こえる気がしました。彼女の優しい声が「誓います」と言っているのを思い出して、心臓がどきどきしました。1979 年 1 月 17 日に、ベッキーは彼の人生の伴侶となりました。もはや年齢は問題ではなく、彼はちょうど 20 歳になり、彼女は 23 歳でした。彼らはキリスト・イエスにあってひとつとなりました。

大きないびきがデイビッドの空想を破りました。やっかいな現実が彼を再び打ちのめしました。いつベッキーに再会できるでしょうか？この牢獄の壁の中にどのくらい閉じ込められるのでしょうか？



５章

刑務所での挑戦

安息日の朝、デイビッドは教授と話をしました。

「ここの刑務所で神様を礼拝して、安息日を守りたいですね。神様は、私たちがここの人たちと一緒に安息日学校をするために特別な計画を持っていらっしゃるにちがいありません」と、デイビッドはその思いを語りました。

「でもどうやって？　刑務官のところへ行って、説教ができるように頼むことはできないというのはわかっていますよね。彼らは許可をくれないでしょう」と教授は尋ねました。

「いい考えがあります。別の要望をしてみましょう」

彼らは一緒に刑務所所長のところへ行き、「他の受刑者への医療奉仕をさせてもらえますか？」と頼みました。

彼は興味深そうに見つめ、「どういうことかね？」と聞きました。

「私は正看護師ですし、教授は全メキシコ南部の私たちの教会学校を指導しています。受刑者に健康と教育について話したいのですが、どうでしょうか？」とデイビッドは聞きました。

「もちろんいいとも！マイクをとって発表しなさい」と彼は言い、デイビッドにマイクを手渡しました。

「皆さん。午前９時半から健康と教育についてもっと学びたい人のために特別集会を開きます。健康に関して質問があれば、お答えします。どうぞおいでください」

「ありがとう」と刑務所所長は言い、デイビッドは彼にマイクを返しました。

後になってデイビッドは、神様がその朝奇跡を行われたことに気づきました。受刑者には厳しい序列があり、刑務所で５年以上過ご

していないと、誰もマイクは使えないという暗黙の規則がありました。しかし刑務所所長は、「君が発表しなさい」と言ったその瞬間、デイビッドを５年昇進させていたのでした。

刑務所には 400 人以上収監されており、そのうちの約 350 人が話を聞きに来ました。看守たちは今までに、これほど多くの受刑者が集会に集まったのを見たことがありませんでした。混乱に備え、看守たちは銃を構えて、部屋の後ろと横に並んでいました。

男たちが列を作って行進するのを見ながら、デイビッドは黙して祈りました。（神様、ハイジャックされ刑務所に入れられたことで、あなたが忠実な方であることを疑っていた私をあなたはご存知です。でも今、なぜあなたがこのことを許されたのかわかります。安息日学校にこれほど多くの参加者が集まったことは、今までどこでもありませんでした。「神様は約束を果たされる！」あなたは約束を守られ、今ここで行われたもうひとつの奇跡を私は見ております。あなたの御名に栄光を帰すために、この礼拝の間私たちを用いてください。）

彼らは、受刑者たちの先にたっていくつかの元気な賛美歌を歌いました。次に教授が祈りをささげてから、南メキシコでのキリスト教教育の利点を話しました。それに続いてデイビッドが人類に対する神様のご計画を語りました。完璧な健康と食事を伴った創造、罪と悪の侵入、そして人類の堕落について。それから彼は、人間を神様の姿に回復するというすばらしい神様のご計画を説明し、８つの健康原則が、すべての人にとってどれほど効果があるかを示しました。

「もしアダムとエバが、敵ではなく神様に耳を傾けてさえいたら、私たちはまだエデンの園にいたはずです。刑務所の必要はなかったはずです。サタンが、人類を罪と利己主義で堕落させました。みなさんの中のある方々は罪を犯し、自分のためだけに生きて来たのでここにいます。またその他の方々は、誰か他の人の利己主義や憎しみのために、不当にもここにいるのかもしれません。けれども、もしあなたがたが、神様の無条件の愛と、イエス・キリストの無償の賜物である救いを受け入れるなら、ひとりひとりに希望があります。

イエス・キリストがあなたがたに代わって苦しみ、死なれたということを覚えていてください」
　カルバリーの意味と救いの計画を説明した後、デイビッドは質問を求めました。部屋のあちこちからたくさんの手が挙がりました。午後１時になり、デイビッドはやっと集会を終えました。「皆さん、私たちは昼食をとらなくてはなりません。しかし、もし午後にまた皆さんが戻って来たければ、集会を続けます」と言いました。かなりの数の受刑者が戻ってきて、午後ずっとプログラムは続きました。
　集会が終わると人々がデイビッドの周りに群がりました。
　「わしは、ここが数日ひどく痛くてね」とひとりの男が言いました。「助けてもらえるかね？」
　別の人が、「何週間も頭痛でつらくてたまらない」と声を上げました。
　「俺は吐き気がして何も飲み込めない」
　「私の目に腫れ物があって、ずっと痛むのだが」。苦情が次々と訴えられました。
　ついにデイビッドは言いました。「刑務所所長に会いに行きましょう。私はここではあなたがたを診察できません。たぶん所長には提案があるでしょう」
　所長は言いました。「ここには小さな保健室がある。だいぶ前のことだが、医者が患者を診察しに刑務所に来ていたものだ。もしあなたがそれを使うなら、そうしなさい。来てごらん、その場所を見せるから。今は空いている」
　「私は医者ではなく、ただの看護師です。けれども私が誰かを助けられるなら、喜んでやってみましょう」と、デイビッドはその部屋に向かって歩きながら説明しました。彼はあたりを見回して、貧弱な必需品を２、３見つけましたが、参考にできる医学書はありませんでした。「明日の朝食後、私が患者に会うと発表してくださって結構です」とデイビッドは言いました。
　その日からデイビッドは１日少なくとも 50 人の患者をみました。彼はすぐに、囚人の幾人かは手術を要する深刻な状態であることに気がつきました。所長は、デイビッドが、彼の自宅近くにある教団の病院の医長に電話することを許しました。再びデイビッドは神様

のみ手のわざを見ました。なぜなら彼は愛するベッキーに伝言することができるからです。彼は、彼女が家で子供たちと共にどうやってこの危機に向き合っているのだろうと案じ、彼女と直接に連絡を取りたいと思いました。

ベッキーと話す機会は1回だけ、別の時にやって来ました。電話を使う許可を受けてからデイビッドは、病院から数マイルの友人宅へ成り行き任せで電話をかけました。病院には電話がなかったからです。ベッキーは買い物の後で友人のジェーンに会いに立ち寄りました。彼女の主な目的はデイビッドについて何か聞くことでした。ベッキーがその家に入って来た直後に、その電話が鳴りました。それは刑務所からデイビッドがかけた電話でした。

デイビッドは、彼の上に垂れ込めている絶望の暗雲を彼女と分かち合いたいと願っていました。「僕はここに14年もいることになりそうだ。だから君がこっちに引っ越して来れば、面会日に一緒にいられるかもしれない」と彼は彼女に言いました。

「これからの14年間給料は支払われるの？」

「わからないが、今の時点では、弁護士はそうなるかもしれないと僕に言っている」

「デイビッド、夕べ何が起こったか言わなくちゃ。子供たちが私と一緒にベッドで、ベッドタイムストーリーを聞いていたのよ、ペテロが牢獄から逃げた物語をね。カトリーナが尋ねたの、『母さん、イエス様はペテロのためになさったように、父さんのために刑務所の扉を開けることができると思わない？』って」

「私は答えたわ、『ええ、できるわよ』と」

「彼女は尋ねたの、『私たち今夜、父さんのためにイエス様が同じことをしてくださるようにお祈りしなくちゃと思わない？』って」

「私、『そう思うわ』と言ったの」

「彼女は、『イエス様はそうしてくださる？』と聞いたわ」

「『もしそれがみこころなら』と、私は彼女に請け合ったの。でも、デイビッド、私たちが祈ったら、イエス様は私にとてつもない平安を注いでくださったのよ。神様は愛で保護してくださり、あな

たと私たちを共に勇気づけておられる、生きたお方だということがわかったの」
　その電話の会話は数分続いただけでしたが、ふたりにとってはかけがえのないものでした。
　教団の病院で、医者は刑務所での手術を執り行う手はずを整えました。翌日、彼は手術用の包みを持ち、山々を越えて長い時間をかけ、病院からやって来ました。彼は刑務所に無事到着しました。
　「こんにちは、ドクター・マウリキオ」とデイビッドは彼に挨拶しました。「あなたにお会いして、私がどんなにうれしいかおわかりにならないでしょうね」
　「機長、刑務所の格子の向こうにいるあなたを見ていられません。あなたは同じ人とは思えません」
　「私は同じではありませんよ」
　看守はすぐに手術用の包みを調べ始めました。最初のものを彼が開けたとたん、デイビッドは叫びました、「殺菌してある包みを開けてはいけません。汚染して、台無しにしてしまいます」
　「私たちは、この刑務所に入ってくる荷物を全部調べるように命じられている」
　デイビッドは毅然として、「そのままにしておいてください。急いで、所長を呼んでください」と言いました。
　デイビッドは所長に説明しました。「閣下、看守たちが包みを開けてはなりません。医者はそれを病院から手術のために持って来たのです。患者たちが感染しないよう、殺菌した状態にしておかなければならないのです」
　「それ以上開けるな」と刑務所長は命令しました。「ゲイツが運び入れるものは何でも全部、お前たちは開けてはいけない。わかったか？」
　「はい、わかりました」
　すべての器具と包みは保健室に直行しました。医者は、デイビッドを助手として、軽い手術をその日は15、翌日はもっとたくさん執り行いました。数人は大きな手術を必要としたので、医者はそのための手はずを地元の外科医と共に整えました。

その医者の訪問のおかげで、アドベンチスト地域サービス事務所は刑務所に衣類を持ち込む許可を受けました。近隣教会の女性たちは、宣教師パイロットが刑務所に入れられていると聞き、米、野菜、果物の食事を運んできました。デイビッドと教授は彼らのために運ばれたご馳走を食べ切れませんでした。デイビッドは所長に、「他の囚人たちに食べ物を分けてもいいでしょうか？」と頼みました。

多くの者が欲しがりました。ひとりの男がデイビッドに、「私はあなたの教会に所属しています。あなたの食べ物を少しもらえますか？」とささやきました。

「もちろんですとも。けれど質問があります。それは、あなたは金曜日には魚だけ食べるということですか？」

「ええ」

「それで土曜日には豚肉だけ食べるのですか？」

「ええ」

デイビッドは笑いました。「次は、どうかうそをつかないでください。あなたが私の教会に属していなくてもいいんですよ。食べ物が必要な人は、だれでももらえます。どこの教会に行っているかは問題ではありません。あなたはいつでも食べ物をもらえますが、どうか本当のことを言ってください」

囚人たちは、夜の６時から朝の６時まで監房に閉じ込められました。昼の間は自由らしきものを楽しみました。午前中は、刑務所の庭で妻や家族との面会ができました。ある者たちは料理するための食べ物を持ち込み、他の囚人たちに売りました。デイビッドはこの刑務所の好ましい事柄を探しました。そしてたくさん見つかったので、彼は１通の手紙を刑務所長に書きました。

> 拝啓、
>
> 私は、あなたがこの刑務所を監督しておられる方法に感銘を受けております。あなたは、刑務所内での修養訓練に関与する刑務所委員会を持ち、その委員に信望厚い囚人を含めておられます。子供たちには、昼間ここに来て両親と過ごせる特権があります。合衆国でこのようなことがあるとは思えません。

私は、合衆国大使館が、私が合衆国で刑に服せるとの判決を受けるかどうかということを、あなたに申し送ったと理解しております。私はここでも合衆国でも、服役しようとは思いませんが、それは神様の問題であって、私の問題ではありません。何が起ころうとも、私は妻や子供に毎日会えるメキシコに留まることを選びます。またあなたが、週に２度伴侶が訪れるのを許し、上級囚人の妻は夜泊まり、下級囚人の妻は日中訪問できるというのは親切なことです。

私はまた、バレーボールチームが組織されていることを感謝します。これは良い運動と、刑務所に暮らしているのをしばし忘れる機会を与えてくれます。ほかの囚人たちは私の身長と能力を歓迎し、彼らのチームが勝利するのを助けるために刑務所にとどまってくれと言いましたが、私はその招待を受けないことにいたします。

あなたは、刑務所暮らしに耐えられるように多くのことをしてくださいました。ありがとうございます。

デイビッド･ゲイツ

少数の囚人たちは、火曜日に女友だちを、木曜日に妻を導き入れるために、看守に定期的に賄賂を贈っていました。ある午後施錠直前に、デイビッドは刑務所の庭から聞こえる、笑い声と手を打ちたたく音の混じった大騒ぎと叫び声を耳にしました。彼は他の者たちと一緒に窓から庭を覗きました。彼らは、裸の男が、ハイヒールで頭を叩こうとする女に追い回されて、庭を走っているのを見ました。見物人たちは喜んで、「ご婦人よ、彼を叩け。叩いてやれ」と叫びました

看守が失策をしてしまったのです。彼はその囚人の女友だちを中に入れたのですが、後でその男の妻が入って来たとき、その女友だちのことを忘れていました。彼女は夫が女友だちと戯れているのを見つけ、靴をつかんで彼をたたき始めたのです。彼は、彼女が叫んで叩いている間、走り回り、喝采している囚人たちを喜ばせていました。

デイビッドは、囚人生活のほとんどは耐え難くうっとうしく単調であることを知りました。毎日が永遠のように思えます。彼の活動的な性質は、刑務所の中で停滞してしまいました。けれども、医療の仕事は続きました。デイビッドは、自分の働きが囚人たちの痛みを取り除くだけでなく、彼自身の心痛をも和らげていることに気づきました。彼は、（愛は、僕が怒りや痛みを感じていても働くことができるのだろうか？）と自問しました。少なくとも、刑務所委員会に命じられてトイレ掃除をしたのではなかったと、彼は自分を元気づけました。

彼は、刑務所に入った日から数日間、自分を見つめている年配の白髪の男に気がつきました。彼はアメリカ人のように見えましたが、きれいなスペイン語を話しました。ある日その人がデイビッドに近づいてきました。

「やあ、僕の名前はドノヴァンだ。僕は君が刑事犯だと聞いた」とその人は言いました。

「その嫌疑で私はここにいます。でも罪になることはしていません。私は実は医療伝道者です」とデイビッドは答えました。

「そうかい？なんという教会に属しているのかね？」

「セブンスデー･アドベンチストです」

「どこでスペイン語を習ったんだい？生まれつきの人のように話すね」

「私はボリビアで育ちました」

「おお、君はインカユニオンで育ったのか」とその男は、わかっているという微笑を浮かべて言いました。

「ちょっと待ってください。どうしてあなたはインカユニオンを知っているのですか？」

「私の両親は宣教師で、私をセブンスデー･アドベンチストとして育て、教育した。父親と私はコロンビアで神様の働きを切り開いた。私の脚に、銃に撃たれた穴の痕が見えるかい？司祭に導かれた民衆が、われわれの信仰を伝えていた父親と私に反対した。彼らは教会を襲い、戸口から走り出す人々をなたで切り始めた。父は背中を切られたが、私たちふたりは逃げた。一緒にいたほかの宣教師は逃げられなかった。彼らは彼を細切れにして、それを南京袋に投げ

入れて、教会の階段に放り投げ、『これが外国人宣教師にすることだ』と言った。
　私は暴力の時代を生きてきた。南アメリカの多くの国々で、宣教師たちは大きな困難や恐ろしい迫害に向き合った。こういうすべてのことにもかかわらず、私は宣教奉仕に入ることを選んだ。神学をパシフィックユニオンカレッジで学んだ。後に教育の修士号と博士号を修めた。アンチリアンカレッジがキューバに初めて開校したとき、彼らは私を学長に指名した。私の父親は南アメリカ支部の秘書だった」
　「私はあなたのご兄弟を知っています」とデイビッドは口をはさみました。「私の両親と私がボリビアで働いていたとき、彼は支部のオフィスから毎月の支払い小切手を郵送してくれたものです」
　「そうかい？彼は副会計士としてそこで働いていた」
　同情でいっぱいになって、「では、あなたはなぜこの刑務所にいるのですか？」とデイビッドは穏やかに尋ねました。
　「そうだね、私は教会がいやになってしまい、妻や子供たちを捨てた。何年か旅をしたが、それから麻薬取引に関わった。10 年の間、私は飛行機に麻薬を荷積みするのを監督し、それらをコロンビアから送り出した。そしてメキシコで逮捕され、13 年の刑を宣告された。およそ９年服役してきた」
　「ああ、なぜ神様が私をここへ遣わされたのかわかりました」とデイビッドは叫びました。「神様は私を、あなたのためにここの連れて来られたのです」
　「だが私は、決して振り返らないことを選んだ。できたらと思うが、できないんだ」
　「ドノヴァン、神様は今、あなたが振り向くのを望んでおられます。神様は私を、ちょうどあなたのように南米出身の宣教師の子である私を、ここに置かれたのです。ですから神様の大きな計画が見えます。あなたはご家族を、奥さん、子供たち、家庭、そしてあなたの神様を捨てました。あなたは傷ついている孤独なかたですが、神様のもとに立ち返って平安を見つけることができます。あなたは新しい家庭を作られましたか？」

「ああ、毎日私に会いに刑務所に来るコスタリカ出身の妻と、子供がふたりいる。子供たちには私のようになってほしくはないし、私が経てきた体験をしてほしくはないよ」
「彼らは学校に行っていますか？」
「ああ、彼らは公立の学校に行っているが、私は彼らが教会学校に行けたらと願っているし、教会にも出席してほしい。助けてもらえるかい？」
「もちろんですよ。私はあなたのために手配しましょう。あなたの奥さんやお子さんふたりにお会いしたいです」
デイビッドは、翌日ドノヴァンの家族が刑務所を訪れたとき、彼らと話をしました。教会員と教区指導者たちの助けで、デイビッドは子供たちが教会学校に行くための奨学金を準備しました。まもなく彼らは、安息日学校に参加するようになりました。
ふたりの男はたびたび会い、祈り、そして神様の言葉を研究しました。繰り返し繰り返し、その囚人は尋ねました。「神様は、私がしたすべてのことにもかかわらず、まだ私に関心を持っておられるだろうか？今の私への神様のみこころは何だろうか？」デイビッドは、神様の言葉から来る希望と保証とで彼を満たしました。神様はご自分のわがままな息子を連れ帰り、その罪ひとつひとつの上に「ゆるされた」と書かれました。
デイビッドの内心の葛藤は増しました。刑務所の中で、彼を息苦しくさせる深く重い雲が日ごとにいっそうのしかかってきました。南メキシコユニオンはすばやく行動し、教区の法律顧問であるハヤサカ牧師を送り、ふたりを解放するように努力しました。けれども、彼はほとんど希望をもたらしませんでした。
ふたりの囚人を解放しようとして多くの時間をかけた努力もむなしく終わり、その法律顧問は刑務所にやって来てデイビッドと教授に面会を求めました。
「残念なことですが、私たちは何もできないのではないかと心配しています」とハヤサカ牧師は彼らに告げました。「軍はあなたの飛行機を保有すると決めています。そのためには、彼らは何でもするでしょう。あなたを刑務所に入れておくことだってします。あなたがたの刑を宣告するとき、彼らはおそらくあなたの犯罪を証明す

る証拠をこしらえることでしょう。彼らが証人たちを連れてきて告訴をすべて実証し、証拠でもってあなたがたの犯罪を証明した後では、あなたがたを解放する方法はありません。私はあなたの記録を見るために裁判所に行く許可を何度となく求めたのですが、彼らは拒否しました。私はプロテスタントを弁護しようとするカトリックの弁護士をひとりも見つけることはできませんでした。この町ではあなたの弁護人はいないのではないかと心配です」

彼は続けました。「ひとつだけ希望があります。私は、町でただひとり、プロテスタントを引き受けるかもしれないナザレン教会員の弁護士のことを聞きました。報告書によると、彼はとても尊敬されていますが、どこで彼の事務所を見つけられるか誰も私に話さないのです。何日も捜し歩きましたが、手がかりひとつ見つけられませんでした。私はたくさん祈ってきました。そこで、私はあなたがたと一緒に祈るために来ました。この窮地にあって、神様だけが助けることがおできになります」

デイビッドは共にひざまずくと、「神様には何でもできないことはありません」との聖句を引用しました。

６章

暗雲の切れ目が･･･

その祈りの集まりは、ハヤサカ牧師を勇気と信仰で満たしました。彼は翌朝早くから、またそのプロテスタントの弁護士を捜し始めました。彼は歩き、探し、会う人すべてに尋ねましたが、何らかの情報を与えてくれる人はだれもいませんでした。

数時間後、彼は静かな場所で休憩をとり、神様に嘆願しました。「尊き主よ、私はこれ以上捜せません。もしゲイツ機長と教授を弁護する、ナザレン教会員の弁護士を私が見つけることをお望みであるなら、あなたが私をその人の所に導いてくださらなければなりません。私はどこに向かえばよいかわかりません。どうか神様、あなたの導きを与えてください」

そして彼は目を開け、頭上を見上げました。すると、「公証人」と書いてある小さな看板が目に留まりました。ラテンアメリカでは、そのような肩書きはいつでも弁護士のことを指しているということを、彼は知っていました。彼はその事務所に入って行きました。

「私はこの町で、キリスト教徒の弁護士を探しています。どこにいるか教えてくださいませんか？」

「どうしてこの事務所に来られたのですか？」と机のところにいた秘書が尋ねました。

「何時間も捜し回って、休憩をとるために立ち止まり、あの看板を見たのです」と彼は看板を指差しながら答え、「それで、ここに入って来ました。ここが最初の事務所です。どうか彼がどこにいるか教えてくれませんか？」

「はい、お教えしましょう。ここが事務所だということはわずかの人しか知りませんが、彼はちょうど今２階にいます」

小声で感謝の祈りをささげ、ハヤサカ牧師は彼女の後について階段を昇り、弁護士事務所に入って行きました。自己紹介の後、彼は事件の詳細を説明しました。その弁護士は言いました。「よろしい、彼らを助けましょう。裁判所に行って記録を調べましょう」

裁判所で、その弁護士は時間をかけて記録を調べました。「有罪の証拠を何も見つけることはできません。両人ともすべての尋問に正しい陳述をしています。彼らの横に私がいたとしても、彼らがした以上の答をする助けはできなかったでしょう。取調べの間、きっと神様が彼らに知恵を与えておられたに違いありません。けれども、もし政府が証拠を作り出せば、厄介な争いになります。彼らの証拠がまったくの偽造であることを被告側が証明できる方法は何もないのです。もし彼らが、飛行機の中で見つけたという何らかの証拠を作り出し、飛行機からそれを入手したと誓う証人を作り出すなら、弁護側として、私たちはふたりが無実であることをどうやって証明できるでしょう？」彼は口を閉じ、頭を振り、「神様に知恵を求めて一緒に祈りましょう」と言いました。

毎日、デイビッドは多くの患者の手当てをして、刑務所での医療の働きを続けました。彼は外見上、傷ついている人々の世話をする、神様に仕える機会を得た幸福な、愛情深いクリスチャン看護師であるように見えました。しかし内面では、彼は否定的な思い、落胆、失望と戦っていました。「あなたたちがどんな気分かなんて、どうでもいい」という思いが、彼の内側で湧き上がっていました。

ある患者は、訴えます。「私はここのところが痛むんだ」

「ここから膿が出ている」

「私は背中が痛くて夜眠れない」

絶望の雲に覆われ、彼の感情は彼の内部で乱れに乱れ、（おい、君たちより、私の方がもっと大きな問題を抱えていると思わないか、もうたくさんだ）とデイビッドは思いました。

彼はこの態度を振り切るためにむなしく戦いました。ついに彼は、愛は必ずしも感情であるとは限らないという結論に達しました。クリスチャンの愛は行動です。彼らの言うことに耳を傾けることはできます。彼らの必要に応じることはできます。愛あるクリスチャン

のように感じなくても、同情を表現することはできます。彼が感じない憐れみを示すように、神様に頼ることはできます。

彼はひそかに自由にあこがれました。囚人たちの身体的必要の世話から逃れて、ベッキーと子供たちと共にいたいと願いました。彼は必死になって祈りました。「神様、私にできることといえば、私の態度を変えてくださるようにあなたにお頼りすることだけです。同時にどうか、イエス様がなさったような働きをし続けるため、聖霊の実を私にお与えください。苦痛を和らげる仕事を私がすることを、あなたは望んでおられるのを知っています。イエスの思いと愛を私にお与えください」

この祈りをした後、デイビッドは、忍耐できないと感じたときに、神様が忍耐力を与えてくださる方法に驚きました。来る日も来る日も、信頼という教訓を彼に教えるために身をかがめておられる神様のご臨在を感じました。以前のデイビッドは、自分の問題と困難を解決するために、自分の賢明な頭脳を使うのを常としていました。今、彼は無力を感じました。神様に服従する以外に、できることは何もありません。

ついに彼は、完全降伏という難しい決心をしました。「主よ、たとえ私がここに 14 年間いたとしても（ああ、そんなに長く私をここに置くことをあなたがなさいませんように）、私は喜んであなたに信頼します。私は牢獄から解放されたいです。なぜならあなたは、私が訴えられている犯罪について無実であることをわかっておられるからです。けれども、たとえあなたが自由を与えてくださらなくても、私はなおもあなたに完全な信頼を寄せます。私は、宣教師という仕事をどうにか始めました。しかし、もしこれから 14 年間ここにいることが私の任務であるなら、何があってもあなたに信頼することを選びます。

そして神様、もしこれがモーセにお授けになったような、将来の働きのための訓練期間であるなら、そして私が忍耐やあなたへの依存や、そしてゆらぐことのない信頼を学ぶことができるなら、そうしてください。将来のためにあなたがご計画なさることには何でも感謝いたします。私の手がみ手の中にある限り恐れはいたしません」

神様は、デイビッドの心に二つの思いを授けてくださいました。「たとえあなたがそのように感じなくても、『何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ』(マタイ７：12)。そして『あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである』（伝道 11：1）」

飛行機がハイジャックされた日、彼が兵隊たちを親切に待遇したことが、彼に対する親切な待遇という結果をもたらしました。囚人たちの身体的感情的な困窮の世話をすることが、彼らの態度の変化という実を結びました。聖霊がささやきました、「神様は、与えた祝福を変えて、受ける祝福になさることを喜ばれます。私たちは与えるごとに、もっと多くを得るのです」と。

後に、デイビッドは、刑務所長が、彼が囚人たちに医療援助を与えるために長時間を費やしていたことに気づいていたということを口づてに聞きました。所長は、教会によって運び込まれる衣類や食べ物に驚き、またアドベンチストが、小手術を行うために山々を越えて車でやってくる医者のための支払いをし、その後、重症な場合には地元の外科医の世話を受けられるように手配したことに驚き、行動を起こさなければという強い印象を受けました。彼は見たことを話すために、地区弁護士を訪問することに決めました。

「あなたはこれらのアドベンチストが犯罪者だと言っています」と所長は地区弁護士に言いました。「言いたいことがあります！これはわれわれの刑務所で今までに起こった中で最高の出来事です。彼らは囚人全員を助け、医療の働きを続けています。手術を施すために山々を越えて医者を送ってきました。衣服や食料を運んできて、彼らができる限りの方法でわれわれの囚人を助けています。もしあなたがこれらの告訴を引き下げなければ、私は、アドベンチストについて、また彼らがわれわれの刑務所でしている善行についての記事を公表せざるを得ません」

（ふうむ）と地区弁護士は考え込みました。（私にはそのことを公表させる気はない）。

突然、その地区弁護士は、以前は避けていたアドベンチストの法律顧問を呼び出しました。机から目を上げ、彼は唐突に話し出しました。

「われわれはあなたの教会の人たちに対する告訴を取り下げることにする」
「本当ですか？」
「そうだ。われわれはゲイツを重罪ではなく、軽罪に関与したかどで告訴する」
「なぜ、あなたはそのようなことをするのです？」
「その審判で、君たちは容易に弁護できるだろう。その軽罪が本当だということを証明する証拠は何もない。彼らは保釈されて出所でき、家に戻れるだろう」
多くのラテンアメリカ諸国では、法的処理には現金の要求が伴います。法律顧問は、「どのくらい費用はかかりますか？」と尋ねました、
「公式な保釈には 500 ドル、そしてその他の費用に 500 ドルだ！」
彼はすぐさま、お金を得るために教区に赴きました。彼がお金を持って戻ってくる前に、当局は教授を解放しました。
教授の釈放の理由がわからないまま、デイビッドは彼が出て行くのを見て驚いてしまいました。失望で打ちのめされて、彼は神様に不平を言いました。
「それで彼らは自国の者を解放し、アメリカ人は刑務所に留めることを選びました。私たちはふたりとも無実です。神様、これは不公平です。あなたはいつまで私をここに残し、あなたへの降伏と信頼を学ばせるのですか？あなたが私に完全な平安を与えてくださり、あなたの愛に憩うことができますように」

7章

長い、長い夜

獄舎のセメントの床の上で寝返りを打つデイビッドに、眠りは訪れませんでした。

彼は、何度も繰り返し祈りました。「主よ、なぜですか。これが、私のためのあなたのご計画ですか」。彼は再び、「わたしは神に信頼するゆえ、恐れることはありません。人はわたしに何をなし得ましょうか」（詩篇 56：11）との声を聞く思いがしました。

「すみません、主よ。私はあなたが私と共におられることを知っております。そしてあなたは、あなたのご計画を実現されるということに信頼します。もっと幸福な考え方をするように助けてください」

再び彼の思いはベッキーへ、彼らの結婚当初の頃へと向かいました。彼は、ふたりが看護科の訓練を終えて正規の看護師になったとき、共に育んだチーム精神を思い出しました。彼女に励まされて、彼は専門の飛行訓練を完了できました。彼らは宣教奉仕への召しを受けなかったので、ペルーのプカルパで、報酬なしのボランティア宣教師としてデイビッドの両親と共に働かないかという招きを受け入れました。６ヶ月の間、彼らは密林の人々と共に働きました。

デイビッドは、彼らがある日共に祈った祈りを思い出し、ほほ笑みました。「神様、あなたの宣教師としての働きをするのに、どのように自給し、続けていったらよいか良い考えをお与えください」

翌日デイビッドは村の中で、「我らの信頼は金にあり」という言葉を縫い付けた帽子をかぶっているひとりの男を見ました。彼は急いでその男の所に行き、「この辺のどこで金を採っているのですか？」と尋ねました。

「川の中だよ」
「どうやるのか見せてくれませんか？」
「いいとも、かまわないよ。大変な仕事だが、時間をかけてやる気があるなら、だれでも金は採れる」。デイビッドはベッキーに話すのが待ちきれませんでした。
「やるのは面白いと思う。神様の助けで食べ物や、病人のための薬を買うお金を稼げるよ」
そこでデイビッドと、プカルパで航空機整備のボランティアをしていたティムは、２週間の休暇期間にこの冒険をしてみることに決めました。それは金鉱掘りとしての人生経験をするには十分な時間です。ベッキーとティムの妻ジェニーはプカルパの空港に残りました。
その鉱山労働志願者たちは、プエルトインカの小さな町から遠く離れた川岸で暮らし、毎日掘り続けました。１日中彼らは泥を洗い、金をより分けました。そして、神様の助けと多くの重労働によって薬と食物が買える十分な金を得ることができると確信したのでした。
妻たちふたりは、夫たちがいないのをさびしがり、彼らを訪問することにしました。
ベッキーは義父に、「次の飛行のどれかに私たちを乗せて行き、デイビッドとティムの働いているところで降ろしてもらえますか？」と頼みました。
「できるとも。木曜日にその近くに行くよ」
デイビッドは、その飛行機から愛する妻が降りてくるのを見たときの喜びを思い出しました。その夜彼らは砂の上にシーツを広げました。寝場所は寝袋の上をプラスチックの防水シートで覆って作りました。このところ３ヶ月間雨がなかったので、彼らは何の心配もしませんでした。しかしその夜天候が変わり、彼らは雨で目が覚めました。あっという間に、やわらかな雨粒は激しい熱帯雨に変わりました。
ベッキーは毛布の１枚を丸めて、何時間も抱きかかえていました。そして何とか濡らさずにすみました。男たちは防水シートから水を汲み出し続けましたが、すぐにびしょ濡れになってしまいました。

やっと雨が止み、濡れなかった１つの寝袋の下に、彼ら４人は皆体を丸めました。なんと惨めな夜だったことか！翌日、金曜日、女性たちは濡れて砂だらけになったシーツと毛布を川で洗い、それを広げて乾かしました。

そこに、エマーソンという農夫とその手伝い人たちが長いカヌーでやってきて、止まって話しかけました。デイビッドは、「川の水位は上がるでしょうかね？」と尋ねました。

「いや、心配することはない。たぶん川はもう最高水位まで達しただろうから」と彼は返事をしました。

ティムとデイビッドは、その夜どこで眠ろうかと話し合いました。「砂場を避けて、草むらに小さいけどちょっとした避難場所を作ろう。そうすればきっとよく眠れるに違いないし、一緒に楽しい安息日を過ごせるだろう。ジャングルでバルサの木を取ってくるのはたやすいことだ。プラスチックの防水シートは屋根に使える」

避難所を完成した彼らは皆、大喜びしました。「雨よ降れ、もう大丈夫だ！森のはずれの居心地良い避難場所で濡れずにすむぞ」とデイビッドは叫びました。

前夜の睡眠不足でひどく疲れ、彼らは金曜日の夜は早く就寝しました。澄んだ空は、もう雨は降らないという保証のようでした。ところが午前２時ごろ、彼らは、水に浮いているような感じで目が覚めました。デイビッドが手を伸ばすと、その手は水の中に 12 センチほど突っ込みました。

「たいへんだ！」とデイビッドは叫びました。「川の水位が急上昇しているに違いない。大雨が山の上流で降ったのだ」。暗闇の中で彼らは荷物を全部つかみ、木の根につまずいたり転んだりしながら、丘に向かって水中を進みました。しかし川は彼らに追いついてきます。その夜水面は 25 フィート（7.62 メートル）上昇しました。彼らは木々にできるだけの物をつるして、食物、発電機、そして早くしないと川に流されてしまうだろうその他の品々を取りに戻りました。またも惨めな夜！

翌朝、水浸しにならなかった少しの食物で乏しい朝食をとった後、彼らは森の中で一緒に安息日学校を楽しむことにしました。その後、もう雨は降らないと保証したエマーソンが、船一杯の男たちと一緒

にその川を通りかかり、水の中に浮いている彼らの小さな家を見つけましたが、人の気配はありませんでした。（大変だ！）と彼は思いました。（外国人たちに何か起こったのか？わしは、川の水位は上昇しないと言ったのに、上がってしまった。）

エマーソンはボートを岸につけ、いなくなった宣教師たちを皆で捜し始めました。歌声を聞いた彼らは、その声をたどり、デイビッドたちを見つけました。彼は大きな笑顔で、「どうぞ、わしの家においでなさい。あなたがたの服も、寝具も、食料もみんなびしょ濡れだ」と言いました

「安息日は私たちの休みの日ですから、今日はこれらの品物を全部動かそうとは思いません。私たちは安息日にはそういう仕事はしないのです。明日伺いましょう。今日はここで何とかできると思います」

「わかった。あなたたちはセブンスデー・アドベンチストで、安息日には働けないんだな」

男たちの方に振り向いて、彼は命令しました。「彼らの荷物を持ってカヌーに乗せてくれ」

たちまち、11 人の男たちが彼らの荷物や器具類を全部持ってカヌーに積み込みました。デイビッドはほほ笑んで、「まるでぼくらの召使がみんなで仕事をしているみたいだ、ぼくらが安息日を聖く守っている間にね」とベッキーに言いました。

エマーソンは、川からずっと上の方にある丘の上の、居心地のよい自分の家に彼らを連れて行きました。彼の人懐っこい妻リナは彼らを歓迎し、おいしい食事と眠るのに快適な場所をすばやく用意してくれました。二組の夫婦は、この愛すべきカトリックの農夫のもてなしを楽しみました。この友情は後に、デイビッドとベッキーに大きな祝福をもたらすことになるのでした。

彼らは、プエルトインカの辺境の村々で働くことは非常に報われるものだということを発見しました。医療手当ては直ちに人々を霊的興味へと導きました。

たびたび不足する医薬品や食料の補給をしているうちに、デイビッドとベッキーは、病人の世話をするために多くの小さな村々に飛

んで行く飛行機の必要が見えてきました。ある日デイビッドは、一つの考えで妻を驚かせました。

「ねえ君、合衆国へ行って、テネシーのマジソン病院で看護師として働き、飛行機が買えるだけのお金を稼ごう。もし安息日には働かないで、できることすべてをしますという約束を神様とすれば、きっと祝福してくださる。」

「僕は、もっとお金が欲しいからというだけで、安息日に時間外勤務をする看護師を見てきたが、そうしたいとは思わない。もし僕らが神様の日に病人の世話をしなければならないのなら、喜んでする。でも安息日に稼いだものは皆神様のものだ。僕らはきっと、できる限り日曜から木曜までのスケジュールに入れてもらえるよ」

そのような決意を心に抱き、デイビッドとベッキーはテネシーに戻って病院で働き始めました。神様は彼らを経済的に祝福なさいましたが、彼らのこの決意には代償もありました。管理責任者は彼らのスケジュールを、ほとんど毎週別々の階で働くように組みました。

その管理責任者は、「私たちは家族を同じ階で一緒に働かせないのです」と彼らに言いました。「過去の経験からそれではうまくいかないことがわかったのです」

ある日、緊急事態が生じ、スタッフはこの夫婦を一緒に働かせるしかなくなりました。

彼らは、デイビッドとベッキーが調和のとれたチームであることがわかりました。その後ベッキーは病院の廊下でお互いにすれ違うときに、デイビッドがほほ笑んで優しい言葉をささやくことにスリルを感じました。そう、恋人たちは仕事の間でも彼らのロマンスを続けることができるのです。病院で６ヵ月働いて、彼らはセスナ150という飛行機を買うだけの貯蓄をしました。

彼らはその飛行機で宣教地に長距離飛行をする準備のための、すばらしい時間を持ちました。デイビッドと友人はペルーへ向けて小さな飛行機を飛ばし、それからベッキーのところに戻りました。彼は彼女の言ったことを思い出しました。「もう一度新婚旅行をするみたいね。私たちはなんという楽しみを味わえることかしら！」

デイビッドとベッキーがペルーに飛行機で戻ると、自分の家に連れて行ってくれた親切なあのカトリックの農夫エマーソンが、彼ら

の住まいにと小さな家をくれました。親しい交際がこの家族との貴重な友情を生み出しました。ベッキーとデイビッドは最初に生まれた娘にエマーソンの親切な妻の名をとって、リナと名づけました。勤勉でよく働くこの人は、彼と同じく信仰に生きるように彼らを奮い立たせました。彼とその４人の息子たちは、彼らの周囲にいる困っている人にはだれにでも食料や医薬品を与えて、イエスがマタイ25章40節でおっしゃった、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」との原則を実行しました。

もっと医療の働きの必要があることを知り、エマーソンはデイビッドとベッキーに一番良い土地の一部を選んで売ってくれました。後にデイビッドはその土地をベッキーの両親に売り、彼らの医療技術でクリニックは繁栄しました。そこで７年間働きながら、彼らは28,000人の患者の手当てをしました。これは、世話をしてくれた地方の一農夫の親切のゆえに起きたことでした。

暗闇の中でセメントの床に横たわり、デイビッドは頭を振りました。彼は今では長年の経験を有する専門パイロットです。彼は、神様の誠実な保護に驚くばかりでした。（私たちは、小さな動力不足の２座席の飛行機をペルーのジャングル一帯に飛ばし、粗末な滑走路に着陸する間ずっと天使を忙しくさせていた）と彼は思いました。（辺境の地にいる働き人のところに食品や医薬品を運び、治療を受けさせるために患者を運ぶのはなんという喜びだったことか。この喜びを知るの人はごくわずかだ。人々はお金なしで敢えて前進することを恐れている）。

ある日ペルーのジャングル上空を飛んでいたときに、神様はデイビッドに、自分の飛行機の整備法を学ぶべきだということを強く印象づけられました。「ねえ君、僕らはもっと役立つように、合衆国に戻り、さらに訓練を受ける必要があるね。何か飛行機に異常が起きたとき、僕はどうやって修理したらよいか知っていなくちゃならない。良い修理工はジャングルの中では見つからないからね」

夫婦はケンタッキーへ移動し、そこでデイビッドは２年間、航空機管理と整備を勉強することができました。ベッキーは妊娠したので、彼らはどちらもパートタイムの看護師の仕事を見つけることが

できませんでした。彼らは、教育は時には大きな犠牲を要求するものだということを学びました。最初の数ヶ月間、彼らは州の公園に置いた小さなキャンピングトレーラーで生活しました。２年目に、ふたりはマンチェスターのアドベンチスト病院での仕事を見つけました。そこで、娘がふたり、リナとカトリーナが生まれました。

デイビッドの勉学課程が終了する少し前のことですが、彼は友人と一緒に飛行機の修繕をしていました。先が針のように尖ったペンチを手に握っていると、「力いっぱい引っ張ってくれ」と相棒が言いました。デイビッドが力いっぱい針金を引っ張ると、それがすべりました。彼はコントロールを失い、両手でそのペンチを左目に刺してしまいました。彼は赤い閃光を見、崩れ落ちました。すぐに、彼は自分のパイロット生命は終わったと思いました。彼は頬を流れ落ちる液体に触ろうとしました。ところが、触れた頬は乾いていました。

けれども、左目は何も見えませんでした。彼はこわごわと手を伸ばし、指が目の中に入ってしまうだろうと覚悟しながら、自分の指で目を押さえました。ところが手ごたえがありました。「ああ、主よ、私は信じることができません。目がまだあるに違いありません」

彼は浴室に走り、鏡を覗いて見ました。それから思わず声をあげ、「まぶたに大きな穴が見える。尖ったペンチは僕の目にぶつかって、まぶたを刺し、眼球をひどく傷つけずに、別の側に出たのだ！」と言いました。

デイビッドは、その時自分がした献身の祈りを思い出しました。「主よ、あなたは私の命を赤ん坊のときに救ってくださいました。私が年を経た今、あなたは、視力を救われました。私が持っている何ものも自分のものだとは思えません。もしあなたが、伝道地で私が飛行することをお許しになるのであれば、またもしあなたが海外で奉仕する機会を与えてくださるなら、私の持っているものすべてと私の人生を完全にもう一度あなたにおささげします。もし私が命を失うのであれば、それはあなたの問題です。あなたはすでに何回も私にそれを取り戻してくださいました。あなたは私が失ったもの

を戻してくださいました。あなたが回復してくださったものは、全部あなたのものです」

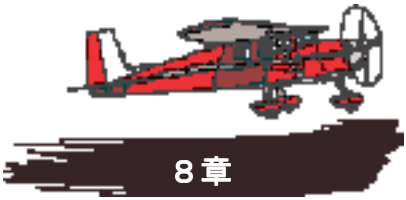
専門パイロット、航空機修理工、そして正規の看護師として、宣教師の準備を終えたデイビッドは、飛行機を使った教団の伝道プログラムが世界中で閉鎖しつつあるのを見て、考えるようになりました。彼は自分の受ける教育分野を広げる必要を実感しました。「ねえ君、経済や政治の状況は、ペルーで教会が行っている飛行機を使った伝道プログラムを間もなく閉ざすかもしれない。コンピューターが重要になりつつある。優れたコンピュータープログラマーやオペレーターがとても求められているよ。伝道現場で必ず必要とされるようになるから、僕はその分野での専門訓練を終える必要がある」

そこでデイビッドは合衆国で勉学を続けました。その間彼とベッキーは、看護の仕事で自分たちの生活を支えていました。彼はコンピューター科学の専攻で学士号を取得しました。それからソフトウェアエンジニアリング専攻の理学修士号をとるために勉強を始めました。通信コース、遠距離教育、そして教室での授業を組み合わせて、６年以上かけ、彼はやがてその勉学過程を終了し、卒業のために合衆国へ戻ることになりました。

デイビッドがさらに多くの資格を得た今、セブンスデー・アドベンチスト世界総会事務局の職員たちは、彼にブラジル、ペルー、メキシコの３国が彼の奉仕を求めているという情報を伝えました。神様はどれを彼とベッキーのためにお選びになるでしょうか？一番大きな必要があるのはどの国でしょうか？

「私たちはあなたの助けが必要です、神様」と彼らは祈りました。「あなたのお約束を思い出してください。『あなたを召したかたは忠実であって、それをされるであろう』。友人たちはブラジルとペルー両国を優先するように薦めます。けれども私たちは、南メキシコの 22 床の病院と看護学校が、毎年ロマリンダから来るボランティアの医学生と歯科学生を援助できる管理者を必要としていると知ったばかりです。その仕事に必要なのは、その地域の多くの村々へ補給品を運ぶのに飛行機を飛ばし、それらの若い人たちの相談にの

るパイロットです。私たちはそのような責任を負う資格があるでしょうか？」
　ベッキーがつけ加えました。「もうひとつのお願いは、神様、南メキシコユニオンには今宣教師のための特別予算がなく、合衆国での手当もないとのことです。私たちは毎月たった 300 ドルの低賃金で暮らさなくてはなりません。これが、養わなければならない小さな娘ふたりがいる私たちのための、あなたのご計画でしょうか？私はピリピ 4：19 を信じます。『わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう』」
　そして彼らは、南メキシコで彼らを導いてくださるように神様に信頼しながら、有利な方の要請を退けました。
　獄房の床に横たわって、デイビッドはこの困難を抱えた地域で奉仕してきた 1 年半に、神様が彼らに与えてくださった多くの挑戦と喜びを思い起こしました。養子に迎えたメキシコの少年、小さなカルロスは、彼らに途方もなく大きな喜びをもたらしました。しかし、もし神様が彼らを導いて来られたのであれば、なぜ飛行機がハイジャックされ、デイビッドが有罪（おそらくは 14 年間の服役）とされるのをお許しになったのでしょうか？
　このような悩ましい疑問が頭の中に渦巻き、デイビッドは神様の尊い約束を思い出そうとし始めました。（神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。ローマ 8：28）。（神には、なんでもできないことはありません。ルカ 1:37）。（恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。イザヤ 41:10）。
　「十分です、神様。私たちの将来をあなたのみ手にお任せできるとわかりました。あなたの愛と力にすべてを委ねることからくる平安を感謝します」
　乱れた心は安らぎ、デイビッドはぐっすりと眠りました。



８章

再び家へ！

失望していたデイビッドは、翌日が特に大切な日であるのを忘れていました。しかし、神様は忘れておられませんでした。神様はご自分の愛する子を驚かすために、このアメリカ人をもう 1 日刑務所にとどめることになさったのでした。

その日、法律顧問はデイビッドの保釈金を検察官に渡しました。検察官はそれを自分の懐に入れてしまい、それから、自分の机に戻り、文書に署名し、それを顧問弁護士に手渡して、「われわれは訴訟を取り下げた。さあ、保釈金を払ってゲイツを出しなさい」と言いました。

その時になって初めてデイビッドは、彼が払った代価はほんのわずかであったことに気がつきました。すなわち、一生の自由のために彼が払ったのは、10 日間の医療の仕事でした。彼は失望への誘惑に屈しなかったことや、他の人を助けるために最善をなすことを拒まなかったことを喜びました。刑務所の扉を開き、解放の鍵を彼に手渡した神様の方法が、保釈されるまではわかりませんでした。彼は、この医療の働きが刑務所を出る鍵になるなどとはまったく知らずに、他人への奉仕をしてきました。

デイビッドを刑務所から出すとき、看守たちは彼を立ち止まらせて署名させました。彼は門を出、そしてバタンと閉まる音を聞きました。その瞬間デイビッドは、刑務所に入った日に同じ音を聞いたことを思い出しました。突然彼は、それは自分に対して偽の証言をした人に接触しようと決めた瞬間だったことに気がつきました。この 10 日間、彼は自分について偽証をした入所者を探そうとしていたことをすっかり忘れていました。がっかりした彼は、自分の決意

を簡単に実行できていたはずなのにと思いました。なぜ彼はその人のことを考えなかったのか？その人の名前もわかっていたのです。

デイビッドは法律顧問の車に乗ると、自分を訴えた人物に近づかなかったことについての失敗を話しました。「あなたがそうしなかったことを喜びなさい」と法律顧問は言いました。「政府があなたを訴えるように彼を用いたのです。犯行時にあなたと連絡をとったと彼が言ったので、彼らは、あなたが彼に近づくのを待ち構えていました。あなたの動きを全部見張りながら、彼らはずっとスパイをあなたにつけていました。彼らは、あなたが彼と話すのを一回も見ませんでした。あなたはいつも彼のそばを通り過ぎていました。あなたは何百人という人々と出会っても、彼のそばは通り過ぎ、一度も彼に目を向けることなく、彼もあなたを見ませんでした。もしあなたが彼を見たり、なぜうそをついたかと彼に言ったりしたら、今日、自由にされることはなかったでしょう」

デイビッドの悩みはたちまち喜びに変わりました。「主を賛美せよ！」と彼は声を上げました。「主は約束を果たし、暗証した聖句を私たちの頭に思い起こさせることができるだけでなく、考えを私たちの頭から出してしまうこともおできになります。私は、刑務所の門が私を閉じ込めた瞬間から、私を外に出すためにそれが開かれるまで、その人のことを忘れていました。今になってやっと私は、その人のことを考えたのです。私たちが主にすべてをゆだねるとき、神様はなんと驚くべきことを私たちの頭脳になさるのでしょう」

家に向かって山道を走る車の中で、デイビッドは感情を抑えることができませんでした。神様への愛と感謝で、彼は、（わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたーエペソ3:20）と、頭の中で繰り返していました。

それから彼は愛するベッキーを思い、もう一度彼女と子供たちに会う喜びのことを考えました。10日が10年のように思えました。目が覚めている間いつも彼につきまとった、刑務所に14年という恐ろしい考えは消えました。もうすぐ家です！

彼は時計で日付を見て、他のことを思い出しました。８年前のこの日、彼とベッキーは永遠に互いに真実であることを誓ったのでし

た。彼の心臓は早鐘を打つようでした。思慮深く、親切な彼の神様は、その記念日に彼を家に戻してくださったのです。
　ベッキーはデイビッドの釈放のことは何も知りませんでした。皿を洗いながらキッチンの窓から外を見ていた彼女は、トラックが通り過ぎるのを見ました。彼女はその車のドアに公用車のシールがあるのに気がつき、それからそれがバックして家の玄関先に止まるのを見ました。すぐに彼女は恐怖で緊張しました。（もっと問題を起こすために、彼らがやってきたのかしら。）彼女は心配になりました。
　彼女は手を拭いてドアに向かいながら、「神様、勇気をください」と祈りました。玄関のドアを開けたとき、彼女は見知らぬ人がトラックから降りるのを見ました。（わあ！とてもやせている、ひどくやせているわ）、彼がゆっくりと家へ向かって通路を歩いてくるのを見て、彼女はそう思いました。彼は小さな歩幅で歩きながら、スローモーションで動いているようでした。
　突然、彼女はその人が誰だか気がつきました。走り出しながら、彼女は「デイビッド！」と、叫びました。
　彼は腕を広げ、彼女はその中に倒れこみました。彼らはお互いを抱きしめて泣きました。やっとのことでデイビッドは、「ねえ、君、記念日おめでとう！」とささやきました。
　彼らは腕を組んで、家に向かって歩きました。彼らがリビングルームに入ると、子供たちはその物音を聞きつけました。
　「父さん、父さん」と彼らは叫び声を上げ、駆け寄ってきました。デイビッドは神様の愛とたいせつな家族の愛に包まれている喜びを知りました。
　「おいで、子供たち。ひざまずいてイエス様に祈ろう。刑務所の扉を開いて父さんを家に戻してくださったことをイエス様に感謝しよう」　ベッキーは彼らを腕に抱きました。
　「神様がそうしてくださるとわかっていたわ。私たちのお祈りを聞いてくださったのね。父さんがお家にいる！お家にいる！」とカトリーナとリナが、何度も何度も声を合わせて歌うように言いました。それから彼らは頭を垂れ、小さなカルロスが手を組むのを助け、デイビッドが天のお父様に心からの感謝をささげました。

子供たちを寝かしつけてから、ベッキーとデイビッドはその夜長い時間話をしました。

「ねえ、君、僕はとてもたくさんのことを刑務所で学んだよ。僕は変えられた。僕はやっと自分がこの世に何も所有していないことがわかった。すべてのものは神様に属するのだ。あの獄房の中で僕には家庭も、楽しい家族もなく、車も、飛行機もなかった。楽しむ本も、コンピューターもない。神様と、そして僕が神様にすべてを信頼したときに与えてくださった平安のほかには何もなかった。神様だけが僕に自由をくださった。神様は刑務所の戸を開き、大事な家族のもとへ帰れるようにしてくださった。神様の憐れみ深い愛のゆえに、今僕は、生活を便利にするために神様が与えてくださるものすべてを使うことができる。僕は命、健康、息、すべてを神様にお借りしている。僕のすべて、そして僕が持っているものはすべて、永遠に神様のものだ」

ベッキーが賛美を添えました。

「私が失望と恐れと戦っていたとき、私も神様への信頼を新たに学んだわ。私の信仰が揺らいだとき、神様に呼び求めると平安がきたの。この 10 日間、神様に完全に任せるということについて、なんと貴重な教訓を与えていただいたことでしょう。私たちが神様に頼ることができて、とてもうれしいわ。だって、神様は祈りを聞いて答えてくださるばかりか、何もかもが見通し暗く、希望がないように思えるときに、勇気を与えてくださるのだもの」

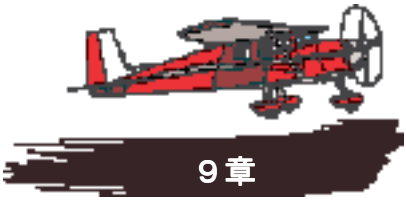
南メキシコでの状況は依然として緊張が続いていました。セブンスデー・アドベンチストの行政本部である南メキシコユニオンの指導者たちは、飛行機の返還を政府に要請しました。軍は、この貴重な飛行機を失うことになるだろうということに気がつきました。なぜなら、彼らは、メキシコ政府からその飛行機を返還するようにという裁判所命令を受け取ったからです。彼らはそれに応じるつもりはなかったので、別のことを企みました。彼らは無実のデイビッドを監獄に戻すことに決めました。これをするために彼らは、デイビッドが飛行機を不法目的のために使用するのを見たという文書に、ある村の全員にどうにか署名をさせました。デイビッドはその村に

着陸したことなどなかったのに。それから彼らは彼の逮捕令状を送りました。

ある教会行政担当者が法律文書をとりに地方の警察本部に立ち寄ると、受付の警官が、「私たちはあなたがたの機長の逮捕令状を持っています。私たちは彼が無実だとわかっていますから、彼をここから早く出すことを薦めます。私たちは彼に会いたくありません。もし会えば、もう一度彼を逮捕しなければなりません。そうなれば軍は、今度は彼を刑務所から出さないでしょう」と言いました。

すぐさまその教団職員はデイビッドに忠告しました、「ゲイツ機長、できるだけ早く立ち去りなさい。持ち物を荷造りして、家から出ないでください。だれにも計画を話さないでください。立ち去れることになったらすぐに、私たちに連絡ください。そうすればあなたと家族がこの国から出られるように手配しましょう。夜出発するようにお勧めします、そうすればあなたの出発は知られないでしょう。あなたの持ち物は、あなたが行ってしまってから船で送ります」

感謝と悲しみという複雑な心境で、ゲイツ家族は、彼らが愛するようになった国を去りました。彼らは、「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」（ヨシュア１:９）という、神様の約束に信頼しました。信仰によって彼らは、南メキシコでの神様の働きを、神様が選ばれる他の人の手に委ねました。彼らは、神様が今度はどこに自分たちを遣わして、神様に仕えるように計画しておられるのか、熱心に待ちました。



神様のそばの天使たち

合衆国にいる両親を訪ねて短い休みをとった後、デイビッドとベッキーは、セブンスデー・アドベンチストのインカユニオンから、ペルーに戻るようにとの要請を受けました。「私たちは、誰かユニオン全体のコンピューターによる奉仕を指揮する人を必要としています。どうか来てリマで私たちと共に働いてください」

この任務はデイビッドにとって、ほとんどが旅行続きの日々となることを意味しました。彼が持っているコンピューターの専門知識を求める緊急要請は、途絶えることなく来ました。彼は 1 ヶ月家庭から離れ、1 ヶ月はオフィスに、それからまた 1 ヶ月出て行き、再びオフィスに戻るという具合でした。時間に追い回される忙しい奉仕の中で、家族との貴重な時間や神様との交わりの時間が奪われました。

神様は信仰と信頼について、デイビッドにさらなる教訓をお与えになったでしょうか？デイビッドは完全に神様に頼り、また神様とのいっそう密接な関係を重んじていたでしょうか？全生涯を神様に明け渡すことを彼は学んだでしょうか？

ある日リマで車を運転しながら、デイビッドは側道から、交通の激しい 5 車線道路に車を乗り入れました。左をちらりと見た彼は、自分の頭をピストルが狙っているのを見ました。およそ 30 センチ向こうにある銃身を見下ろし、息が止まりました。撃たれるだろう、これで終わりだと彼は思いました。彼はブレーキを踏みました。後ろの車も同じようにブレーキを踏みました。ピストルを持った男はそのまま走り去りました。

後になって、彼は、銃を持って逃走しようとしている銀行強盗たちとすれ違ったのだということがわかりました。彼らが車の合間を縫って走り抜けている間、ひとりの男がそのピストルを他の車の運転者たちに向けていました。どの車も速度を落とすか停車して、強盗たちは逃げ、通りの向こうに消えました。デイビッドは神様の臨在を感じ、天使に感謝しました。

別の日の午後、リマの下町にいたデイビッドはメッセージを受け取りました。「船便で送られたコンピューターがカラオ港に入った。引取りに来るように」

彼は、スターターが働いていなかったにもかかわらず、古いステーションワゴンを運転してその町へ来ていました。リマでは新しい自動車部品を手に入れるのはむずかしいのです。問題箇所を直す方法はそれを組み立て直すことでした。彼は、スターターのコイルを巻き直す電気工のところへ、それをすでに持って行ってありました。巻き直しには時間がかかるとのことでした。彼には他の車はなかったので、だれかに押してもらってエンジンをかけ、スターター無しの車を運転しなければなりません。大学へ戻るには距離があり、カラオ港には近いとわかり、彼はやってみることにしました。きっと、コンピューターを積んだ後、だれかが発進を手伝ってくれるに違いありません。

彼は無事に港に着きました。彼はできるだけすばやく書類に記入し終えて、税関を通過し、そのステーションワゴンに時価７万ドル分のコンピューターを積み込みました。大いに必要とされていたこれらの機器はミッション、大学、その他の諸々の学校、また病院に配られることでしょう。きわめて必要の大きかったこれらのコンピューターのためのお金をささげるために、どれほど多くの人々が犠牲を払ったことだろう、と彼は思いました。

それらを積み込みながら、彼は周りの子供たちの言葉をいやでも聞かないわけにはいきませんでした――下品で、不愉快な、子供にも大人にも不似合いな言葉を。気がかりが彼の心を満たしました。（もし子供たちがこんな話をするなら、大人たちの世界の道徳はどんなだろうか？カラオはいつも荒っぽい地域だ。そして町のこの区域は、大学に向かっていくにつれてますます危険になる。）

重い荷物を積んだ車を発進させようとして、彼は３人の男を見つけ、押してもらいました。街路に出たとき彼は、神様に、（あなたは「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」と約束してくださいましたね）と心の中で語りかけました。そして彼は声を出し、「神様、私は車中にいてこのスラム街を通り抜けているを感謝します」とつけ足しました。

そのすぐ後、計器盤の赤いライトが点滅するのが見えました。エンジンが高熱になったことを知らせています。それからエンジンは激しい音を出して止まってしまいました。彼は道路から外れ、砂利のところに車を停めました。周囲を見回すと、脇に車輪のない古いバスが放棄されている坂道に停車したことがわかりました。そのバスは多分 20 年くらいそこにあって、田舎の麻薬中毒者の溜まり場になっているようでした。彼は時計を見ました――６時 10 分前でほとんど日没。

彼はすばやくネクタイをはずし、スーツの上着を脱ぎ、大きな声で、「神様、私はここよりは他の場所の方がましです。私と共にいてください」と言いました。彼は近くの店に駆け込みました。店番は、彼のような人が夕暮れ時の町で何をしているのかと怪しみ、気違いではないかというような目で見ました。

デイビッドは、「どうか水をください、車に必要なのです」とあわただしく言いました。

その男はバケツを見つけて水を満たしてくれました。デイビッドはラジエーターにその水を注ぎ入れました。彼はバケツにもう一杯の水を持って戻り、再び注ぎました。しかしラジエーターは一杯になりませんでした。車の下を見ると、フリーズプラグ（砂抜きプラグ）の穴から水が流れていました。そこで彼は、大変なことになったと思いました。車に水を入れる方法はなく、スターターはなく、リマの店は全部６時には閉店します。

どうしたらよいものか思案しながら立っていると、店番が門を閉め、夜間に備えて錠をかけるガチャガチャという音が聞こえました。彼は通りを見渡しました。店はひとつ残らず戸締りがしてあります。その区画の向こうを見ると、ひとりの男が角を曲がって消えて行きました。彼はそこにひとり立ち尽くしていました。

彼にあるのは、ただ一つの解決法だけでした。「ああ、神様、あなたは私が大変なことになっているのをご存知です。この車を発進させる方法は何もなく、あなたのみわざのために使われる７万ドル分のコンピューターがそこにあります。あなたの助けがどうしても必要です」

ちょうどその時男がふたりバスから降りてきました。デイビッドは、彼らが２つの大きなゴツゴツの岩を持ち上げるのをじっと見ました。ひとりの男は車の向こう側へ一方からまわって行き、もうひとりが反対側にまわって行きました。デイビッドは、リマではいかにしばしば暴行が行われるか知っていました。ほんの数週間前のことですが、友人たちと一緒にいたとき、数人の男がパイプや鎖や銃を持って彼らに近づいて来ました。ひとりが石を彼に投げました。それを見たデイビッドは、ちょうどうまく身をかわし、石は音を立てて彼の頭の後ろに飛んで行きました。

今、ステーションワゴンの傍らに立ち、彼は、ゴツゴツの石がこめかみに当たれば大怪我をすると思いました。彼には彼らの意図がわかりました。デイビッドが武器を取り出すかどうか待っているのです。

彼らがゆっくりと近づいて来たとき、デイビッドは考えました。（主よ、あなたは友のために命を与えよと言われましたが、寄贈されたコンピューターについては何もおっしゃいませんでした。これらの機器は私の家族に値しません。私はただのコンピューターのために命をささげなくてもいいのです。これを残して行くべきでしょうか？あなたの財産を尊重しますが、命と交換したくはありません。もしあなたがあなたの機器を守りたいのであれば、あなたがなさってください。私にはできません。）

彼は一歩後ろに下がりました。するともうひとりの人にドンとぶつかりました。（彼ははどこから来たのだろうか）と思いました。ちょっと前には石を持った暴漢しか見ませんでした。彼はその人が手を自分の肩に置くのを感じました。デイビッドはすばやく後ろを振り向きました。その人の顔は彼をはっとさせました。彼はそのような顔を今まで見たことがありませんでした。欠点のない、完璧な

顔。彼は自分を見ているその顔をびっくりして凝視し、暴漢たちのことをすっかり忘れました。
「あなたの命が危険です。去らなくてはいけません」
「わかっています。あなたの言うとおりです」とデイビッドは叫びました。「ですが、私は行けないのです。エンジンが動かず、スターターはなく、押してくれる人はだれもいません」
「私が押しましょう。車に乗ってください」
「あなたに押すことなど無理です。ステーションワゴンはとても重く、荷物が一杯積んであるのです。港で発進するのに３人がかりだったのです。それに、砂利の上に駐車してあり、しかもそこは上り坂です。あなたにできるはずがありません。私は、あいつらがあなたに石を投げはしないかと心配です」
デイビッドはふたりの男が動かずに、凍ったように立っているのをちらりと見ました。おかしい、と彼は思いました。（なぜ彼らは動かないのだ？彼らはロトの妻のように塩の柱になってしまったのだろうか？）
その人がまた言いました。「お乗りなさい。私が押しましょう。私はこの者たちを知っています。彼らはとても危険です。彼らは４人であの古いバスに住んでいます。彼らは満員のバスを襲ってきたばかりです。彼らは戻ってすぐ、あなたがここに立っているのを見ました。そしてあなたの機器を欲しがっています。私はあなたの車を押しに来ました」
彼がどれほどのことを知っているか困惑しながら、デイビッドは同意し、「わかりました、でも発進しないでしょう」と言いました。その人の命を心配しながら、デイビッドは彼が車の後ろに行くのを見ていました。ところがふたりの男は動きません。石を持ったまま立っているだけです。デイビッドは、リマのスリや泥棒が普通するやり方を思い出しました。だれかが略奪に現れて、「気をつけろ、だれかがお前の物を取ったぞ」と叫ぶと、もうひとりが指の間に三枚のカミソリの刃をテープで止めて後ろからやってきます。彼らは助けを求める人の顔に切りつけて、皮膚が顔に垂れ下がったままにしておきます。この恐ろしい考えがデイビッドの頭を一杯にしました。（彼らはあの完璧な美しい顔に切りつけるだろうか？）

その人に押せるはずがないとわかってはいましたが、彼はキーを回しました。彼は車が動くのを感じました。そこでセカンドギアに入れました。彼は依然として、（発進できない、エンジンはかからない）と懐疑的悲観的に考えていました。ところが彼がクラッチを離した瞬間、モーターがまるで完璧な走りをしているような快適な音を立てました。

彼がブレーキを踏むと、その人は「ここから出なさい。急いでください！どうか、急いで！」と叫びました。

デイビッドは車の窓を下げました。「リマではご好意に支払う習慣があります。私はチップを払わないでは去れません」

「チップはいりません」とその人ははっきり言いました。「さあ、行きなさい。命令です」

頑としてデイビッドは、「いいえ、チップを払わなくては」と言い張りました。

デイビッドは彼のところに走って行き、数ソルを手渡しました。その人は、「どうかここから出て行ってください。さあ、行きなさい！」と懇願しました。

今度はデイビッドは言うとおりにし、丘を下る主要道路に向かいました。２区画ほど走るとエンジンは変な音を出し、また止まってしまいました。彼はガソリンスタンドまで惰力で走らせました。車を明るい区域に止め、彼を救いに来た人のことを考え始めました。

彼は事実をまとめてみました。完璧な顔をしたその人はどこからともなく現れました。彼はデイビッドの問題を理解しており、ふたりの犯罪人と彼らの恐ろしい前科、そして彼らがしようとしていたことを知っていました。何があの男たちふたりを、石を持ったまま凍りつかせていたのか？砂利の上にある重いステーションワゴンをひとりの人が押すことができたのは、超自然の力によったのだということを、デイビッドははっきり理解しました。すべての細部が美しいパズルのようにぴったり合いました。

詩篇 139:5 の言葉が頭の中に満ち、彼を驚かせました。「あなたは後から、前からわたしを囲み、わたしの上にみ手をおかれます」天使が本当にその手をデイビッドの肩に置いたのでした。

ありがたい気持ちで、しかし自分の鈍感さを恥じ、デイビッドは、助けを求めたのにそれが聞かれたと気づかないご自分ののろまな子の世話をするために、力ある天使を送ってくださった天の父に感謝しました。

デイビッドは家に向かう途上で少し自己吟味をしました。（なぜ自分の人生は保護天使を困らせるように見えるのだろう？私は、保護天使を休ませたことがないのではないか？もし天使が眠るとしたら、私の天使はほとんど眠れない。神様が私を選んで、危険のある奉仕の最前線へ押しやられたからということがあるだろうか？愛のうちに神様は私の命を救おうと介入して天使を送ってくださる。私は、難しくしようとはしないが、危険な任務を引き受けるのをためらうことはめったにない。）

（より大きな信仰をもって冒険に踏み出すようにと神様は言っておられるのだろうか？私が受けるに値しなくても、格別の助けを、神様は送ってくださった。しかし私に神様のご臨在を認めないようにさせたのは何だろうか、私が議論せずにすぐに神様の指示に従って行動するのを妨げているのは何だろうか？何が欠けているにせよ、神様、どうか私にそれを示してください。）

２週間後、北ペルーミッションへの旅行を終え、デイビッドはリマのバス停に着きました。彼は、彼らのコンピューターのために彼が書き込んだ会計システムをインストールしてきたのでした。バスで一晩中旅行をし、昼ごろバス停に到着しました。リマのバス停は市内の真ん中の非常に危険な区域にあります。悪いことに、タクシーの待合所まで行くのに、町の物騒な区域を通って３、４区画歩かねばなりませんでした。書類かばんを持ち運びながら、彼はひとつの問題に気づきました。バスに乗っていて、彼は何時間もの間トイレに行くことができませんでした。どうしたらいいでしょう？

通りをあちこち見て、彼は背後の路地に小さな公衆トイレがあるのに気づきました。そこへ行くには危険で物騒な区域を通らなければなりません。誰一人見えなかったので、走って入り、走り出よう、そうすれば誰も気がつかないだろうと彼は考えました。同時に彼は、このように一か八かやってみるのは、鮫の溜まり場で血を流している人のようなものだということも認めました。

彼は急いでその路地に歩いて行き、ドアのところにいる案内人にいつものように10セントのチップを渡しました。（15秒だけここにいて、それから早く去ろう）と考えながら、彼は中に走り込みました。

ところがだれかが彼に気がつき、外で騒いでいるのが彼の耳に聞こえました。ちょうど彼がまったく無防備の姿勢で立っていたその時、頭の周りに赤いバンダナを巻き、手づくりの剣を手にしたひとりの男が彼の後ろに走り寄りました。デイビッドは防ぎようがありませんでした。彼は、その男が書類かばん、時計、そしてポケットにあるもの全部を欲しがっているのがわかりました

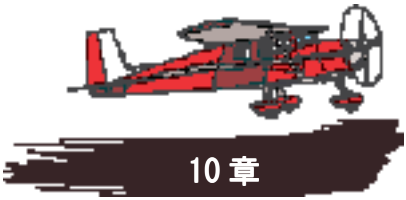
剣を突きつけて、デイビッドに近づいたちょうどそのとき、強盗を働こうとしていたその男は立ち止まりました。彼はデイビッドだけが立っていると思っていました。デイビッドもまた自分しかいないと思っていました。今、デイビッドは、自分よりずっと背の高い何者かを見上げている泥棒をじっと見ました。男の顔は白く変わり、その口は開いたままでした。彼は剣を下に向け、それを背後に持ちました。後ずさりしながら、彼は、恥じ入っているかのように隅に顔を向けて、おとなしく立ちました。

デイビッドは用を足し終わるとすぐ、書類かばんを手にして外に出ました。案内人は驚き、彼を呆然と見ました。彼はデイビッドが生きて出て来るとは思っていませんでした。デイビッドは急いで大通りに向かいながら、守護天使の臨在をもう一度経験したのだということに気がつきました。彼には見えなかったけれども、あの泥棒は天使を見たのだということがわかりました。

「ありがとうございます。お父様」と彼は歩きながら祈りました。「私の必要を満たすために、天の使いをお送りくださるおかたの臨在の中に生きる特権を感謝します。私の周りに陣を張る天使を送り、私を救ってくださることを感謝します」

タクシーに乗って家に帰る間、デイビッドは神様との関係を壊し得ることすべてについて考え続けました。（任務で忙しすぎて、神様の言葉を学びまた祈るという意義ある時間を毎日とっていないのではないか？空いた時間を、雑誌や新聞や書物を読んだり、また霊的事柄を味わうのを遠ざけるテレビやビデオを見たりするのに使っ

ているだろうか？友人が私をイエスから引き離すのを許しているだろうか？私の飲食の選択は頭脳を明晰にし、私を霊的に攻撃しようとするサタンの努力に対して目覚めていることができるようなものだろうか？私は、神様の愛のみ腕の中にいつも包まれているという尊い関係を楽しんでいるだろうか？　）彼は声に出して、「私がすることすべてにおいて、あなたに栄光を帰すことができるようにお助けください」と祈りました。



過大なストレス

1990 年にペルーのインカユニオン教会本部は、デイビッドを、インディアナポリス教区のビジネス会議の代議員にしました。彼らは英語からスペイン語に通訳する技能のある人を必要としていました。デイビッドにはポルトガル語、ドイツ語、フランス語に変換する言語能力がありましたが、特にスペイン語への同時通訳を正確に早くすることができました。その会場のスペイン語圏の代議員たちは、説教やビジネス会議を彼らのヘッドフォンに通訳する彼の奉仕を感謝しました。これは彼を、早朝から深夜まで忙しくさせました。彼はストレスに満ちた状況下で働き続けながら、合衆国で８週間を過ごしました。

リマの家に戻ったとき、彼は疲れ果てていました。そのむき出しの神経、否定的な精神状態、協調性の欠如は、いつもの楽天的なデイビッドとは別人のようでした。何かが変でした。彼は変わり果てた人のように見えました。彼の悲観的な様相は、ベッキーと子供たちを途方に暮れさせました。彼らはその後の３ヶ月間、彼と一緒に住むことの難しさを体験しました。彼はすべてを憎んでいるようでした。彼は家にいるのを嫌いました。働くのを嫌いました。一緒に暮らす人みんなを困らせました。

ベッキーは、過労が彼を燃え尽きさせてしまったこと、そして神経衰弱になってしまう瀬戸際にあるという気がしました。彼女は問題を抱えた夫を理解する洞察力を求めて祈り、解決を神様に願いました。

彼らふたりを奮い立たせたものは、最も親しい友人である別の宣教師夫婦の、突然の結婚の破局でした。彼らは離婚を選んだのです。

デイビッドは、ベッキーのことで非常に敏感で防衛的になりました。彼は、ペルー人の学生たちがアメリカ人の妻たちはだましやすいと考えることを恐れました。ある日、彼はひとりの学生がベッキーをファーストネーム（姓でなく名）で呼ぶのを聞きました。正式なスペイン社会では、学生が職員をファーストネームで呼ぶことは決してありません。そのようなことは、親しい友人になった人々の間でしか適切ではないのです。ストレスで頭が混乱していたデイビッドは、この若い学生を怪しむようになりました。彼はベッキーを誘惑しようとしているのだろうか？

ベッキーは、神学科の学生が最終的な研究論文をタイプするのをずっと手伝っていました。ある夕べのこと、その学生がやってきたとき、デイビッドはまた彼が「ベッキー」と呼ぶのを聞きました。これがデイビッドを怒らせました。学生が職員をこんなふうに呼んで、風紀を乱すことがどうしてできるのだ？

再び、この学生は妻につけこもうとしているのだろうかという考えが生じました。彼は、どんな状況にあっても祈るといういつものやり方を忘れました。解決法を探そうとはしないで、デイビッドはベッキーを困らせました。「彼を家から追い出せ。君は、彼に、もうそういうことをしないように言うべきだ」と彼は脅かしました。

ベッキーは、デイビッドが夫としてその学生に、「君はもうベッキーをファーストネームで呼んではいけない。もし君がそうするなら、二度とここに来てはならない」と話すべきだと感じました。彼女が自分の感じたことをデイビッドに説明すると、彼は、「君はあの学生が君のファーストネームを使うのを、許すんじゃない！」と怒鳴り返しました。

彼が彼女にそんな風に話すのは、以前にはなかったことです。彼女は彼のストレスに満ちた状況が彼の理性を失わせ、理不尽な命令をさせるのだということがわかっていました。ますます彼は、彼女に対しいらだつようになりました。彼らのような理想的な結婚でさえ危機に直面しました。

デイビッドがまったく神経衰弱になってしまうことを恐れて、ベッキーは、彼女からの忠告を彼に受け入れさせてくださいと神様に

祈りました。「デイビッド、私たちは長い間休暇をとらなかったわ。私たちはここから離れなくてはならないわね。私たちだけになれて、しばらく休める静かな所を手配してくれない？」
　彼女の計画はうまくいきました。
　「僕は、ブラジル国境近くの小さな病院のひとつの会計整理をしに出張する必要がある。その仕事が終わったらアマゾン川沿いにある丸太作りのキャビンのひとつに滞在できるよ。きっとカヌーを貸してくれるに違いない。それが、僕たちの結婚 10 周年記念だ。それでいいかい？」
　「ええ、いいわ。あなたと一緒にいるだけでうれしいわ、たとえアマゾン川の真ん中でも！」
　頼りになる若い女性に子供たちの世話をしてもらうよう手配し、彼らは本当に必要だった二度目のハネムーンに出かけました。
　ベッキーは丸太のカヌーを漕ぎながら、「デイビッド、すばらしいわ」と言って、くっくと笑いました。「私の背高で黒髪のハンサムさんと一緒に、この大河の上にいる特権のことを思うとね。ここの川幅は３マイルか４マイルくらいあるでしょうね。乾燥した、茶色のリマからやって来て、緑のジャングルと色とりどりの鳥は天国を思わせてくれるわ」
　「ねえ君、君は僕を驚かせるね。明らかに君は、普通の都会的に洗練された、ろうそくの明かりを楽しむような、ロマンチックな女性ではないよ。ジャングルでカヌーに乗ったり、川を漕いで渡ったりすることが、考えられる中でも一番ロマンチックだと言う女性は多くはいないね。冷蔵庫もなく、電気もなく、水道もないところで暮らし、裸足で歩き回るのをどうしてそれほど楽しめるの？」
　「デイビッド、それが子供だった頃、私たちが出会った所よ。一緒にそういうことをしたことが、私たちの友情を結びつけたのよ。なんて尊い思い出でしょう！でもね、私は文明的な思いがけない贈り物にも感謝するわ。私は、あなたが香水やバラや他の花で私を驚かせ続けてくれて、うれしいの。あなたはとても思いやりがあって、私の誕生日や記念日に、ちょっと驚かす特別なことを考えつくのね」

「でも、僕は一度忘れたことがあった。あれは、僕らがメキシコからペルーに移った年だったね」
「あなたからの一言もなしにその日が過ぎてしまったことに気がついたとき、あなたはとても悪かったと思ったのね。だけど、数日後、あなたは早く帰宅して、とてもおかしなことをしていたわ。窓から外をじっと見てばかりいて、通りをうかがって、歩き回ってはまた見ていたっけ」
デイビッドはほほ笑みました。「そして君が『何をしているの？』と尋ねたとき、僕は言った、『ああ、何でもないよ』」
「そうね、それから少しして、私は大きなトラックが玄関に止まるのを見たわ。するとピアノをあの人たちが降ろしたのよ。ビックリしたわ！あなたは私の誕生日を忘れたことを帳消しにしたのよ」
「神様は、僕らにとてもたくさんの喜びを共有させてくださったね」とデイビッドは感慨深げに言いました。「僕らが結婚する少し前の安息日に、一緒にハンモックに座って神様と契約したことを覚えているかい？『私たちはあなたが遣わす所にはどこへでも参ります。ただ私たちがあなたに真実であるようにお守りください。み心にかなうなら、どうか私たちが、雲に乗っておいでになるイエス様を待ちながら、手を取り合って一緒にいられるようにさせてください』」
「ええ、デイビッド、そして神様は私に平安を与えてくださった。神様は、私たちを導いた所どこでも、我が家を小さな天国にしてくださったわ。イエス様がおいでになるまで私たちを守ってくださると信頼できるわ」
アマゾンでのこの短い休暇の間に、デイビッドは以前の自分を取り戻しました。その時になってやっと、彼は、自分が深刻な燃え尽き状態にいたのだということがわかりました。ベッキーを腕に抱き、彼は祈りました。「神様、どうか自分の弱さに気づかせてください。自分を働きすぎるままにしていたことをお許しください。あのような惨めな状況に二度と陥らないように、私を守り、あなたのそば近くにいさせてください」
旅行続きの５年ほどが過ぎ、ベッキーとデイビッドは、そのように長い時間家から離れなくてはならない態勢には、これ以上耐えら

れないという結論に達しました。彼らの家族は増えていました。彼らはさらに子供ふたりを養子にしてありました。彼らの娘リナより５歳年上の愛らしいペルー人の少女カティア、それにカルロスより４歳下の、やはりペルー人の小さなクリストファーです。

1992 年にデイビッドは、インカユニオンの指導者と会う約束を申し入れました。

彼は、「私はあなたがたと働く特権をとても楽しみました」と彼らに言いました。「私は自分の仕事が好きですが、変化の必要があることは確かです。私たちの子供は５人になりました。子供たち、特に下の男の子ふたりにとって、家庭に父親がいることが必要です。子供たちの霊性を、私の仕事のせいで犠牲にすべきではありません。私には変化が必要です。多分私は大学で教えることができるでしょう。私は神様が求めることは何でも喜んでしますが、家にいて家族ともっと多くの時間を持たなくてはなりません」

「残念ですが、現時点で私たちは人員削減をしなければなりません。私たちの部局に割り当てられていた外国人の働き人 90 人分の給料を、22 人に削減するよう迫られています。他のどこにも給料の予算はないのです。私たちには、今あなたが持っている仕事上での技能と経験が必要なのです。コンピューターの専門家はなかなか来ません」

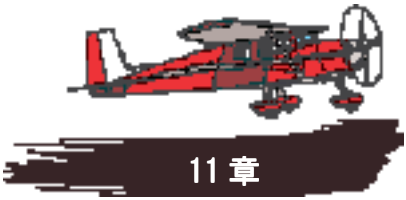
「あなたがたの問題はよくわかります」とデイビッドは彼らに同意しました。「けれども、よく祈った後で、５年間楽しんでやってはきたものの、ストレスの多いこの仕事を続けることはできないと神様に強く印象づけられました。私たちの子供たちは父親とめったに会いません。彼らには両親共に必要なのです。私たちにとってのなすべき最善の策は、合衆国への永久帰国を求めることだと思います。私は、コンピューターソフトウェアエンジニアリングの訓練を完了する必要を感じています」

決心をした後、デイビッドとベッキーは解放と挑戦を感じました。その夜、子供たちが眠った後、彼らは数時間話し合いました。

「神様は特別なご計画を、僕たち家族の未来のために持っておられるに違いない。他の人たちが目で見るだけのものを信仰によって見るように、ビジョンを僕たちに与えてくださることだろう。僕ら

は神の指導と指揮の下で、神の力と導きを見るに違いない。僕らの役割は、神様のみこころに焦点を当てることで、人々が何を言うかではない。神様の無限の力にもっぱら頼ることを学ぶつもりがあるかい？」

ベッキーは頭をデイビッドの肩にもたせかけました。「私は神様が遣わす所どこへでも行くわ。神様が、無数の問題の代わりに無限の可能性を私たちが見られるような、奉仕のビジョンを与えてくださるということを、私、信じる。神様が私たちに機会を開いてくださり、色々な障害を責任持って引き受けてくださるのを見るなんて、わくわくしない？神様が私たちのためにどんなご計画をお持ちか、それを見つけるのが待ちきれないわ」



新しい運営のもとで

デイビッドは、1993 年にソフトウェアエンジニアリングの卒業研究を終えると、トリニダードの首都ポートオブスペインのカリビニアンユニオンカレッジの学長、シルヴァン・ラシュレイ博士から連絡を受けました。

「私たちには、コンピューター業務の指導者としてぜひあなたが必要ですが、問題がひとつあります」と学長は言いました。「外国人のための予算がないのです」

「その仕事ができる人を他に見つけられますか」とデイビッドは尋ねました。

「あなたのように訓練と経験のある人はだれもいません」

「私は AVS （アドベンチスト･ボランティア･サービス）の働き人として行くことができるでしょうか？家族 7 人のための家と、私たちが食べていけるだけの手当てをくださいますか？そうしたら、私たちは喜んであなたの招待をお受けします。私たちはお金のためではなく、神様のために働きます。私たちが前進するときに神様が養ってくださるということが、私にはわかっています」

そして神様は再び事をうまく運んでくださいました。その仕事をするようになってから 3 ヵ月後、外国人のための予算が突然受けられるようになり、カレッジはそれを彼に充てました。そこでデイビッドは、トリニダードのカリビアンユニオンカレッジでのパートターム講師を始め、またセブンスデー･アドベンチストのカリビアンユニオンカンファレンス受持区域のための、コンピューター業務の指導者としての働きも始めました。彼はコンピューターを学んでい

る学生たちをしばしば旅行に連れて行き、ユニオン中の様々な国々で、彼がソフトウェアをインストールする手伝いをさせました。
　彼の任務から生じたことのひとつに、ガイアナのジョージタウンへ時々飛行するということがありました。ガイアナカンファレンス本部の人を伴ってジャングル奥地の訪問をしたときに、彼はアメリカ先住民、特にロマイナ山周辺に暮らすアカワヨ族とアレキュナ族の必要の大きさに気がつくようになりました。ガイアナ南西のこの区域はどこからも遠く離れており、巨大なジャングルや危険な河、険しい山々、それに無数の滝に囲まれています。ここでベネズエラ、ブラジル、ガイアナ３カ国の国境が出会います。
　この場所でデイビッドは、デイビスインディアンを発見しました。これらの人々は、幻の中で何回も天使と話をしたという昔のオウクワ酋長の子孫で、他の先住民たちより高貴に思えました。天使の指図により、その酋長は彼らに多くの聖書の真理を教えました。その教えに、デイビスインディアンは今も従っています。天使はかつて、神様と天国についてもっと多くを教えるために、黒い本を携えてやって来る白人のことを、オウクワ酋長に約束しました。1911 年に勇敢な宣教師 O.E.デイビスがやって来て、その約束が成就しました。彼はほんの短い期間暮らしただけでしたが、彼らはデイビスを愛し彼の教えを受け入れました。
　デイビッドが働いた他の国々の先住民部族と違い、デイビスインディアンは施しを求めることなく、与えました。彼らは自分の持っているものを気前よく他者に与えました。
　デイビッドは、宣教師がカイカンの村に住んだことはないことを知りました。彼は家に戻って、ベッキーと子供たちに言いました。「僕はこれらの愛すべき先住民たちのどれほど多くが、医療や霊的な面での助けが無くて死んでいったかと思うよ。飛行機がこれらの近づきがたい村々に行けたら、どんなに大きな祝福だろうか」
　「ああ、あなた、私、そこへぜひとも行きたいわ。私たち、その愛すべき人たちをたくさん助けることができるでしょう」とベッキーが叫びました。
　カリビアンユニオンカレッジで数年奉仕した後、デイビッドは作者不詳の次のような詩を見つけました。

おお、安易な暮らしを求めて祈るな、強くあることを祈れ！あなたの力に等しい仕事を祈るな、あなたのなすべき仕事に等しい力を求めて祈れ。そうすれば働きをなすことが奇跡となるのではなく、あなたが奇跡となり、そのようなあなたにしたおかたを賛美することとなろう。

「ベッキー、これを読んでみてくれないか、そして話をしよう。僕に考えがあるんだ」。デイビッドの真剣な様子から、ベッキーは、彼には何か特別に言いたいことがあると気づきました。

「僕らは16年近く外国で働いてきた。僕らはボランティアとして始めた。その後４年近くの間、国から給料をもらってやってきた。今は、外国人のための十分な給料と手当てで祝福されている。神様は僕らに５人の子供を与えて祝福してくださった。彼らはまもなくアカデミーやカレッジでの教育を必要とするだろう。彼らは僕らの第一の責任だ」

彼は一息入れました。彼が続けるのを待ちながら、ベッキーの心臓は鼓動を速めました。「神様は僕にガイアナの奥地のカイカン村でデイビスインディアンの宣教師になるという重荷をお与えになった。ガイアナカンファレンスにはその地域のための予算はない。僕らはもう一度ボランティアになるべきだということを、聖霊に印象づけられたよ。でも５人の子供たちを抱えて、どうやっていけるだろうね？」

「あなたは、ちょうど私の両親がペルーで、その後はアフリカでしたように、ジャングルの村で生き残るための何の手段もなしで、大家族を連れて奥地に行こうと言っているの？私の妹たちとその家族は彼らの模範に従ったわ。私たちもできるわよ」

「僕らはすでに、来年合衆国に帰ると決めた。合衆国へ戻るのを1年延期して、神様がどうなさるか試みてみようか？僕らの人生をすっかり神様にあずける時だと思うんだ。このことを子供たちと話し合おう。神様は、僕らが200マイル奥地のジャングルにいても必要なものを満たすことができる。喜んでこの危険を負い、完全に神様に頼る気があるかい？僕らの必要を誰にも言わずに、神様が何を

なさるか見てみようじゃないか。神様が真理を語っておられるかどうか、僕らは間もなくわかるよ。僕ら自身で見つける時ではないのかな？」

「私、そのつもりよ、あなた。宇宙を支配なさる私たちの神様は、きっと私たち家族７人の面倒を見てくださるわ。子供たちは、家を離れてカレッジに行く前に、神様が本当に現実のお方であるかどうかを知る必要があるわ」とベッキーがつけ加えました。「彼らは単純に生きることを学ぶでしょう、あなたと私が子供のときにしたようにね。私たちのように、彼らは奉仕の中に本当の幸福を見つけるでしょう」

デイビッドは上司であるユニオンの総理と話し合いました。「私たちは合衆国に帰ることに決めました。けれどもまず、ボランティアということで１年間ガイアナへ行き、カイカンの村のデイビスインディアンに神様のメッセージを確立する許可をいただきたいのです」

「どうして、もう１年ここにとどまらないのですか？私は、有能なコンピューター科学の教師をどこで得たらよいかわからないのですよ」と総理は言いました。

「神様は教師の必要を必ず満たしてくださいます。私たちは合衆国へ直接戻ることはできますが、１年間、むしろボランティアでの奉仕をガイアナのためにしたいのです」

しぶしぶと総理は同意しました。「それはよい働きです。彼らはそれを必要としています。あなたの思うようにしてください」

その夜夕食の席で、デイビッドは子供たちに良い知らせを発表しました。「すてきね、父さん。本当の冒険みたい」。カトリーナはいつも何か新しいものにあこがれていました。

娘たちのひとりが疑わしそうに言い足しました。「電気がないの？水道がないの？トイレもないの？それで生きていけるのかしら？」。彼女を無視して、他の子供たちはあいづちを打ち、「父さん、いつ荷造りを始めるの？」と言いました。

「早いほうがいいね。ジョージタウンを通る飛行機を手配しよう。カイカンへ行く道はないから、奥地へ行く辺境パイロットと一緒の便をつかまえないといけないな」

デイビッドは、彼の夢を合衆国にいる親戚の人々に電子メールで伝えました。「私たちはデイビスインディアンの間に、ボランティア医療伝道基地を設立する計画です」と彼は書きました。カリフォルニアのチャウチラに住むベッキーの妹ベッツィ、そして義理の兄弟テッド・バーグドルフが、短期間彼らに加わる決心をしました。

最後の給料支払い小切手を受け取った日、デイビッドの感情がパニックボタンを押しました。自分は断崖を飛び降りたのだろうか？これは憶測なのか、それとも信仰なのか？もうお金は入ってこない。彼は、「神様、どうか私に確信と、平安と信頼を与えてください」と祈りました。すぐに、エレミヤ 33:3 が彼の頭の中にひらめきました。「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」。

彼は万一これが神様のご計画でないとわかったときに帰国するための、家族全員の航空券をとっておきました。「これであなたを試します、神様」と彼は声に出して言いました。「もしあなたが私たちを養うことができず、私たちの経済を切り盛りすることができなければ、私たちは家に戻らなければなりません。しかし内心私は、このチケットをいつか短期訪問のために使うだけと思っております」

カイカンの人々は宣教師家族が来るということを聞きましたが、その良い知らせを信じませんでした。けれども、ゲイツ家族はジョージタウンに到着すると、短波無線で村に呼びかけました。「私たちはやってきました！３人の娘たちを連れた別の家族もやってきます」

家族がカイカンに着陸して受けた歓迎は、彼らを圧倒しました。村の人々は滑走路から教会までずっと小さな柱を並べ、それぞれにジャングルの花を飾りました。教会の扉の上方に彼らは大きな看板をとりつけ、それには「カイカンへようこそ」と書いてありました。150 人の村人全部が仮設滑走路のところで彼らを待ち構えていました。ゲイツ家族が教会に向かって歩く道々、聖歌隊が歌いました。

「契約の箱を運んでエルサレムにやってくるダビデ王みたいな気分だよ」とデイビッドはベッキーにささやきました。「彼らは、総理大臣だってこれほどの扱いはしないだろうよ。この人たちは本当

に宣教師が欲しいんだ。僕らはなんて祝福されていることか！宣教師たちが、仕えるためにやってきたその人々に殺されたり、石を投げられたりしたのを聞いたことがある。これはまるで赤じゅうたんの扱いだよ」。彼らと子供たちと親戚の者たちが特別に備えられた座席に導かれたとき、ベッキーとデイビッドは感極まって泣き出してしまいました。それから２時間、彼らはよく準備されたコンサートを聴きました。

カイカンの滑走路近くにあるＳＤＡ教会

それから村人たちは、家族を川の近くの小さな家に連れて行きました。それは、彼ら自身の家々と似ていました。ほほ笑みながら、村人のひとりが、「あなたがたのために用意しました。気に入ってくださるとよいのですが」と言いました。

ジャングルに住む人々はよく一つの家に数家族が雑居しているのを心得ている彼らは、ぎゅうぎゅう詰めになって中に入りました。大人たちは、その窮屈な住居を見回してほほ笑みましたが、子供たちは一緒に床にしゃがむのはとても楽しいと思いました。その小さな棚には何の食べ物もありませんでした。そこで彼らは少しお腹を空かせて床に就きました。

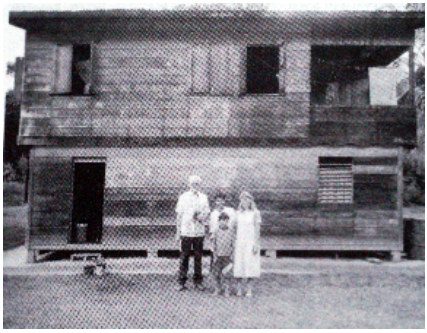
翌日村人たちは、宣教師たちには朝食に食べるものが少ししかなかったことに気がつきました。あらゆる方角から人々がバナナ、パパイヤ、根菜類など、彼らのところにあるあらゆる種類の食べ物をいっぱい詰めた袋を背負ってやってきました。

その家に食べ物を運んできた人たちの中の代表格はクラウデ・アンセルモで、彼はすぐさま奉仕を申し出ました。彼は上手な英語を話し、「私はジョージタウンの警官ですが、家庭に問題があって、実家カイカンに戻ってきました。私はあなたがたが落ち着いて、村

の生活になじむようにお手伝いします。私にできることは何でもしますから、おっしゃってください」と言いました。
　クラウデは、彼がいなければ見逃してしまったであろう多くのこまごまとしたことをやってくれるようになり、間もなくデイビッドの右腕となりました。
　看護師である大人の宣教師たちは、すぐに人々の医療面での必要に気づきました。政府が村内に小さな診療所を維持してはいるものの、その地区の保健員は２、３ヶ月の訓練しか受けておらず、多くの薬剤が不足していました。彼らは、「われわれは、村人たちに健康面でのサービスを提供することで、保健員を補佐する計画を立て始めるべきだ」という結論を出しました。
　混じりけのない澄んだ水の流れる美しい川が、彼らの小さな家のそばにありました。これは料理、入浴、衣類の洗濯に使われました。近くにある泉は、塩素剤を加えるという予防措置をとりはしたものの、良い飲料水となりました。手ごろな屋外の小屋がトイレの役割に当てられました。最初彼らは、村人たちのように薪を割り、キャンプファイヤーのような屋外用ストーブを使って調理をしました。間もなく、女性たちがこの原始的な方法に多くの時間を費やしていることに気がついたので、デイビッドは料理をスピードアップして村人への奉仕により多くの時間を使えるように、プロパンガスのストーブを入手しました。ソーラーパネルが 12 ボルトのバッテリーを充電し、高周波無線電信と夜間の明かりの電源となりました。インバーターは彼らのノートパソコンやベッキーのミシンを動かす電気を供給しました。子供たちには、周囲のジャングルや川という大きな遊び場がありました。
　カイカンで数ヶ月過ごした後、ベッキーはデイビッドに言いました。「私はこの場所が好きだわ。子供たちが、この大切な事実の値打ち、つまり幸福は事物からくるのではなくて、主に仕えることにあるのを発見したのを見ていると喜びを感じるの。彼らは喜びにあふれていて、この単純なライフスタイルで暮らすのに満足しているわ」
　「母であり教師であること、川のほとりで洗濯板に衣類をこすりつけ、アルミニウムのボートの舵を取りながら川を横切って小さな

店に行くこと、これはみんな私たちが共に働くとき、笑いや楽しみを与えてくれるわ」

宣教師たちも村人たちも、より大きな家を建てる必要を認めました。クラウデの指導で、近隣の村々の人々がカイカンの村人と一緒になって、木を切り倒し、チェーンソーで木材を準備し、建築を手伝いました。２階建ての家の１階は大きなキッチンと食堂になりました、さらに１室が患者を診るクリニックとして用いられました。２階には角にガラスの入っていない大きな窓のある広々としたリビングルーム、そして４つの寝室がありました。男たちは囲いをつけた間に合わせの戸外シャワーを、特にベッキーのために作りました。



カイカンに建てられたゲイツ家族の家
左から、ジェイ･ラントリー、カルロス、クリス、ベッキー

デイビッドの義理の兄弟テッドはベッド、食器棚、クローゼット、ベンチとテーブルを作りました。彼はまた雨水を受ける樽を備え付けて、それをパイプでキッチンの流しにつなげました。

ゲイツとバーグドルフの子供たちは皆、そのプロジェクトに貢献しました。彼らは安息日学校を手伝い、教会活動で必要とされるところではどこでも率先ました。年長の女の子たちは彼女らの音楽の才能を使って、ジュニア聖歌隊を組織しました。村の子供たちは歌うのが大好きでした。

最初の１年の間に、カイカン小学校の教師のひとりが学期の終了する前に去らねばならなくなりました。村人たちが、デイビッドとベッキーの娘リナと彼女の従兄弟ヘンディの所に来ました。彼らは共に 14 歳。村人たちは、「私たちに教えてくれませんか？」と頼みました。リナと彼女の従兄弟はその挑戦を受けました。毎日彼らはその大切な生徒たちを神様にささげ、知恵を求めました。神様は

彼らの努力を祝福してくださいました。その年の学校が終了したとき、主任の女性教師がベッキーに告げました。

「カイカンの小学校は試験で１番になりました、すべてあなたの子供さんたちのすばらしい教え方のおかげです」。後になって、２番目の娘カトリーナ、彼女の従兄弟クリステン、そして彼らの友人サラ・エイリッヂもまた学校で教える手伝いをしました。

「村の人たちに、身体を大切に扱う実際的やり方を教えなければならないわね」とベッキーは妹ベッツィに言いました。

「そうね、彼らには健康の原則や病気の予防知識がないわ。６ヶ月続くクラスを計画しましょうよ。私たちはチームで教えましょう。テッドも看護師だから一緒にできるわ」

そのクラスは大成功でした。近隣の村人たちは、宣教師たちが提供している救急法講座のことを聞きました。彼らはこの訓練を受けるために、日曜日ごとに長い道のりを歩いてやって来ました。

さらに、ベッツィーは音楽クラスを教え、パスファインダークラブをスタートしました。アドラは、ベッキーが村の女性たちに縫い物を教えるのに使う足踏ミシンを幾台か提供しました。彼ら自身の衣類のほかに、女性たちはパスファインダーのユニフォームの縫い方を覚えました。

ベッキーはある日、「新しい技能で彼らの暮らしがいっそう意義あるものになるにつれて、愛すべきこの人たちの目にある喜びを見るのはとても胸弾むことよ！」とデイビッドに感嘆の声を上げました。

バッカス牧師によるカイカンでのバプテスマ

数ヶ月後、デイビッドの両親が手伝いに来ました。父親はすぐさま土作りを始め、畑に植え付けをしました。長年の医療経験がある母親は、クリニックの手伝いができました。

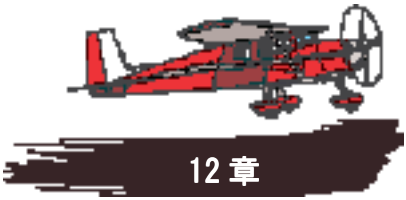
ある安息日に、デイビッドの父親が説教をした後、クラウデ・アンセルモは戸外で彼に会い、「もしあなたが今日神様に仕えるように招いてくださったら、私は人生を神様にささげます」と言いました。ゲイツ家族はこの瞬間を祈って来たので、デイビッドの父親が数日後に川でクラウデにバプテスマを授けるのを見て、とても喜びました。その日からクラウデは、村内で良い模範の力強い影響を与える人となりました。彼はまた軍隊と政府にとても尊敬されました。ゲイツがカイカンを離れるときにはいつでも、彼は彼らの家の面倒を見、村内の細々した多くのことの世話をしました。

宣教師がいるといううわさが広まり、他の村々の人々が頼みごとをしにやって来ました。「私たちの村にも来て教えてくださいませんか？」

「どこに住んでいますか？」とデイビッドが尋ねました。

「それほど遠くはありません。その道を歩いてたった４日の所です」と彼は言い、ジャングルで覆われた山々を指さしました。デイビッドは、４日間歩き、登り、川を渡り、そしてまた４日かけて歩いて帰るということを想像しかねました。何もしない８日間！

デイビッドとベッキーがガイアナに引っ越す以前に思いめぐらしていたのは、ちょうどこのような必要のことでした。道あるいは漕いで行ける川もなく、飛行機を使った伝道活動がぜひとも必要でした。彼らはそれについて夢を抱き、飛行機のために祈ってきて、その結果として、神様は信仰によって前進するよう、より大きなビジョンを抱くように彼らをそっと押し出しました。



ガイアナアドベンチスト医療飛行機サービス（GAMAS）生まれる

「ベッキー、解決はひとつだけ、飛行機だよ」と、パイロットである彼女の夫は確信を持って話しました。「だが今のところは、僕らにはかろうじて医薬品と食品を買えるお金があるだけだ」

ベッキーとデイビッドは神様の導きを求めて祈りました。信仰によって踏み出すべきでしょうか？

「神様は道を開かれる」とデイビッドは決断しました。「まずは、政府と連絡をとり、飛行機を使った伝道活動プログラムのための下準備をしよう」

初めから、役人たちは彼の頼みを退けました。しかし彼はノーという返事を無視して、「申請書はどれですか？」と尋ねました。

「この用紙だ」。そして彼らは 1 枚の用紙を手渡しました。彼は手早くそれに書き込みました。

「どんな試験を受けなければなりませんか？」彼はその試験を受けました。彼は彼らが要求することは何でもして、１年近くかかり、まただれも彼の免許取得を望んではいないようでしたが、ついにガイアナの営業用パイロット免許を取得しました。

彼は、「さあ、ベッキー、僕はやらねばならない準備をした。だが僕らにはガイアナで飛行機を使った伝道活動プログラムを始めるお金はない。『あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをして下さるであろう』（第 1 テサロニケ 5:24）という約束が、僕の耳の中でまだ鳴っている」と伝えました。

「私たちは以前に何度もその約束に頼ったわ。その約束を使い過ぎてすり減らすことはあり得ないことよ」とベッキーはデイビッド

にほほ笑みかけながら言いました。「私たちがガイアナに落ち着く前に、あなたは合衆国に飛行機を買うために行かなければならないという気がするの。合衆国に 5000 ドルの貯金があるわ。知ってるでしょうけど、世界総会がトリニダード・トバゴ共和国から合衆国に私たちの物を送り返すようにとくれたお金よ。もしもの時のためにそのお金を銀行に残しておくつもりだったけど、送るのは少しだけにして、残りは飛行機を購入するために使いましょうよ」

「その通りだね、君。病院へ連れて行く方法がないせいで死んでいく、そこの村々の多くの病人のことを聞き、僕はそれがもしもの時だと思うよ。5000 ドルでは飛行機を買うにはとても足りないが、神様がそれを何倍にもしてくださることはわかっている。よし、そうしよう」

彼女は、彼をしっかりと抱きしめました。「あなたと神様はとてもすばらしい関係を持っているわね。神様はあなたの祈りに喜んで答えてくれるに違いないわ」

神様の約束に頼って前進し、デイビッドは合衆国に向かいました。両親の家に着き、デイビッドはトレード・ア・プレイン（注：飛行機取引という意味）という雑誌を１冊買いました。それには売りに出ている何千機もの飛行機が掲載されているのです。彼はそれを注意深く調べ、ジャングルを飛ぶのに理想的な、彼の夢にかなうものを求めて、ひとつひとつ見ていきました。

「デイビッド、何を見ているんだい？」と父親が尋ねました。

「飛行機を買おうと思って見ているのですよ」

「たった 5000 ドルでかい！それで飛行機は買えないことはわかっているだろう」

「それは僕の問題ではありませんよ、父さん。まず、僕は飛行機を見つけなきゃならないのです。そうすれば、神様が責任をもってお金をくださいます。ちょうど欲しかったものをたった今見つけたばかりで、今、持ち主に電話をするところです」

デイビッドは、その持ち主に彼の必要とその理由を説明しました。その人は答えて、「もしあなたがおいでになってご覧になり、その伝道奉仕のために役立つと思うなら、数千ドル値下げして、あなたに売りましょう」と言いました。

デイビッドは電話を切り、「僕はその飛行機を見に行って来ます」と宣言しました。
「それを買うお金がどこにあるのかね？」と父親がもう一度尋ねました。
「父さん、それは僕の問題じゃありません。僕の仕事は神様がお金を与えてくださる前に、まず望み通りの飛行機を見つけることです。僕がそれを必要とするなら、神様は、『わたしの神様は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう』（ピリピ 4:19）との約束を守ってくださいますよ」
父親の顔は依然として疑わしそうでした。
「わかりました、父さん。説明しないといけないでしょう。僕には、これがビジネスをする普通のやり方ではないとわかっています。普通に受け入れられるやり方は、飛行機購入の前にお金を持っていることです。それにパイロットの主な仕事は操縦することで、他の責任を負ったりしません」
「それで、お前はどうするつもりだい？」と父親は不思議そうに聞きました。
「僕らは、神様が僕らの経済的必要の満たし方をご存知であると信頼し、まったく信仰によってのみ生きることを選びました。神様は僕らよりもずっとよく僕らの必要をご存知です。ビジネスを進めていく前に予算をきちんと立て、運転資金を用意してやっていく他の人たちに反対しているわけではありません。しかし、僕らはボランティアであることを選んだので、予算を立てるために月々もらえる給料はありません。僕らは、神様は僕らよりもずっとよく経済について知っておられるという結論を出したのですよ。神様はご自分の働きを進めることがおできになります。神様はご自分の子らを喜んで世話してくださいます。すでに神様はすばらしいみわざをなさいました。僕らは神様が、ジョージ・ミューラー、ハドソン・テーラー、またその他の人々のために何をなさったか読んだことがあります。そして神様は同じことを僕らのためにもしてくださるという確信があります。ですから僕らは、神様の約束に土台を置いて決める

のです。僕らは、神様が新分野を開拓されるのを見るために、信仰によって前進するつもりです」
「わかった。母さんも私も信仰をもって神様にまったくお任せすることや、リスクも神様にお任せすべきだということに賛成だ」
デイビッドの義理の兄弟であるビル・ノートンは、近くに座ってその会話を聞いていました。デイビッドは彼に、「僕と一緒に、その飛行機を見に行かないかい？カリフォルニアからノースカロライナまでは長い距離だ。君に一緒に行って欲しいな」と言いました。
「いいとも、喜んで行くよ」と彼は返事をしました。
その日彼らはノースカロライナに向けて発ち、デイビッドの義理の兄弟の親テッドが、「私たちには銀行にいくらか貯金がある。その飛行機を買うために君にローンで貸そう、無利子でね。神様が君にお金を与えてくださったら返してくれればいいよ」と言いました。
そこでデイビッドは、ポケットにお金を入れて出かけました。彼はその飛行機を買いました。「この飛行機はたくさんの修理が必要だ」と彼は見てとりました。「ほとんど何もかも直す必要があるが、価格は正当だ。大きな可能性が見える。ケンタッキーに飛ばそう。そこでエンジンの修理をする必要があるだろう。後で全面的に整備して、ペンキを塗りなおし、板金作業をいくらかし、無線を組み込もう」。その飛行機がケンタッキーで修理されている間、デイビッドは家族とバーグドルフ夫妻を連れてカイカンの村に行き、それから合衆国に戻って飛行機整備を手伝いました。
しばらくしてから、修理したエンジンをデイビッドが飛行機に取り付けていたときのことです。その取り付け作業を仕上げようとして働いている間、冷たい 12 月の風が暖房のない格納庫を冷え冷えとさせました。家庭から何ヶ月も離れてひどく寂しく、また寒さでいらいらし、デイビッドは自分がひどく憂鬱になっているのを感じました。午後の間ずっと彼は苦労してケーブルを接続し、ナットを締め付けながら、その闇との戦いをしていました。
これは自分にとって正常ではないとデイビッドは思いました。胎児のように丸まって毛布の下に隠れたい気分だ。すばらしい隠れ家を思い出し、彼は自分の実状を愛する主イエスにもっていき、小声でうめきました。もしこの大きな闇が敵によって引き起こされたの

であれば、どうか私から取り去ってください。60秒後に彼は口笛を吹き、いつもの熱心さに満ちている自分に気づきました。その憂鬱の闇を経験した後、デイビッドは、自分の楽天と喜びは主からの日ごとの賜物であることを認めたのでした。

翌朝、なおも喜びに沸き立っていたデイビッドに、突然ひとつの考えが浮かびました。自分の家族を驚かせて、カイカンで一緒にクリスマスを過ごせないだろうか？そうだ、いくらか経済的な犠牲を払うことになるかもしれないが、家族には絶対それだけの価値がある。すばやく電話を２、３かけ、手はずが整いました。彼はカイカンへ毎週飛ぶ便に予約をとりました。彼は自分の到着をだれにも話しませんでした。

ベッキーはその定期便に間に合うように滑走路を走って行き、デイビッドへの手紙を送ろうとしていました。彼らにとっては、別々にクリスマスを過ごすのは20年のうち２度目で、彼女は彼がいなくてとても寂しく思っていました。その飛行機が着陸し、滑走路を誘導されてやって来たとき、ひとりのアメリカ先住民の女性がベッキーに、「飛行機に乗っているのはゲイツ長老ではありません？」と尋ねました。心臓の鼓動が速くなりましたが、ベッキーはすぐに返事をしました。「あら、そんなことはありえないわ。彼は、今年はクリスマスに帰ってこないの。まだ合衆国にいて、飛行機の作業をしているわ」。その飛行機の方を期待してじっと眺めている彼女の頬に、涙がひと粒流れ落ちました。

彼女の「背高で、黒髪の、ハンサムさん」が降りてきました。彼女は彼に駆け寄り、彼の腕の中に身を投げました。子供たちとその驚きを分かち合うために、彼女は彼と手に手をとって家に歩いて行きました。

1ヶ月後、デイビッドはケンタッキーにある飛行機を取りに合衆国に戻り、それをミシガンのベーリンスプリングスにあるアンドリュース大学まで飛ばしました。そこでは、アンドリュース小飛行場の保守整備監督ブロックス・ペインが、その飛行機の離陸のための最終準備を完了するために、航空機保守整備の学生たちと働いていました。ブロックスは特にこの伝道の試みの一端を担うことにスリルを感じており、その仕事が最高の出来に仕上がるように何時間も

超過して献身的に働いてきました。彼らが新しい室内装飾品、新しいブレーキ、新しい車輪、新しい計器パネル、新しいケーブルを取り付け、そして腐食部分の修理をしているとき、デイビッドの献身は、飛行機を使った伝道への希望を彼らに注ぎ込みました。彼らはまた高周波無線のことでも骨折って働きました。

デイビッドのプロジェクトのことを聞いたある人が、格納庫をふいに訪れました。「ずいぶんと改造をしたこの２座席のセスナ 150 は、ジャングルの滑走路を操縦するには理想的なのです」とデイビッドは彼に説明しました。その飛行機には短距離離着陸（STOL ）装備と揚力を増す翼端変更装置がありました。大きくてやわらかなタイヤは様々な地形に着陸することができるでしょう。

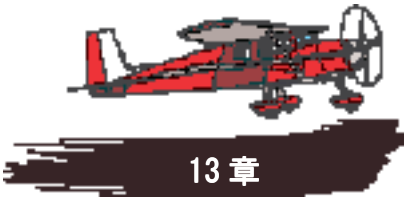
「このプロジェクトをお手伝いしましょうか？」とその人は、小切手帳を引き出しながら尋ねました。資金が他の多くのところからやってくるようになりました。その飛行機購入後３ヶ月で、テッドファミリーへのローンはすっかり返済してしまいました。デイビッドは、「神様はまたやってくださった！僕らは信仰によって前進し、そして水は分かれた！」と叫びました。ガイアナのアドベンチスト医療飛行機サービスはまもなく現実となるのでした。

ついに整備と修理は完了しました。デイビッドは黄色と赤の縞、黒い登録番号、そして緑色（ガイアナの国旗の色）の文字の美しい飛行機を点検し、ほほ笑みました。彼は、「君らは立派な仕事をしてくれた」と学生たちに言いました。「新しい２馬力エンジンと高揚力の翼を持つこの飛行機は、医療搬送事業を始めるのには理想的だ」

「ガイアナの役人たちと全部手はずを整えたのかい？」とアンドリュースの仲間たちが尋ねました。

「いや。将来の進展は神様のみ手の中にある。ガイアナに飛行機プロジェクトを設立するにあたって、僕らは並々ならないことに直面するだろうね。世の政府は奥地に伝道飛行機が飛ぶことを好ましいとは思っていないようだ。彼らはまだ、ジャングルでの生活の質を向上させる手伝いをするのに、教会がいかに有用かわかっていな

い。今までのところ彼らの反応は『ノー、ノー、ノー』だ。僕は神様が大きなことをなさると信頼している」
「神様が問題を解決なさった後の運営計画を話してください」
学生たちは深い関心を示しました。
「僕らには３つの目的がある。まず、無料の医療搬送サービス。どんな医療上の緊急事態にも対応して、病人を一番近い病院に運ぶ。第２に、健康教育を提供する。健康的な生活についての基本的原則を知っている人はほとんどいない。第３に、成功の鍵になる要因はコミュニケーションだと信じる。滑走路のあるどの村にも無線があるので、患者はいつ僕らが到着するかわかる」
「着陸にはどんな滑走路を使うのですか？」
「長さは様々で、900 フィートから 1500 フィートだ。すべてはベテランの辺境パイロットの着実な着地を要求する。ある所は濡れているときは危険だ。また他の所は風の状況が朝には安全だが、夕方は危険だ」
「へえ、あなたはたくさんのチャレンジに向き合いますね。この働きにあなたと神様が一緒に関わっていて良かったと思いますよ。私たちはこの飛行機が墜落しないように一所懸命やりました」
「本当にありがとう、君たち。僕のために、知恵と安全を祈ってほしい。ガイアナに向けて飛ぶ時が来たようだ。航空日誌をすっかり書き終えて、FAA（米国連邦航空局） の書類を仕上げるのに２日かかると思う。レイフ・アエーン〔アンドリュース航空整備学校の最近の卒業生〕が、僕の飛行の副操縦士になってくれる。彼はボランティアとして滞在するつもりでいるよ。僕は週末をイリノイの家族と一緒に過ごし、それから南アメリカに向かうことになるだろう」



13 章

マイアミからカイカンへ

家族、隣人、そして友人たちが、ゲイツ家のイリノイ農場の草地の滑走路に置かれた飛行機の周りに集まりました。いつもは力強いデイビッドの父親の声が、祈ったときに震えていました。「神様、この伝道飛行機を与えてくださって感謝します。天使を遣わして、南アメリカへ向けて飛ぶ何時間もの間、デイビッドとレイフをお守りください。私たちは、彼らとこの飛行機とをガイアナにおける神様のみわざのためにおささげします」

草地の滑走路を端まで地上移動し、デイビッドとレイフは午後 6 時ごろに離陸しました。午後 10 時半に最初の燃料補給のためにチャタヌーガに立ち寄り、彼らは主翼タンクだけでなく、15 ガロンの輸送用タンクを満タンにしました。美しい天候はフロリダに向かう夜を徹しての長い飛行を楽しませてくれました。彼らは午前 5 時に着陸し、暗くしたパイロット休憩室で 5 時間の睡眠をとり、それからマイアミのオパロッカ国際空港を目指しました。マイアミでの所用に月曜日の午後いっぱいかかりました。

火曜日の早朝、飛行機の燃料を満タンにしました。停電のせいで、オフィスが暗かったので、デイビッドは薄暗がりの中で飛行計画を提出し、燃料代を支払いました。午前 7 時には、彼らはバハマ諸島の小さな島ステラマリスへと舞い上がりました。

彼らがナッソー上空を飛んでいると、航空管制塔からの声が無線から聞こえました。「あなたはパスポートをマイアミに忘れました」。すぐにデイビッドは自分のウエストポーチがあるか調べて、見つけました。彼はそのメッセージに困惑しました。何を失くしたというのだろうか？

ステラマリスで再び燃料補給をしたとき、レイフがデイビッドに支払いのお金を貸してくれたので、彼は自分の書類かばんを取るために荷物を探らずにすみました。その夜遅く、グランドタークの島に着陸した後、デイビッドはお金の入っている書類かばんを探そうとして荷物を引っ張り出しました。パニックに襲われて、彼は声を上げました。「レイフ、僕は現金を入れた袋をあの暗いオフィスに置いてきてしまった！2000 ドル入っている！僕らが燃料補給するほとんどの場所はクレジットカードを受け付けないんだ」

プエルトリコに向かって離陸したとき、デイビッドは胃の具合がおかしくなりました。彼は孤独な５時間の夜間飛行の間、神様にたくさん話しかけました。「天のお父様、あなたは、私の人間的不手際や欠陥にも関わらず、このプロジェクト全体を支配しておられます。もし私が現金をマイアミに忘れたなら、あなたはこの問題から私たちを救ってくださることでしょう。あなたはそれが見つかり、現金がまだあるかどうかご存知です。私はあなたのみ手の中に安んじております」

神様のみ言葉を通して再び確信がやってきました。「彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、主は彼らをその悩みから救い」（詩篇 107:13）。

デイビッドはサンフアン国際空港で飛行機を降りるや否や、公衆電話に向かいました。彼はマイアミ航空会社が 1 日 24 時間営業していることを知っていました。彼の問い合わせに対し、勤務に当たっていた人が答えました。「はい、マネージャーがメモを残してあります。こう書いてあります。『燃料の支払いをしたコンピューターの上にデイビッドのかばんを見つけた。開けると、現金が見えたので、すぐにそれを金庫の中にしまった。朝、ゲイツにそれを受け取る手配をするための電話をくれるように伝えてほしい』」

ご自分の不完全な子供たちの世話を続けておられる、天の父への感謝と賛美で満たされ、デイビッドはその夜ぐっすりと眠りました。

翌朝デイビッドは、マイアミのマネージャーに電話をかけました。彼女はそのお金を郵便為替に変えましょうか、と言いました。彼女は、「すぐにプエルトリコにかばんをお送りしましょう」と言い、

「この処理をあなたには一切請求無しでいたします。私どもの顧客の方々には同じようにさせていただいています」とつけ加えました。
その小包が着くのを待って旅程日数を１日無駄にしましたが、デイビッドは神様の祝福を喜び、その時間を生かして必需品を探し求め、旅行のための食糧を買いだめしました。金曜日までにガイアナに着くための長距離飛行が待っていることを彼は知っていました。
小包郵便の飛行機は遅れ、木曜日の午前 11 時まで到着しなかったので、デイビッドとレイフがマルティニーク島に向かって離陸したのは午後 12 時 30 分でした。最近起こったモントセルラト島の噴火による火山灰から成る大きな雲が原因で、彼らはフォートデフランスでの美しい日没で終わるはずだった５時間の飛行プランを変更することになりました。ここでデイビッドはまた燃料補給をし、天気概況を聞き、スペイン語なまりのフランス語で話しながら、計器飛行の計画を提出しなければなりませんでした。
次の中継地であるセントルシア島には２つの高い火山がありました。その山頂上空 3000 フィート近くのところを飛行しているとき、緊張感が体中を走り抜けました。飛行機は火山からの乱気流が引き起こす風によって激しく上下に揺れました。彼は、「神様、私たちと一緒に飛んでいるあなたの力強い天使たちをありがとうございます」と感謝して祈りました。
その後、セントヴィンセント島の海岸沿いに点在する明かりが暗闇の中から現れ、ほっとしました。ついに、デイビッドは霧や低く広がる雲を通し、グレナダ島からの輝きを見ました。トリニダードの海岸線が水平線に見え始めると、彼の気持ちは高まってきました。
「僕はここで３年間暮らし、この空港で飛行を教えたんだ」とデイビッドはレイフに話しました。「下方はマラカス渓谷で、そこのカリビアンユニオンカレッジで僕は教えていた」。彼らは午後９時 30 分に着陸しました。税関と入国審査通過を待つ間、彼は昔の上司で友人でもある、教団会計をしているロナルド･トムソンに電話をかけました。彼はすぐに飛行機まで会いに来て、燃料補給を手伝ってくれました。そしてふたりのパイロットを、その夜の残りの数時間を彼の自宅で過ごすように招待してくれました。

彼らは午前６時 30 分に離陸し、３時間半後にはガイアナに着陸しました。ジョージタウンの下町にある小さな空港に着陸する直前、デイビッドはレイフに説明しました。「僕らがカイカンへの飛行許可を得るには神様の奇跡が必要だ。たいていこれには飛行機到着後何週間も、あるいは何ヶ月もかかる。僕は娘のカトリーナの８年生卒業式にどうしても出席したい。それに姪のクリステンも同じく卒業する。さあ、祈ろう」

ジョージタウンに着陸して地上移動するデイビッドを、飛行機整備工とパイロット数人がじっと見ていました。空港の管理者は、「あなたの飛行機をずっと後ろの隅に止めなさい。しばらくはその機を飛ばすことはないでしょう」と指示しました。

「そうかもしれませんが、私は本当にそうなるとは思いません」とデイビッドは彼に言いました。「私はすぐにその機を飛ばすことになるでしょう。民間航空の社長に話をする間、ここにとめていいですか？」

「なぜ？」

「私は今日奥地に飛びたいのです」。みんな笑いました。

「そんなことは聞いたことがない。われわれが飛行機を国に運び入れるときでさえ２、３ヶ月は待たなきゃならない。どこへだって、あなたが今日飛んで行けるはずがないね！」

民間航空のオフィスへ向かう途中、デイビッドは神様の約束を求めました。「われらは神様によって勇ましく働きます」（詩篇 108：13）。オフィスの中で、彼は副社長に頼みました。

「ほんとうにあなたを飛ばせることはできません」とその副社長は答えました。「あなたにはもっと経験が必要です」

「私はジャングルで 10 年間飛行してきました」

「そうではありません。私が言っているのは、ガイアナでの経験がもっと必要だということです」

「私はすでにアイランダー機やセスナ 206 共に、少なくとも 10 回は、エアタクシー[不定期短距離用の小型旅客機]の副操縦士として、カイカンの村に着陸したことがあります。ルートにも小飛行場にもとても慣れています。なぜ 10 回以上も経験が必要なのでしょうか」

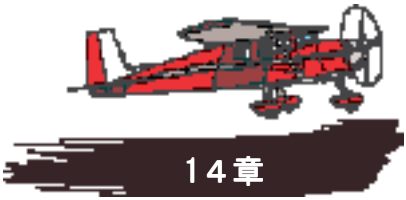
「慣れるまでに、少なくとも 20 回の経験が必要です」
「私が 20 回飛んだ後、今度は 40 回必要だと言うのではないでしょうか。どうか、社長ご本人と話をさせてくださいませんか？」
「よろしい、あなたは幸運だ。社長は今日いますが、彼もあなたを飛ばせはしないでしょうよ」
「それでも、どうか彼に会わせてくださいませんか？」
デイビッドは祈りながら、社長室へと歩いていきました。社長の第一声は同じでした。「いいえ、気の毒だが、私はあなたをそこへ飛行させるわけにはいきません。あなたにはもっと経験が必要です。その飛行は危険すぎるので、あなたの頼みを断らなければなりません。あなたには少なくとも 20 回の経験が必要です」
少しがっかりしたデイビッドは、導きを求めてもう 1 回神様に祈りをぶつけてから、嘆願しました。「怒らないでください。けれどもぜひもう一度あなたと話し合わせてください。おわかりですか、私の家族はカイカンに住んでおり、私の娘と姪は月曜日に８年生を卒業します。私はしばらく合衆国に行っておりました。お願いです、私は家族にとても会いたいし、卒業式に参列したいのです」
「ということは、あなたの家族は、ここジョージタウンには住んでいないということですか？」
「ええ、私の家族はカイカンに住んでいます。そこが私たちの故郷の村です。家の近くに滑走路があります。私はそれをとてもよく知っています」
「ああ、それなら話は別です。私はあなたの家族がそこに住んでいるとは思いませんでした。あなたの確信は明白で、こちらをその気にさせますね。飛行許可を出します。どうか気をつけてください。ここで、その書類にサインしましょう。今日出発できます」。デイビッドは許可書類を手にし、心の中で賛美の祈りをしながら外に出ました。
デイビッドが、「私が飛行計画を提出している間に、この飛行機の燃料補給をしてください」と頼んだとき、空港管理者の開いた口はふさがりませんでした。彼は航空管制係官に、民間航空の社長サインのある許可書類を手渡しました。ガイアナ到着の当日に、奥地への飛行が許されるとはだれにも信じられませんでした。しかし、

デイビッドは、神様だけは人の態度を変えることがおできになることを知っていました。飛行機が離陸すると、彼は天に向かって叫び声を上げました。「神様にとって不可能なことはひとつもない！」

道沿いにある目印を確認しながら、デイビッドはジャングル上空を２時間飛行しました。カイカンへの降下を始めたとき、彼の目は涙でいっぱいになりました。地上移動に入ったとき、村人みんなが待っているのが見えました。シートベルトをはずして機外に出る前に、村の男がほとんど全員上って来て、みんなが一度に彼を抱きしめようとしました。村人たちは、これらのことをみな可能にしてくださった神様への特別の感謝の祈りをささげるために、円になってその飛行機を囲みました。

医療用の飛行機をついにカイカンの故郷に着陸させてくださった神様に、感謝と喜びを注ぎ出しているデイビッドの声は、何回か途切れました。これらのインディアンが仕えるすばらしい神様への賛美は、ジャングルに響き渡りました。ベッキーは、この尊い帰郷のときに、天使も歌っているのを聞く思いでした。安息日に入るちょうど 20 分前、彼らは飛行機をマンゴーの木の脇に押して行って固定しました。

セスナ 150 の整備中のデイビッド、アレキサンダー、
そしてクラウデ・アンセルモ



14章

デイビスインディアン実業学校

デイビッドがした飛行機という買い物は、神様が今もなお奇跡を行うのを喜ばれることを証明しました。しかしその飛行機の操業についてはどうでしょうか？ガイアナでは燃料は非常に高価で、奥地では特にそうです。しかし信仰によって、ガイアナアドベンチスト医療飛行機サービス（GAMAS）は、医療を要する患者を病院へ往復搬送する働きを始めました。

デイビッドが食料、医薬品、燃料のためにお金を費やすたびに、だれかが飛行機でやってきて、「私は、これをあなたの費用に当てるために与えるようにという印象を強く受けました」と言って、贈り物を置いていくのでした。

与え、そして受けるというこの手順はデイビッドの頭の中にますます浸透し始めました。与えることは実は受けることだ！神様があなたの財務官であるときには、そうなのだ。

ある時、大金が入ってきました。「僕らは間違ったことをしているのかな？」と彼はベッキーに尋ねました。「僕らはここでの必要に対して十分に費やしていないに違いない。神様が、僕らに、もっと大きなことを考えて行動するように、もっと多くのことをこれらの人々のためにするように告げておられるのだろうか？」

「今の状況はこうじゃないかしら。私は、十代の子供たちには小中学校以上の学校が必要だということに気づいてきたの。奉仕に青年を備えるための学校が、この地域には欠けていると思うのよ。彼らは偶像に囲まれていて、ある者たちは問題を起こしているわ」

ベッキーは大きく腕を動かして、「この村のあまりにも多くの青年が、神様の教会からさまよい出ているわ」と言いました。

「そうだよ！彼らには寄宿制の高校が必要だ。それを建てよう」とデイビッドの熱心が沸きあがってきました。「1963 年までは宣教師たちがパルイマの近くで学校を運営し、繁栄していた。新政府に取って代わったときに、何もかもが閉鎖してしまった。撤退を強要されたトール家族が 1964 年に学校を閉鎖したのだ。僕らはその所在地を調べる必要がある。この村から 1 マイルも離れていないよ。そこの土地はとても肥沃だということを僕は知っている。何でも育つ」

笑顔で歓迎

いつも行動の人であるデイビッドは、パルイマの仮設滑走路に向けて飛ぶ手はずを整えました。それはだいぶ前にウィリアム･トールによって建設されたものです。彼はその村の上空を数回旋回して、人々が村からカマラング川を越えて仮設滑走路まで彼に会いに来るように、注意を喚起しました。彼は下方の美しい地域に目を留めました。村は半島に作られ、三方が、黒く見えるけれども澄んだカマラング川に囲まれています。その水は岸沿いの木々と根のせいで黒く見えるのです。それから彼は、かつては学校のキャンパスであったところを旋回しました。いくつかの小さな崩れた建物と宣教師の家だった少し大きな建物が見えました。そのキャンパスの背後には堂々とそびえ立つレイン山があり、その向こうは人跡未踏の熱帯雨林です。

彼は着地して、神様と話しました。「人々にビジョンをお与えください。今見るのは荒廃だけです。若者はだれもおらず、ジャングルだけです。けれどもあなたは、そのすべてを変えることがおできになります」

その場で、デイビッドはパルイマの町議会を開く手はずを整えました。デイビッドの知らない方言を彼らは話すので、彼はカイカン

から友人のアルバート・アントンを通訳のために連れて来ていました。
「あなたがたはここに聖書訓練学校が欲しいですか？」と彼は議会に尋ねました。
「はい、欲しいです。けれどもどこから教師を見つけるのですか？」
「お金が来る所と同じです。神様が奇跡をなさるでしょう。けれども、私が聞きたいのは、あなたがたはそのために必要なことをする気があるか、一所懸命に働くつもりがあるかということです」
彼らはしばらく考えました。「私たちは倒した木と切った板の分は請求します」と代表者が言い、その金額を口にしました。
「ちょっと待ってください」とデイビッドが口を挟みました。「これはあなたたちのプロジェクトであって、私のではありません。私はここにお金を持っては来ません。もし学校が欲しければ、あなたたちが建てるのです！私はガソリンとチェーンソーを提供しますが、あなたたちが建てなければなりません。神様が私たちの必要を満たしてくださるでしょう」
「ところで、私たちは労賃を請求して、そして･･･」
「いえ、いえ。労賃の請求やお金の工面について話しているのではありません。聞きたいのは、あなたたちはこの学校が欲しいですか、それとも欲しくありませんか？」
議員たちは彼らの間で話し合いを始めました。デイビッドの通訳は、彼に会話の流れを伝えました。彼らは提供される奉仕への標準賃金を各村がどうするか、そして各々がどのように支払いを受けるべきかを論議していました。再びデイビッドが口を挟みました。
「みなさん。もし私たちが本当に学校を建てたければ、それは与えて与える関係、また両者に有利な関係にしなくてはなりません。あなたたちは労働と木材を提供します。私たちは燃料と道具類を提供します。正直に言って、私には今、お金はありません。神様が私たちの必要全部を満たしてくださると、私はわかっています。神様はいつでもそうしてくださいます。でも、あなたたちが労働を提供しようとしないなら、私は他の村に行きます」

女性たち、青年たち、そして子供たちが町役場の建物の回りに立ち、熱心に聴いていました。デイビッドの耳に、外にいる彼らが、開いた窓を通して村の議員たちに叫んでいるのが聞こえてきました。彼はアルバートに、「彼らは何と言っているの？」と尋ねました。

「女性たちは男たちに、『愚かであっちゃだめだよ。30年間ここには学校がなかった。あんたがたが分を果たさないなら、もうここに二度と学校を持てないだろう』と言い続けています」

外にいる人々からの声で、ほどなく男たちは結論に達しました。「私たちは労働力を提供します。私たちの分を果たします」

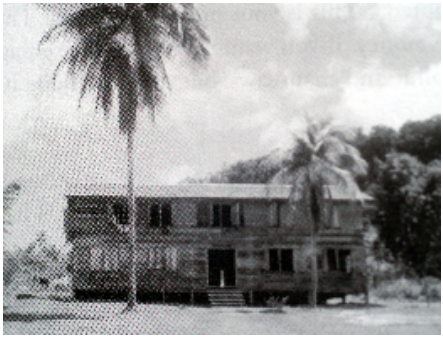
「すばらしい！」とデイビッドは叫びました。「私たちが神様と共に働くとき、これが両者に有利な解決となるでしょう」。デイビッドは、意見が合ってほほ笑んでいる議員たちと握手をしました。

「さあ、一緒に計画を立てましょう。まず1950年代に建てられた古くて大きな家を修繕する必要があります。これは女子寮と女性教師たちのためにちょうどよいでしょう。それから小さいほうの家々は当座の男子寮、男性教師たち、家族持ちの住まいにできるでしょう。屋根は漏り、床は安全ではないかもしれないが、私たちがもっと大きい建物を建てるまで、あなたたちの修理技術でしばらくの間は使えます」

デイビッドの構想と信仰に啓発されて、彼らは神様が彼らを導き、賢明な計画を立てさせてくださるように祈りました。長い話し合いの末、デイビッドは彼らから出てきた計画をまとめ上げました。

「最初の建物は２階建てになります。２階はまずは男子寮になり、１階には３つの教室と教師の小さなオフィスが２つ。２番目の建物は１階に聖書研究者訓練プログラムのための教室とチャペルのある宗教センターです。２階は図書館と視聴覚センター、そしてその他の教室になります」

鍬入れ式の１ヶ月前、村の人々は働いて建設予定地



デイビスインディアン実業学校の最初の新校舎

のやぶをはらい、縄を張り巡らしました。1997年10月4日、川の近くにある丘の上のセブンスデー・アドベンチスト教会は、多くの出席者でいっぱいになりました。午後3時に、ある人たちはパルイマからその学校までの1.2キロの小道を歩いて来ました。またある人たちは学校建築現場までカヌーを漕いで川を上ってきました。みんながその鍬入れ式に向かってやって来ました。

その式の最後の話し手デイビッドは発表しました。「この学校は神様のご計画に焦点を合わせます。学生たちは全員労働をし、他の人々への奉仕を通じてキリストに仕えることを目標にして勉強します。これは神様の学校であることを覚えてください。神様がプロジェクト全体の財政を管理されます。私たちが信仰によって前進するときにだけ、油の器は空になることはないということを、神様ははっきりと示されるでしょう。周囲の村々からやってくる多くの青年たちは、キリストを中心とした環境の中で、学問的また実際的な訓練を得る機会を持つことでしょう。どうか毎日この心躍るプロジェクトのために祈ってください」。

パルイマ教会

建築はすぐに始まりました。彼らはジャングルの木を切り倒し、チェーンソーで荒削りの板にしました。重い生の板をジャングルから何マイルもひきずってくるのは骨折り仕事でしたが、パルイマの人々は神様が財力を供給してくださるという愛と信仰とをもって働きました。資金がひっきりなしに入って来て、すべては順調でした。

学校での仕事がはかどっている間、デイビッドはぎっしり詰まった飛行スケジュールを続けました。飛行燃料を供給してくれるジョージタウンの会社は、月末に請求の支払いをする条件で、必要な時に満タンにさせてくれました。

数ヶ月の間は、燃料請求の支払いをするのに十分な資金が入って来ました。それから、２日の内に請求額 1,000 ドルの支払いをしなければならないという月がきました。デイビッドが銀行の預金残高を調べたところ、200 ドルしかないことがわかりました。彼はその資金を引き出し、いくらか余分の献金を受け取ってはいないかどうかを問い合わせる電子メールを父親に送りました。答は、「ノー」でしたが、その問題をその夜の特別な祈りの課題にするべきだという励ましの知らせが添えてありました。デイビッドが祈りを依頼する無線をカイカンへ打つと、義理の兄弟のテッドが別に 100 ドル寄付してくれました。けれどもそれは 1,000 ドルという必要には全然足りませんでした。

困惑してデイビッドは祈りました、「主よ、あなたはあらゆる資源をお持ちです。あなたは今まで、私たちの必要を満たすことがおできになりました。あなたがお送りくださる資金以外、私には資金を得るどんな方法もないことをあなたはご存知です。もし私がこの請求書の支払いをするお金を得られなければ、飛行機を飛ばせず、パルイマでの建築作業を停止せざるを得ません。なぜあなたは、私たちをここまで連れてきながら、その仕事を止めさせるのでしょうか？幾千という丘の上の家畜を所有しておられるあなたは、神様は今月必要な資金提供ができなかったと村々に言い広めるのをお望みですか？」

「私たちの必要を満たすのに、神は私たちにはわからない多くの方法を持っておられる」ということを思い出し、デイビッドの心に平安があふれました。彼はその夜ぐっすり眠りました。朝早く彼は起き、個人礼拝を始めました。再び彼は祈りました、「主よ、平安を与えてください。私に仕事を止めてほしければ、私は喜んで仕事を止めるつもりだということをあなたはご存知です。けれども、私はあなたが私たちをここまで導いておきながら、資金を止めるのをお許しになるなどと信じたくありません」

彼は聖書の学びに第１列王記 17 章を選び、エリヤとやもめと日ごとに尽きなかった油の壷について読みました。突然ひとつの考えが与えられました。（そのやもめのように、あなたが持っているものを使いなさい。けれども主よ、私に必要なのは油ではなく、現金

です）と彼は反論しました。彼は、少なくとも持っているものを数えてみるべきだとの迫りくる印象に抵抗できませんでした。（それは無駄だ）と、彼は理屈をこねました。（いくらあるかはすでにわかっている。銀行から引き出して来たばかりだ。）けれどもその印象があまりにも強かったので、彼は抵抗しないことにしました。ただ自分のお金を数え、その事にけりをつけることにしました。

デイビッドは書類かばんを開き、銀行の封筒を取り出しました。彼は、前には見なかったたくさんの 20 ドル紙幣と数枚の 100 ドル紙幣を見てびっくりしました。そのお金を何度も何度も数えなおしました。合計で現金が 1,050 ドルあり、燃料請求の支払額以上あることが信じられませんでした。

学生たちと一緒に教会へ向かうベッキーとデイビッド

心は感謝であふれ、デイビッドはひざまずきました。「神様、天使を遣わしてお金をここに入れてくださったことを感謝します。あなたはまたも必要を満たしてくださいました」。聖書を開き、彼は声を出して読みました、「わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。･･･良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる」(詩篇 103:2,5)。「主の人の子らに対する恵みとすばらしい奇跡のゆえに主を賛美せよ！」彼はその驚くべき奇跡の知らせを家族に無線で知らせ、父親に電子メールを打ちました。燃料代の支払いのためにその資金を受け取った若い女性は、「ゲイツ機長、私たちはあなたと取引するのが好きです。なぜなら、あなたはいつも支払いをしてくださるからです」と感想を述べました。デイビッドは心ひそかに、（神様はご自分の子らが期日に支払いができると栄誉を受けられるのだ）と思いました。

６ヵ月後、デイビッドは周囲の町や村に発表しました。「学校を始める準備をしましょう。臨時の建物は修理されました。新しい建物はまだ完成していませんが、神様は間もなく教師たちを与えてくださるでしょう」

「先生なしでどうやって学校を始められるのですか？」と疑い深い親たちが尋ねました。

「私は主から教訓を学んでいます。あなたたちが何を持っているかいないかという問題ではありません。問題は、神様がしてほしいことを、あなたたちがしているかどうかということです。

私やあなたたちではなく、神様が結果に責任を負われます。開校の日にちを発表して神様がなさることを見ようではありませんか。

毎朝、学生たちと教師たちが農場で、菜園で、あるいはキャンパスの清掃、またはキッチンで働くようになるでしょう。畑の作物が実るまでは、親たちが食物を供給するでしょう。午後彼らはクラスに出て英語、スペイン語、宗教、音楽を学ぶことでしょう」とデイビッドは締めくくりました。

学校が始まる２週間前、神様は、グアドループとマルティニーク島から来たゴティンとマシウスという２組のフランス人夫婦に、臨時という条件で、初年度ボランティアとして教えることを強く印象づけました。人々は、神様がどのようにして教師をお与えになるかを見て、大きな興奮がパルイマに広がりました。

村人それぞれが、週に１日を学校建築の奉仕にささげました。完成が近づくのを見て、彼らは２階建ての建物の細部を仕上げるため、４月に丸々１週間を特別に当てることにしました。入学予定の学生たちが４ヶ月前にやってきて、農場に植え付けをし、土地をきれいにし、現存する家々を修繕し、台所と食料保存の部屋のために臨時の草葺屋根の建物を備えました。デイビッドは米 90 キロ、二つ割の乾燥豆 45 キロ、粉 45 キロを飛行機で運びました。すべてはボランティアの昼食にと寄付されたものです。神様は、最初の建物のための献堂式を準備しながら喜んでいるご自分の子供たちを、ほほ笑んで見下ろしておられたに違いありません。

１週間後、カリビアンユニオン会計のローランド･トムソン、その他にアンドリュース大学からの訪問者たちが、宗教センターと図書

館の鍬入れ式のためにパルイマへ飛んで来ました。ユニオンのグローバルミッション部門を代表してトムソンが、なされた仕事への感謝を表明し、そして伝道の働きを始めるための、ユニオンからの多大な経済的贈り物を贈呈しました。

18ヶ月の労働の後、パルイマのデイビスインディアン実業学校は、1998年10月半ば、31名の学生たちにその扉を正式に開けました。これは30年間でただひとつガイアナにできたアドベンチストの学校でした。多くの申込者の中から注意深く選抜されたこれらの献身したパイオニアの学生たちは、７つのジャングルの村からやってきました。海外からの４人の職員と３人の地元のスタッフメンバーは皆ボランティアで、宣教師訓練を受けるこれらの若者たちにしっかりしたキリスト教教育を与えるために献身した人々です。どの生徒も午前に４時間働き、午後に４時間勉強するのです。

学校は授業料無料なので、大きな疑問がなおも起こりました。「どうやってこれらの学生たちを食べさせるのですか？」学生のほとんどはジャングルの村々から来ており、ベネズエラから来た学生たちは山々を越えて長い距離を歩いて来たので、食べ物を多くは持ち運べませんでした。彼らの両親も毎週食べ物を運ぶことはできません。神様はご計画をお持ちだと知っている宣教師たちは祈りました。

デイビッドは翌朝目覚めたとき、ノルマ・トーマスという婦人と会うことを思い出しました。彼女はカマラングの村長で、また彼らの村々を向上させるアメリカ先住民のための働きに食物を提供する非政府組織 SIMAP の地域代表者でした。デイビッドは彼女を訪問しました。彼が学校の問題を話すと、彼女はほほ笑みました。

丸い草ぶき屋根の、子供のための安息日学校の部屋

「ゲイツ機長、先週私たちはノルウェーから 100 トン以上の食物を受け取りました。様々な製品です。私たちはこのたくさんの食物を保管する場所を急いで見つけなければなりません。私たちの組織は、あなたがたの農場が生産し始めるまでの最初の 1 年間、これを使うことに賛成するはずです。私は各学生に食物を提供するように、またパルイマにそれを運ぶのに必要なチャーター便の費用を払うように頼んでみましょう」

約束された供給品が到着し始める前に、学校では食物が尽きてしまいました。学生たちと職員は、必要を満たしてくださるように神様に祈り求めました。同じ日に、数艘のカヌーが、心配した親たちによって送られた食物を積んで到着しました。献身した親たち無しでは、学生たちはお腹が空いてしまったことでしょう。翌週 700 ポンドの食物を乗せた飛行機が到着しました。神様は祈りを聞き、答えてくださいました。

その最初の 1 年間デイビッドは、1,000 時間近く飛行しました。悪天候は彼を何日間か足止めにしました。安息日には、緊急の医療的な非常事態、あるいは村での説教の約束を果たすためにだけ飛びました。こうして、飛行する日には、彼は空中で 5 時間から 8 時間を過ごしました。時には 1 日に 17 回の飛行ということもありました。夜、彼はぐったりとなって眠り込むのでした。

燃料代の請求には誰が支払いをしたのでしょうか？神様が、必要な資金を提供するように、多くの人を促してくださいました。

神様は、どのようにしてこの小さな飛行機を、福音への扉を開くためにお用いになったでしょうか？多くの村にはセブンスデー・アドベンチストへの敵対感がありました。ひとつの村では、人々はアドベンチストの訪問者に石を投げ、彼らが去るまで止めようとしませんでした。デイビッドは、ある患者を医者のところに連れて行くためにその村に着陸したとき、その同じ敵対的な態度を感じました。ある日、その村のウェスレー教会から来た牧師が飛行機に大胆に近づいてきました。

彼が立ち去る前にデイビッドは、「牧師さん、私が去る前にお祈りを導いていただけませんか？」と呼びかけました。

「私がですか？」

「はい、あなたは牧師ですよね？」
「そうです」と彼は頷きました。「ゲイツ兄弟と飛行機と病人を神様が祝福してくださるように、さあお祈りしましょう」
その後、その牧師は定期的にやって来ました。デイビッドはいつも、彼に祈りを頼みました。
もっと後に、ハレルヤ教会の牧師が思い切って近づいて来ました。デイビッドは彼にも祈りを頼みました。このような接触が続き、ますます親しくなりました。ついに、デイビッドは、かつては敵対的であったこの村の町議会と話し合いができるか頼みました。
「シリーズもののビデオを持って来てもよいでしょうか？私たちはそれを NET’95 と呼んでいます。やはりアメリカ先住民である私たちのバイブルワーカーが、ビデオプロジェクター、大きなスクリーン、発電機を持って来ます。話す人はマーク・フィンリーといって、すばらしい方法で聖書の真理を見せてくれます。伝道説教のシリーズを５週間お見せしましょう」
以前だったらその村の人々は、デイビッドに石を投げつけたかもしれません。けれど今、町議会は満場一致で「賛成」と票決しました。その後、ウェスレー派の牧師が手を上げ、「私の教会から全部の椅子を運んできましょう、そうすれば彼らは集会を持てるでしょう」と発表しました。
毎晩その村の人々は町の公会堂をいっぱいにしました。ビデオシリーズの最後に、およそ３分の１の人々がバプテスマを受けました。彼らの多くはウェスレー派教会から来たのですが、牧師は気にしないようでした。彼はデイビッドに尋ねました。
「いつか、あなたのビデオプロジェクターをお借りできますか？」
「牧師さん、いつでも必要なときに喜んでお貸ししますよ」。こうして神様は尊敬、愛、親切、そして飛行機による医療の働きを用いて扉を開かれました。
ある夕べの家庭礼拝の時間に、ベッキーはデイビッドに言いました。「もうすでに神様はとてもたくさんの機会を開き、チャレンジを与えてくださったわ。私たちは、神様が約束をお守りになるかどうかを見るために、神様を試すことに決めたわね。本当に、私たち

家族は、ローマ 4:21 でパウロが、『神様はその約束されたことを、また成就することができると確信した』と言っていることに同感だわ」

15 章

闇の中での悩み

数週間後、デイビッドと彼の長女ケイティは、「するべき」ことの長いリストを持ってジョージタウンに飛びました。用事が終わり、ガイアナ教団本部のオフィスに行って、数時間電子メール通信に返事をしました。暗くなってから、宿泊するデイビス記念病院に行くためにタクシーに乗りました。

デイビッドは、「運転手さん、病院から数区画のところにある店で降ろしてください。夕食のために何か買わなくてはいけないので」と言いました。

ふたりは食品を入れた小さな袋を抱え、またデイビッドは書類かばんをしっかり抱えて、病院への短い道のりを急ぎました。デイビッドはその通りを何度も歩いたことがありましたが、今回はひどく居心地悪さを感じました。彼の天使は彼に何かを告げようとしていたのでしょうか？行く手に彼は、見たことのある３人の若者を見ました。彼らは通り過ぎる人々によく言いがかりをつけます。急ぎ足で歩きながら、デイビッドは後ろを振り向きましたが、後をついてくる人はだれもいませんでした。

角を曲がって病院の明かりを見たとき、デイビッドはほっとしてケイティに、「病院の門まであとほんの 1500 メートルくらいだ。暗い中を一緒に行ってくれる守護天使にとても感謝するよ。父さんは『主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる』という約束が好きだ」と言いました。

その直後、デイビッドは後頭部を棍棒で数回打たれました。彼はバランスを失って前のめりになりました。ケイティは誰かに後ろからつかまれて、頭を殴られ、叫び声を上げました。デイビッドは、

他の男が書類かばんをぐいと引っ張ろうとしたときに、かばんをしっかりと抱え込みました。袋から食品が周囲に散らばりました。彼が目を上げると、最初の男が片手でケイティを捕まえ、片手に木の棍棒を持っているのが見えました。彼は顔の右側をまた強くぴしゃりと打たれました。彼は、自分たちが歩いてきたときに見た男だと気がつきました。ケイティは何度も叫んでいました。デイビッドは自由な方の手で、彼女の片方の足をしっかりつかんでいました。彼女を離してはならないと感じました。病院のガードマンが聞いてくれるのを望みながら、彼は「助けてくれ！」と叫び始めました。

デイビッドの書類かばんをひったくることができず、第２の男が彼のズボンのポケットを探り始めました。幸運なことにデイビッドは、暗い通りを歩く前にポケットを空にしておきました。ちょうどその時、1 台の車が通りかかり、そのライトが彼らを照らしました。ふたりの男はすぐに消えました。病院の守衛ふたりと幾人かの看護師が、騒ぎを聞いて駆けつけてきました。

「ああ、ドクター・ゲイツとお嬢さん、あなたがたですか！お気の毒です」。「ドクター」の肩書きは、デイビッドが、トリニダードのカリビアンユニオンカレッジで幾年か教えたことからきたものです。

彼らはデイビッドとケイティを助けて病院の中に入れ、応急処置を施し、警官を呼びました。３人の警察官が到着した頃には、デイビッドの頭の痛みは減ってきていました。ラナ医師は医療書類を書き上げました。

「あなたが食品を買った場所と歩いた道筋を確認しに、小型トラックで私たちと一緒に行けますか？」とひとりの警官が尋ねました。

「はい、行けると思います」

警察のトラックが道路の入り口に近づいたとき、デイビッドは、あの３人の男が何事もなかったかのようにぼんやり立っているが見えました。

彼らを指差して、デイビッドは「あれが私たちを襲った者たちです」とささやきました。

すばやくトラックを止めて、警官は彼らに後ろに乗るように命じ、警察署に向かいました。もっと明るいところで、デイビッドは彼ら

のうちのふたりを暴漢と見分けました。彼らは関係ないと否定しましたが、デイビッドは起こったことを全部供述しました。３人目は釈放され、他のふたりは拘留されました。「私はとても疲れて、気分がよくありません。午前 1 時です。眠りたいので、病院に連れて行ってください」

「更なる取調べのために、娘さんと一緒に明日戻って来るなら、喜んでそうします」

翌朝、朝食の後、車のライトで照らし出された男を見た守衛とケイティとデイビッドは、一緒にタクシーで警察署に行きました。警官はひとりひとり別々に、暴漢が座っている部屋に連れて行きました。ガイアナの法律では、告訴人は前に出てその人に触れることで、容疑者を確認しなければなりません。このやり方は、ストレスの下で気力が衰えているケイティをぞっとさせました。彼女は泣き出し、多くの質問に答えられませんでした。デイビッドは、「彼女に勇気をお与えください、主よ」と祈りました。

警察官は、デイビッドが彼女を助けるためにその部屋に入ることを許可しました。数分後、彼女は落ち着きを取り戻し、供述を終え、署名しました。

その苦しい体験の後、彼らはジュースショップに行き、椅子にへたり込み、パイナップルとチェリーのジュースを飲んで元気を取り戻しました。

「父さん、なぜ私たちの天使は夕べ現れなかったのかしら？」とケイティが尋ねました。

「ケイティ、時には神様は痛みや損失をお許しになる。私は君のなぜという質問に答えられない。でもいつの日か、ヨブのように、私たちが単純に神様に信頼すれば、神様は必ず支えてくださるということがわかるだろう。私たちが頭を殴られたり血を流したりしても、神様は私たちを離れることもないし捨てることもなさらない。エレミヤのように祈ろう、『主よ、わたしをいやしてください、そうすれば、わたしはいえます。わたしをお救いください、そうすれば、わたしは救われます。あなたはわたしのほめたたえる者だからです』(エレミヤ 17:14)。」

16 章

ジャングルでの暮らし

デイビッドとベッキーは、熱帯で最悪の、寄生虫による病気マラリヤの危険にたえず直面しました。この恐ろしい病気がカイカンで大流行したことがありました。やっかいなことに、適切な治療を施すためには、患者が苦しんでいるのは主な２つのタイプのマラリヤのうち、どちらなのかを判別しなければなりませんでした。マラリヤ原虫ヴィヴァクスはクロロキンとプリマキンに反応しましたが、マラリヤ原虫ファリシパラムはいっそう深刻で、命取りになることがよくあるタイプで、キニーネその他の薬品を必要としました。

ある夜、真夜中近くに、彼らは、誰かがドアを何度も叩く音で目が覚めました。心配そうな声が叫んでいました、「イングリッドがまた吐いています」

「すぐ行きます」とベッキーの母親が答えました。

「私が一緒に行くわ、母さん」。ふたりは蛇対策のためにズボンをはき、靴を履きました。

新しい村民エロルと彼の内縁の妻イングリッドは、1 歳のタイザと２ヶ月の赤ん坊ニコリータの親で、３人の子供がいるエロルの姉妹ルシータとその夫フリーマンと一緒に住むため、カイカン村に数ヶ月前にやって来ました。彼ら全員が、幅９フィート（2.74 メートル）長さ 12 フィート（3.65 メートル）の小さな家に住んでいました。イングリッドは深刻な型のマラリヤで苦しんでいました。彼女は重症だったので、赤ん坊に乳をやることができませんでした。間もなく小さなタイザが感染し、それからルシータの夫フリーマンが感染しました。感染前の何ヶ月かフリーマンは病気でした。彼は非常に弱って黄疸にかかっていたので、デイビッドはジョージタウン

の政府病院に彼を運んだことがあります。フリーマンは今、病気をぶり返して苦しみ、寒気で木の葉のように震えていました。
　あまりにも多くの病人で、ルシータの小さな家は病院のようでした。イングリッドは何度も吐きました。小さなタイザは熱で燃えるようになっていました。イングリッドは薬を飲み込めなかったので、ベッキーと彼女の母親パティは静脈点滴を開始しました。
　翌朝イングリッドはよくなったように見えましたが、フリーマンは衰弱して、滑走路を歩くこともできなくなっていました。何時にデイビッドが飛行から戻ってくるか誰も知らなかったので、ふたりの男がハンモックを長い柱につるして、滑走路近くの医療用建物までフリーマンを運びました。デイビッドは戻って来ましたが、遅くなりすぎたので、その夜ジョージタウンまで飛ぶことはできませんでした。地域の保健員フローレンシア・ペーターズは彼のために休む場所を用意し、ルシータはその夜彼と共に過ごしました。エロルはイングリッドや子供と家にとどまりました。
　イングリッドがまた吐き始めると、エロルは彼らを残して、あまり離れていないゲイツの家に必死に走って来ました。とても暗い夜に、懐中電灯も持たず、彼は小道をたどって来たのに、蛇を踏みつけることはありませんでした。
　ベッキーの母親は、エロルと一緒に家まで駆けつけました。イングリッドは注射のために寝返りをするとき、「とても具合が悪くて、がまんできそうにないわ」とあえぎあえぎ言いました。
　翌朝早く、デイビッドはジョージタウンに向けてフリーマンと共に出発しました。およそ1時間後に、ベッキーはイングリッドの様子を確かめました。どうして彼女はいつになくうとうとしているのだろうと思いながら、吐いていなかったので、ベッキーは彼女に錠剤を与えました。
　カイカンでのマラリヤはあらゆる症状が出ていたので、全員の血液を顕微鏡検査用の塗抹標本にするために、デイビッドは保健員を飛行機で連れてきていました。ルシカの小さな男の子が走って来たとき、ベッキーと彼女の母親は、家のそばのマンゴーの木の下でその保健員と立ち話をしていました。数秒後、彼らは泣き叫ぶ声を聞きました。ベッキーの心臓は恐怖で痛みました。サンダルを探す間

もなく、祈りながら彼女は裸足で走り出しました。彼女の母親がすぐ後ろについて来ました。玄関に群がっていた人々はベッキーを中に入れました。エロルはけたたましく叫びました。「彼女が死ぬ！彼女が死ぬ！ああ、イングリッド、どうか死なないでくれ！もしよくなってくれさえすれば、わしはお前と結婚する、イングリッド」

「彼女のヴァイタルサインと顔色はいいわ」とベッキーの母親がささやきました。ちょっと見たところ、ハンモックの中のイングリッドは意識がないようでした。腕をエロルの肩に回して、ベッキーは、「あなたがクリスチャンかどうか知らないけれど、イングリッドのために祈ってもいいですか？」と尋ねました。

「ええ、いいですとも」と彼はすぐに同意しました。祈りの間彼は静かにしていました。

ベッキーは家に駆け戻り、無線で緊急呼び出しをしました。「デイビッド、フリーマンを下ろしたらすぐに戻って来て。もうひとり重症の患者がいるの」。２時間後、彼女は彼が滑走路を地上移動してくる音を聞きました。

エロルともうひとりが再び柱にハンモックを吊り下げました。点滴の袋を持ちながら彼らは飛行機まで歩き、ベッキーはイングリッドの顔を日傘で陰にしました。デイビッドは乗客の座席を後ろにすっかり倒して、エロルをジャンプシートのシートベルトで固定しました。そして床に寝袋を敷きました。彼らはイングリッドの頭をエロルのひざに乗せて寝かせ、乗客用のシートベルトをしっかりと締めました。デイビッドは点滴の袋を天井の掛け金に結びつけました。

飛行機の周囲に小さな人垣ができ、神様の導きと癒しの力を祈り求めました。デイビッドが離陸すると、ベッキーは無線で、ひとりの友人に、飛行機を迎えて意識を失っている乗客を病院に連れて行ってくれるように伝えました。それから、彼女と娘はイングリッドの赤ん坊ふたりを家に連れて来て、いつも午前中学校で教えているルシータが家に帰ってきて、世話ができるようになるまであずかりました。

マラリヤで意識不明のイングリッド

家族は、飛行機が金曜日の夕方日没直前に戻って来る音を聞いて喜びました。安息日の礼拝のために集ったとき、ベッキーは祈りました。「神様、これらの愛する人たちに命と助けを与える小さな飛行機を、私たちはあなたにどれほど感謝できることでしょう。イエス様がなさったように、身体に問題のある人たちを助けながら、私たちには大きな喜びがあります。今度は神様、彼らが、彼らを愛するあなたの大きな愛を学べますように」

２日後、無線で、イングリッドはどうにかよくなったが、エロルはマラリヤから来る高熱があるという知らせが届きました。

その後の数週間、悪天使たちは、宣教師たちに次々と問題を起こす企てをして喜んでいるようでした。デイビッドとベッキーは幾人かの村人たちに、彼らの畑の収穫を手伝おうと申し出ました。ふたりがジャングルを通って村人たちについて行くときに、デイビッド

は鋭い伐採用のなたを振るいました。突然彼は自分の膝を打ち、ジーンズをざくっと切りました。その傷をふさぐのに５針縫いました。
　同じ日、デイビッドと一緒に副操縦士としてガイアナまで飛行機でやってきたアンドリュース大学の学生宣教師レイフは、川で子供たちと一緒に遊んでいました。彼は川に潜って頭を鋭い物にぶつけ、額に大きな裂き傷を負いました。
　その後間もなくして、木工をしていたテッドが、使っていたのみで木の節のところを打ちました。そののみがすべって、彼の左手の指２本を切りました。その指の１つはその前に見知らぬ何かに噛まれて腫れ始めており、炎症を起こしているようでした。通常の２倍に腫れたその指は、抗生物質軟膏にも水治療法にも反応しませんでした。３日目には腕まで赤い筋が広がっていました。彼のリンパ節は固い感じがしました。ひどく心配した彼の妻ベッツィは、チャコール湿布を貼り続けながら祈りました。それでもその指は悪化しました。４日目にその指から膿みが出始め、赤い筋は薄れました。３週間後その腫れは引きましたが、皮膚はまだ紫色に見えました。指が元通りになるまでにさらに数週間が過ぎました。先住民たちは、サソリ、ムカデ、あるいはクモが原因だと思いました。
　この連続事故の最後を飾ったのは、教会で行う金曜日の夕礼拝のために家を出た一団に起こりました。主なグループの後ろをいくらか離れて歩いていたレイフは、丘を登っていたとき、１枚の灰色の布切れに気づきました。（あれを取り除こう）と彼は考えました。（蛇のように見えるので誰かをおびえさすかもしれない。）彼はその布切れを拾い上げ、小道から数歩踏み出して放り投げました。その時に、草の中に潜んでいた毒蛇マムシを踏みつけ、サンダルだけを履いていた彼は、かかとを噛みつかれたのを感じました。
　レイフの叫び声を聞き、テッドは駆け戻り、すぐにその傷を吸い始めました。子供のひとりはチャコールと止血用の包帯を取りに家に走って行きました。グループの中の大人たちはレイフを起こして運び、家に連れ帰りました。
　神様が前もってなさったとしか思えないのですが、数日前テッドは友人が送ってきた、蛇に噛まれた場合のショック療法の用い方についてのインターネットニュース速報を読んでいました。彼はそれ

を家族に伝え、彼らは長いことそれについて話し合ったのでした。つい最近読んだそのことについて考えながら、テッドは電線をガソリン動力の草刈り機の点火装置につなげ、噛まれた箇所から始めて、時間が経つにつれ範囲を広げながら、少量の電気ショックを 15 分間隔でレイフに与え始めました。

ガイアナには蛇毒の血清がなかったので、彼らにできるのはチャコール療法だけでした。レイフはひどい痛みで苦しみましたが、チャコール湿布を当てるごとに楽になるのを感じました。痛みが戻ると、新しいチャコールに取り替えました。すると痛みはおさまりました。その夜何度も何度も、彼らはチャコール湿布を繰り返しました。

知らせはすぐにジャングルの人々の口づてで広がりました。まもなく教会員の半分が集まり、蛇に噛まれたときの手当ての仕方をじかに見ようと、レイフを取り囲みました。人々は、神様がレイフの命を助けてくださるように祈りました。その若者の手当てをしていたその夜、２時間以内に４匹の蛇が殺され、その家に運ばれて来ました。悪魔は、神の民を荒野でのイスラエルのように痛めつけようとしているようでした。しかし神様はこの世の敵よりも偉大です。

毒蛇に噛まれた学生宣教師の１人レイフの手当てをするテッド

安息日の朝、噛まれた足の痛みはほんのわずかになり、レイフはその足で歩きました。そんなことは聞いたことがありません。まむしに噛まれた犠牲者は生き残ったとしても、たいてい痛みが残り、その後数ヶ月は腫れ上がっています。レイフの足は腫れもしませんでした。神様は救急手当てを施す人々にご自分のエネルギー、力、知恵を送ってくださいました。毒蛇に噛まれたときのこの自然療法は、彼らが見た中でも最も驚くべき回復をもたらしました。

けれども、サタンの嫌がらせはそれで終わりませんでした。１匹のずるく老練なハンターがカイカンの犬たちをこっそり襲うようになりました。短期間に、その殺し屋ジャガーは19匹の犬を殺しました。だれも安全だとは思えず、特に子供はひとり残らず不安を覚えました。きわめて大胆なそのジャガーはある家の台所に入って、その足で一撃をくわえ、動けなくなった飼い犬を引きずり出しました。学校に早く着いた学童たちは、そのジャガーが眠っていた学校の建物から走り出てくるのに気がつきました。明らかにそのジャガーは人間を恐れなくなっていました。子供たちは危険にさらされました。

村人たちは、ジャガーに半分食べられた犬を１匹見つけました。彼らは、銃を持っていた村の警官に助けを強く求めました。

「そのジャガーを捕まえてこよう」と彼は約束しました。「半分食べられた犬を持って行き、近くの木の後ろに置こう。村の男がだれかひとり一緒に来てほしい」

ふたりの男は１日中猟師の隠れ場にひそんでいました。夕方の６時ころ、村人たちは銃声を聞きました。それから数秒後にもう１つ。だれかが走って来ました。

「やつは死んだ。見に来い。でかいぞ」とその使者は告げ広めました。

子供たちは、蛇から身を守るために長靴と長ズボンを履き、懐中電灯をすばやく手にして、母親や父親と一緒に、その動物を見に駆け出しました。年取ってはいてもまだ美しいその雌ジャガーの歯は磨り減っており、自分より大きい動物を運び下ろすのができなくなっていました。村人たちはその皮をはいだ後、その肉を、ジャガーに襲われずに生き残った犬たちに与えました。幾晩か後、彼らはその連れ合いか子供と思われるもう１匹のジャガーの吼え声を聞きました。その夜以降は、もう１匹のジャガーの声を聞いた者や見た者はだれもいません。

数日してふたりの少年が、獲物を締め付けて殺す長さ約３メートル、太さが男の腿ほどある蛇を持ち込みました。それは誰かが近づくと身をふくらませ、不吉なシューという音を出しました。彼らは「ミスター･シュー」をベッキーの洗濯机に縛りつけました。彼女

は彼らがその巨大な生き物をどかすまで、洗濯をしようとしませんでした。デイビッドは、その蛇をジョージタウンの動物園に連れて行くため、飛行機の荷物室の袋に入れました。
　ベッキーは心配そうでした。「デイビッド、空を飛んでる最中に、それが袋から出てあなたを締め付け、窒息させるかもしれないのに、怖くないの？」デイビッドは彼女に近づいてしっかり抱きしめました。「ねえ君、ぼくはとてもうれしいよ、君がこのパイロットを気遣ってくれて。２重の袋に入れて、袋の上部を余分のロープで縛ったよ。守護天使に余計な挑戦をさせたくなかったからね」
　ジョージタウンでは、デイビッドはたいてい、病院の医長ファエ・ウィティング･ジェンセン医師とその夫スティーブの家に泊まりました。その家に着いたとき、だれもいなかったので、デイビッドはその２重袋に入れた蛇を張り出し玄関に残し、1時間ほど出かけました。戻ってきたデイビッドは、玄関で叫ぶ声と大騒ぎを聞きました。スティーブと病院の一般外科医のアルセニョ・ゴンザレスがその大きな蛇を押さえつけようとして、棒を持ち、ソファの上に立っているところでした。
　「おお、そこにいるのはミスター･シュー、動物園に連れて行く僕の蛇だ」とデイビッドは説明しました。彼は手を伸ばして、頭の後ろをつかみ、逃げ出さないように袋に入れました。そこで、なぜその蛇がここにいるのかスティーブに説明しました。「僕たちは、そんなに大きな蛇がどうやって階段を上り、玄関へ行く道を見つけることができたのかわからなかったよ」
　数日後ひとりの男が、カイカンの奥の方にあるゲイツ家のドアをノックしました。彼は、アラウの村から、ジャングルの中を夜７時間歩いてやって来ました。
　「どうか助けてください。８歳のダニエルが蛇に噛まれてひどく具合が悪いのです」
　デイビッドは、「そこの仮設滑走路が完成していて本当によかった」と飛行機に向かって走りながら叫びました。ジャングルの小道を歩くと数時間かかりますが、飛行機では数分しかかかりません。少年が横たわっているその家に駆け込み、小さなダニエルの足がどれほどひどく腫れ上がっているかを見て、デイビッドの心は沈みま

した。そして彼は、その歯茎がすでに出血し始めていることにも気づきました。小さなダニエルが生き残れるとは思えませんでした。

デイビッドは、祈りのために村人たちを集めました。彼は、命を助けてくださるに違いない神様に、小さな少年をささげました。彼は、彼を連れ、カマラングにある政府運営の診療所に向けて飛行しながら、祈り続けました。彼らは血清を持っていませんでしたが、ただちにジョージタウンにダニエルを運ぶ飛行機に乗れました。

神様は彼らの祈りに答えてくださいました。ダニエルは生き延びてアラウの家に戻りました。しかしその腫れはひくことなく、醜い傷が残りました。そこでデイビッドは、ベッキーの良き看護に託すために、 今度は彼をアラウからカイカンへ飛行機で搬送しました。彼女は繰り返し彼の足を水に浸し、抗菌性のクリームを塗り、包帯で巻きました。とうとう彼の足は普通に戻りました。

ベッキーは天の助けをよく賛美します。「イエス様ありがとうございます。あなたの癒しの力はこのジャングルの村々で明らかです。『主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし』（詩篇 103:3）というあなたの約束を、何度も何度も私たちは経験しております」

17 章

ヨルダン川が分かれる

２週間ずっと、デイビッドはガイアナの厚生省と密な接触を保ってきました。内陸部での彼の飛行機操業への一時的な認可は、1997 年 10 月 31 日に期限が切れるのです。彼は宗教奉仕の監督を訪問し、ガイアナ内陸部の医療全体の責任を負っている医師に話をしました。

その医師は彼に言いました、「村の人々のためにあなたがたがしている、たくさんの仕事のことを聞きました。厚生省への必要な書状を３日以内に手に入れることを約束します」

毎日彼の秘書に電話をかけ、厚生省を訪れて、彼がその約束を果たしていないことが明らかになりました。事実、彼はデイビッドとデイビッドの友人ウィンストン・ジェームズ両方の訪問を避けているようでした。ウィンストンはセブンスデー・アドベンチストのガイアナカンファレンスの教育部長で、デイビッドを援助してジョージタウンにおける飛行機を使った伝道プログラムに携わっていました。

「あの書状を入手するまで飛行機は飛べないんじゃないかな」とウィンストンは、がっかりした様子で言いました。

「ウィンストン、どうか DCA （民間航空の社長）に電話して、彼の要望に完全に私たちは応じたと言ってくれ。おそらく彼はわかってくれて飛行機を飛ばす認可をくれると思う」とデイビッドは言いました。「この２週間私たちの祈りが上っていったので、神様は動いてくださってきたことを僕は知っている。神様は、みわざを行う、力ある天使の一軍を任命なさったはずだ。神様は『主の使たちよ、そのみ言葉の声を聞いて、これを行う勇士…そのみこころを行うしもべたち』(詩篇 103：20,21)を遣わすと約束しておられる。こ

の飛行機を使った伝道プログラムは神様のものだ。僕は神様が解決してくださると信じる」

翌日、10 月 31 日、デイビッドは結果を知るためにウィンストンに電話をしました。彼の声には有頂天の響きがありました。「僕らのすべての努力が何も生み出さなかったことを、DCA は信じられなかった。彼は、飛行を続けるように、そしてこのことで煩わされないように励ましてくれた。彼は、さらに、『もし厚生省があなたがたを助けたくないのであれば、あなたを確かに支援するもっと上の人を私はたまたま知っている。総理大臣のジャネット・ジェイガン本人と会う日程を調整するといい。彼女はあなたがたの仕事を支援するだろう』と言ってくれた」

「DCA に、来週合衆国からの訪問者が７名着くと言ったかい？彼は、彼らがアドラを通じて、奥地で健康および教育のプロジェクトを展開する計画を知っているだろうか？デイビス記念病院を担当しているミシガンの医師が、合衆国へ戻る前に、村で４日間医療の仕事をしようという僕たちの提案を受け入れたことを話したかい？」

「ああ、僕はそういうことを全部彼に言った。彼は、認可が今日事務的に期限切れになっても、飛行を続けることを提案した。彼は、君がこれらの訪問者を村に連れて行くのを望んでいる。だが彼は、総理大臣との約束をすぐに取り付ける必要がある、そうすれば彼女は将来も支援を与え続けられると強調していた」

「ウィンストン、これはすごい」とデイビッドは言いました。「神様のご計画は僕らをはるかに超えている。総理大臣は来年の大統領に立候補している。間もなくガイアナの最高経営責任者になる人が、僕らのプログラムを支援するのを想像してみたまえ。神様と共に働くことは本当にすばらしいことだよ」

11 月４日午前３時には、７名の訪問者全員が安全に到着し、４時半には床に就いていました。数時間後、朝食を終え、デイビッドはパルイマの学校へ５人の訪問者を連れて行くためにチャーターした飛行機の支払いをするため、小切手を現金にしようと銀行に走りました。そこから彼はタクシーに乗ってカンファレンスオフィスに行き、ウィンストン・ジェームズに会いました。彼らは一緒に、その

訪問者たちが奥地へ旅行する許可をもらいに、アメリカ先住民業務省へ行くことにしたのでした。
事務所に足を踏み入れた彼は、ウィンストンが電話で民間航空の社長と話しているのをふと耳にしました。「飛行機は足止めされている」と言っているらしい言葉に、デイビッドははっとしました。厚生省からの約束の推薦状は当てになりませんでした。厚生省の推薦がなくては、DCA は認可を更新できません。伝道飛行機は足止めされました。「彼と話してもいいかい？」とデイビッドは頼みました。ウィンストンは電話を彼に渡しました。
「あなたが難しい立場にあることはわかります。ともあれ、過去1年の私たちの目的は、この山場に向けて築き上げられてきたことを説明してもいいでしょうか？これらの訪問者たちは、なされてきた働きを調べるため、また健康、教育、改善された生活スタイル、そして奥地で暮らす人々の利益のための、現実的な助けを提供するように招待されたのです。彼らはアドラ[アドベンチスト・開発援助機構]と呼ばれる、世界に広がる組織を代表しています。彼らは、新鮮な水をもたらす井戸掘りから、職業技術を教えることまで、援助を提供します。彼らが提案するどんなプロジェクトも、財源を求めてアドラ国際本部へ回されるでしょう。遠隔地へ入る唯一の方法である飛行機が足止めされた問題は、困っている人を助けるのを憎むサタンによって引き起こされたのではないでしょうか？」
DCA は同意しました。心の中で祈りながら、デイビッドは続けました。
「これらの訪問者を搬送するために、認可を7日間延長してくださいませんか？」
「いいえ、できません」。デイビッドは黙って祈り続けました。
「私たちの要請を輸送委員会に出してくださいませんか？」
「あなたがその委員会のことを言うとは不思議なことです。なぜなら彼らは月に1回だけ会合をするのですから。ちょうど今日の午後に会議が召集されたところです」
デイビッドの心臓は、希望でどきどきし始めました。「社長、これは偶然の一致ではないと思います。明らかに神様が支配しておら

れます。あなたが、この飛行機の使用がとても必要であることを述べるとき、彼らが承認するように私たちはずっと祈っております」
DCA は答えました、「祈り続けてください。例外を認めるようにそれらの人々を納得させるには、神様の力が要るでしょう」
電話を切って、デイビッドとウィンストンは、アドラの訪問者たちに、教区の理事長オフィスで会おうと言いました。「悪い知らせがあります」とデイビッドは言いました。「飛行機は足止めされています。けれども良い知らせがあり、それは私たちの神様、過去において明らかに導いてくださった神様は、今もそうすることができるということです。輪になってひざまずき、私たちが頼んだ 7 日よりもっと長い延長を彼らが認めてくれることを求めて祈りましょう」
神様が救出の強いみ手を使ってくださるようにと願う熱心な祈りが、天に上って行きました。全員の心に平安が満ちました。祈り終わったとき、「以前からの私たちの計画を進めましょう」とデイビッドは言いました。「チャーターした飛行機は今、奥地にみなさんを連れて行くために待機しています。私には、神様がすでに私たちの祈りに答えてくださったことがわかります。神様の恵みにより、明日お会いしましょう」
彼らが去った後、デイビッドとウィンストンは総理大臣のオフィスに行き、できるだけ早く会見する約束の打ち合わせを始めました。次に彼らはアメリカ先住民業務省を訪問しました。
「奥地の村長たちは、あなたがたの働きについて好意的な報告をくれました。私は厚生省と DCA 双方に、健康および教育に関するあなたがたのプロジェクトを、われわれが承認するという認可状を書く予定です。私は喜んで、合衆国からの訪問者の方々に旅行許可を出します」
ウィンストンとデイビッドは大臣に感謝して、そこを去りました。午後 3 時 45 分、彼らは、DCA に電話をかけました。彼はちょうど理事会からオフィスに戻って来たところで、「また賛成の波があなたがたの方向を変えましたよ」と言いました。「多くの議論の後、私たちはあなたがたの認可を 10 日延長することに賛成しました」

デイビッドの声は喜びに満ちて響きました。「本当にありがとうございます。明らかに神様が支配しておられます。神様は私たちの祈りに答えるためにあなたをお用いになりました」

翌朝離陸したとき、デイビッドとウィンストンは声を合わせて、「すべての祝福がそこから流れ出る神に感謝せよ」と歌いました。

「神様の豊かな恵みのゆえに、私たちは何度となく祝福されて来ました」とウィンストンは叫びました。

神様は、その訪問者たちがアメリカ先住民の必要を理解するように、その小さな飛行機を用いられました。幾つかの孤立した村々は利益を被りました。アラウは小学校を必要としました。アドラはその学校が完成するのを援助し、手伝いました。アドラはまた、パルイマにあるデイビスインディアン実業学校に、いくらかの資材を提供し、学校のためにボランティアで働いている村人たちのための食品の供給を手配しました。長年にわたる、健康管理と教育を結びつけたクリスチャンの親切が、以前にはアドベンチストに対し非友好的だった村々において親しい友情を育ててきました。

10 日間という飛行許可の終わりが近づいた頃、デイビッドは、カイカンの北 25 マイルのところにあるガイアナ防衛部隊軍事基地から、たくさんの無線コールを受けました。19 人の兵士がマラリヤで苦しんでいました。ひとりひとりの兵士が必要とする適切な薬を決めるために、デイビッドは顕微鏡分析用の血液サンプルをカマラングへ持って行きました。デイビッドは他の村々の病人のことも気の毒に思い、余分に 4 回飛行をし、重症患者の命を救いました。疲れたけれども祝福されて、デイビッドはその月 100 時間近い飛行をしました。

乾季の間はいつも、飲料水を見つけるのが困難でした。デイビッドが輸送したひとりの患者は、汚染された水源からの水で腸チフスにやられました。デイビッドは、そのうちに井戸からきれいで純粋な飲み水を供給できることになる、アドラのプロジェクトのことを神様に感謝しました。

彼は、自分たちのプログラムを通して生じるもうひとつの祝福、病気の予防のことを考えました。このチャレンジに満ちた仕事を実現させるため、彼らは、村人たちをひきつける現代機器、すなわち

ビデオプロジェクター、ビデオカセットレコーダー、小さな発電機、そして大きなスクリーンを用いようとしていました。健康教育に関するビデオ、英語にアメリカ先住民によるアカワヨまたはアレクナ方言への通訳がつけば、村全体をひきつけることでしょう。

デイビッドは、アドラの訪問者をジョージタウンに連れ帰る飛行を終えた後、ベッキーと共に、未知のことを取り扱われる神様の能力をじっくり考えました。1年前、彼らは信仰によって、自分自身の資金は何も無く、不確かな未来に足を踏み入れました。彼らがまったく神様に頼ったときに何が起こったでしょうか？住宅、家族のためのバランスの取れた食事、辺境の地を飛ぶ小さな飛行機、認可の取得と資金、孤立した村々の新しい滑走路、請求書の支払いのために資金が奇跡的に倍増されたこと、そして寄宿制実業学校、これらがみな与えられました。その上になお彼らは、合衆国にいる娘たちが優れた寄宿学校で全額奨学金を受け取ったことを、ちょうど知ったところでした。

神様は神様の子供たちの必要を満たしてくださるということを信頼できますか？もちろん！

＊＊＊＊＊＊

もうすぐ10日間の飛行許可が切れます。

「ベッキー、座って話そう」。腕を彼女に回して、デイビッドは告げました。「僕は行かなくちゃならない、ねえ君。着陸した飛行機はジョージタウン空港に停めておかなければならない。僕は地上に駐機している間に飛行機の整備点検作業のスケジュールを立てる。僕は、災害への備えについての1週間のセミナーで、アドラガイアナのボランティアデレクターとして参加することを頼まれているんだ」

「どこで、だれのために？」と彼女は尋ねました。

「アンティグア島で。彼らはカリブ諸島、西インド諸島、そしてフランス領アンチル列島連合のアドラ指導者たちを招いている。僕はそんなに長く君をひとりにして、カルロスやクリスと残して行きたくない。必ず無線で連絡を取り合うようにしよう」

彼はその期間、ベッキーと毎日２回無線連絡をとるために、太陽電池とポータブル電池を使いました。ガイアナのジャングルのはるか奥地で、ベッキーは、進行したマラリヤで苦しんでいる村の重症の子供たち数人の面倒を見なくてはなりませんでした。彼女は、マラリヤ治療薬が底をついてきたことに気がつきました。

次にデイビッドが彼女と連絡を取ったとき、彼女は言いました。「あなたが必要よ、デイビッド。家族の半分が遠く離れていて、男の子たちと私はここでとてもさびしく感じているの。患者たちの多くは、看護師だけでなく医者を必要としているわ。イエス様が私たちと共にここにいてくださるのがありがたいわ」

ガイアナに戻るとすぐデイビッドは、民間航空の社長に連絡しました。「残念ですが、大臣からの伝言は、追って通知があるまで飛行機は飛べない、そしてそれには長い時間がかかるだろうということです」

無性にベッキーと会いたくて、デイビッドとウィンストンは徹夜で祈り続けました。「僕らにはここに力強い約束がある。聞いてくれ、ウィンストン。『われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれはこのように攻めて来る大軍に当たる力がなく、またいかになすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです。…ユダの人々、エルサレムの住民、およびヨシャパテ王よ、聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられる、「この大軍のために恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである」』」（歴代誌下 20：12,15）。

それでも、民間航空へのデイビッドの日参の結果はいつも、「まだ何も言ってきません」という無関心な答でした。

ベッキーとの無線連絡が彼の心配を増しました。彼女は言いました、「昨日の午後アラウ村の村長が、私たちの仲間の現地人宣教師も含む村人何人かのためにマラリヤ薬を求めて、徒歩で 7 時間かけてカイカンまで来たわ。私にできることといえば、祈ることと、これらの愛する人たちに薬が十分に都合できないのがつらくて、涙を流すことだけだったわ。あなたが彼らの所に飛んで行けさえしたらねえ」

デイビッドは次のすばらしい約束を、自分のものとして主張しました。「天の父なる神は、われわれのために無数の道を備えてくださるが、われわれはそのことを何も知らないのである。神に奉仕しそのみ栄えをあらわすことを最高のものとするというただ１つの原則を受け入れる者は、困った問題がなくなり、足元にはきりした道が開かれることに気がつくのである」（各時代の希望中巻 50 ページ）。

翌日デイビッドとウィンストンは、飛行機の整備をするために空港へ車を走らせたながら、導きを求めて祈りました。「主よ、どうか、あなたが私たちがするように望まれることを示してください」

突然、神様の答がデイビッドの脳中にはっきりと浮かびました。

「展開に備えよ！ウィンストン、この遅れはきっと、もっと積極的に前進するようにとの神様の呼びかけに違いないという印象を僕は受けた。神様は僕らに、何年間もバイブルワーカーや医療を要望してきていた地方に、新たな働きを拡大するようにと言っておられるのだ」

「だが、デイビッド、それはもっと大きな飛行機を持ち、ガイアナ奥地へ制限無しで入って行けるということだ。僕らに必要な融通性や自由が増すと共に、運営費は急上昇するということはわかっているはずだ。それに誰が第２機を操縦するんだい？」

「問題はわかっている。それがこの計画全体の美だよ。プログラムの土台作りは、いつも完全に神様にかかっている。神様のおっしゃるがままに動くこと、それが自動的に可能な資源をますます増やすことになるんだ。わくわくしないかい！信仰による前進はすべてヨルダン川の経験に変わり、戦いは本当に主のものであって、われわれのものではないという確信を築くのだよ」

主の御霊に圧倒されて、デイビッドは車を止めました。ふたりは頭を垂れました。喜びの涙を流しながら、彼らは祈りました。「神様、私たちの計画をあなたのみ手に託します。どうか関係者共々私たちに成功をお与えください。私たちが正しい方向に進んでいるというしるしとして、資金を増し加えてください」

ウィンストンが言い足しました。「尊き父よ、私たちは足を水に触れようとしてヨルダン川の岸に立っているかのように感じます」

翌朝早く、デイビッドはエアタクシー（不定期短距離用の小型飛行機）会社へ電話をし、彼の計画を説明しました。「不可能です！保険会社は決して許可しないでしょう」
「どうか総支配人と話をさせてください」とデイビッドは頼みました。
「今はだめですが、伝言しておきましょう」
その午後、エアタクシー会社の人から電話がありました。「あなたの提案を詳細に説明する文書をください。それと、あなたのパイロット履歴書を同封してください」。デイビッドは敏速に行動しました。空港で彼はエアタクシーの主任パイロットと会いました。彼はうなずきながら、「私はあなたの考えが気に入りました」と言いいました。
次の日デイビッドは伝言を受け取りました。「すぐおいでになって、管理責任者と総支配人に話をしてください」
デイビッドがオフィスに入ると、その人たちは興味深げに彼に挨拶しました。「私たちはあなたの医療プログラムについて知っていますが、カリビア諸島および海外でのあなたの過去の飛行経験について幾つか質問があります。あなたの要望には、会社のパイロットとして私たちの保険に含まれること、また私たちのセスナ機 206 を１機使用することがあります。これが私たちには興味深く、その提案に魅力を感じます」
デイビッドの心臓は聞こえるくらい早く鼓動を始めました。「私たちは特に、あなたのガイアナ民間航空パイロット免許に、パイパー〔米国の軽飛行機メーカー〕セネカタイプも操縦できるとあることに興味があります。ご存知のように、私たちの会社にはセネカタイプが操縦できる有資格パイロットは少ししかいないので、あまり飛ばさないセネカが１機あるのです。もしあなたがセネカによる臨時の国際便を飛ばして、私たちを手伝ってくれるなら、そのセネカ 206 であなたをお助けしましょう。私たちの主任パイロットと一緒にその 206 でカイカンにテスト飛行する費用は、あなたが持ってください。その後、セネカの機上であなたの技量を確かめましょう」
デイビッドはその提案をかいつまんで口にしながら、気持ちの高ぶるのを抑えきれませんでした。「地元飛行機を２機持った上に、

何の制限もなく飛べて、私たちの医療伝道プログラムの融通性が増すのは、確かですか？エアタクシー会社の臨時パイロットに私がなるのですか？」

「はい、あなたは国内どこにでも飛行が許されるでしょう。しかし、承認を得るために、まずあなたの計画を主任パイロットと調整せねばなりません」

「本当にありがとうございます。これで、私がもっと大きな訪問者グループを奥地に連れて行くのが、より簡単に、そしてより安価にできます」

そのオフィスを去るとき、デイビッドはまるで空中を歩いているように感じました。「神様、ヨルダン川は分かれ始めました！」

それから彼の現状が突きつけられました。合衆国からの彼の１月分の資金はすでに来ており、彼はそれをパルイマの学校建築に充ててありました。彼にはその 206 機借用の支払いをする分は残っていませんでした。（神様、今度はどうすればよいのですか？）と彼は考えました。詩篇 46：10 にある約束が彼の脳中にひらめきました。「静まって、わたしこそ神であることを知れ。わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、全地にあがめられる」。

（私は従います、神様。お金の欠乏について何も言うことはありません。けれども今の必要に合う限界以上の立場に自分を置いて、資金を約束するのは少し怖いです。 それでもやはり、あなたのご命令は成し遂げられますから、私は事を進めて、日曜日の飛行スケジュールを組みましょう。）

彼は、奥地へ４人の伝道チームメンバー、長女のケイティ、学生宣教師のジュリー、パルイマに教えに来ているフランス人夫婦を飛行機で連れて行くのにも利用できると考えました。その週の収支バランスをとるには、どうしても新しい資金が必要でした。というのも、３週間たたないと銀行への入金は何も期待できなかったからです。

私の問題を、宇宙の偉大な神様、あなたにお話させてくださりありがとうございます。今私は一切をあなたのみ手にあずけます。

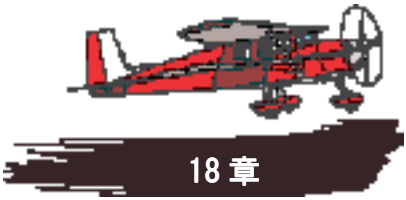
途中、彼は電子メールをチェックするために止まりました。まず父親からのものを読みました。

愛する息子よ、
昨晩、イリノイ州マリオンの私たちの教会会計ヘレン・フィッシャーが、休暇に出かけるので、お前のガイアナ口座に少し早めに、入手可能な資金を送る手配をしたと言ってきた。それらはお前の使用のために入金された。

うやうやしい思いでデイビッドはひざまずきました。「あなたはなんとすばらしい神様でしょう！あなたは私が飛行機の支払いスケジュールを立ててから１時間以内に、ほとんど丸々１ヶ月分の資金を手にすることができるように整えてくださいました。ヨルダン川はもう一度完璧に分かれました。『全地よ、神にむかって喜び呼ばわれ。そのみ名の栄光を歌え。栄えあるさんびをささげよ』(詩篇66：1,2)」

デイビッドは一息つきました。

「けれども神様、私があなたを疲れさせることはないとわかっています。私たちの小さな医療飛行機はまだ地上にあります。あなたは、ジャングルの滑走路上に私たちの小さな飛行機がなくては、私たちが計画した伝道の働きは、ほとんど不可能になることをよくご存知でしょう。命が危ぶまれる多くの怪我人や病人が、搬送を必要としています。私は、あの飛行機無しではこの奥地にいられません。私たちの目はあなたを見ております。あなたはそれをしてくださるはずです」



18 章

驚きと病

新しい厚生大臣との面会の約束がとれました。前の大臣は拒否しましたが、彼は承認するでしょうか？彼に会いに行くとき、デイビッドとウィンストンは神様の愛顧を祈り求めました。まず彼らは地域開発大臣に会いに立ち寄りました。ウィンストンは、すぐに彼がわかりました。彼らは幼なじみでした。その親しみある態度は彼らに勇気を与えました。

「私は奥地の発展にとても関心があります。あなたたちのプロジェクトを私は全面的に支援します。安心してください」

新しい厚生大臣はセブンスデー・アドベンチストとして育ったけれども、何年も前に宗教に背を向けたとのうわさが広がっていました。彼らはもう一回祈って、彼のオフィスに入りました。

彼は腕組みをして座っていました。そのよそよそしい声の調子は、迷惑だということを示していました。「昨日の閣議で君たちのプログラムを援助することに賛成したが、私には何のことだかわからない」

デイビッドはほほ笑んで言いました、「喜んでお知らせしましょう。私たちはあなたの職務との提携を発展させるために、奥地で働いております。ワクチン接種その他の緊急事態の機会が生じたときにはいつでも、私たちを呼んでいただきたいのです。私たちの目標は、あなたが、私たちを貴重な人材、ガイアナ奥地の住民の健康向上を助ける手段として見てくださることです」

大臣はほほ笑み、緊張がとけたようでした。「君たちはわが国の無線通信をよく使うのかね？」と彼は尋ねました。

「いいえ、私たちは正規の認可を受けておりません」。デイビッドは、彼がメモ帳に何か走り書きするのを見つめました。
「私は君たちの基地と飛行機が、地域の病院や省と直接通信することを許す認可書を送ろう。すでに民間航空部局を監督している大臣に私の推薦の言葉を与えてある。他に必要な助けがほしければ知らせなさい」
著しい態度の変化に感激して、デイビッドは、「あなたのご指導に神様の祝福があるように、ひと言お祈りしてよろしいでしょうか？」と尋ねました。大臣は同意しました。
数時間後に民間航空部局の代表者が電話をかけてきました。「あなたがたの認可は更新されました。できるだけ早く認可証を取りに来てください。あなたがたの飛行機は外国登録をされているので、１年に最高３ヶ月までという期限で操業をしなくてはなりません」
デイビッドは喜びながら、安息日を過ごすために、カイカンの自分たちの滑走路に向けて飛行しました。彼は、家族と神様の指導の祝福を分かち合ってから、「今度は地方登録した４座席常設の航空機を神様に祈り、信頼し、そして待たなくてはいけないね」と言いました。
「神様はもうすでに答えてくださっていると思うわ」と、ベッキーは聖書を開いて言いました。「どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえてくださることができるかたに、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように。(エペソ 3:20，21)」
村人たちの間に、飛行機が再び飛んでいるという知らせが広がりました。遠隔地の村々からの緊急飛行を求めるたくさんの呼び出しが急速に増えました。ブラジルとの国境近くにあるフィリッピの村には、過去にアドベンチスト教会がありました。それは荒廃し、村人の多くは対立感情を持つ２つの教団に属していました。干ばつで河川輸送ができないために、助けを求めて病人を運んで来るのに４日以上かかりました。デイビッドが重症の村人３人を病院に飛行機で運んだとき、以前には対立していた人々や村長から心温まる応答を受けました。

彼は、「もし私がビデオ機器を運んできたら、健康とキリストの生涯についてのビデオを、あなたがたはみんなに見せますか？」と彼らに尋ねました。

「はい、どうぞやってください」。彼の背後でたくさんの声が、「はい、はい」と叫びました。

デイビッドがビデオを見せると、ひとりの地区牧師が訪問してきました。隔ての壁が崩れ始めました。彼らはネット'95 と呼ばれる５週間の伝道キャンペーンのビデオを見せることに賛成しました。その結果、フィリッピの人々は以前より大きい教会を再建しました。

もう２つの村、すでに幾人かのアドベンチストのいたパルイマとワラマドングが、ネット'95 のシリーズを見たいと頼んできました。パルイマでは全部で 65 名の人々がイエスを受け入れ、バプテスマを受けたいと申し出、それに続きワラマドングでも大勢の人々がバプテスマを申し出ました。フィリッピとチノウェングには、アドベンチストはごくわずかしかいませんでした。デイビッドは、医療ケアをしながらその地区を飛び回るときには、発電機のための燃料と、それらの村々で伝道の働きをしているサポートチームのための食物を運びました。

アラウはわずか５年前に村になりました。そこの教会員は、小学校を作ってほしいと頼みました。ガイアナ人教師ベバリー･ゴデッティ、デイビッドの娘ケイティ、彼女の親友で学生宣教師ジュリー・クリストマンの３名のボランティアが教師となり、授業が始まりました。しかし年長の村人が、「どうか、私たちを学校に行かせてください。私たちは読めるようになりたいと、生涯ずっと思ってきました。私たちも来ていいですか？」と熱心に頼みました。

「お気の毒ですが、部屋がありませんし、そんなに大勢を教える教師がいません」とデイビッドは言いました。

彼らを断ったことで心が乱れ、デイビッドとベッキーは良い考えを求めて祈りました。クリスチャンは昼間のクラスに出て、バイブルワーカーになれますが、クリスチャンでない人たちにはどうしたらよいでしょうか？彼らにも助けが必要でした。

「もしかしたら太陽電池で動く小さな地域テレビ局を立ち上げることができるかもしれない。電力 100 ワットでおよそ 15 マイルは

電波が届く。その範囲にはマザルニ川上流地区にある８つの村のうち３つか４つが含まれる。全部の村が資金を出し合えば、太陽パネル１つ、バッテリー、テレビ１台が買える。そうすればだれでも来て見ることができる」

「いいわね。私たちのクリスチャン局以外に、見るチャンネルが何もなければ、私たちは悪魔の手段を逆手にとって彼を打ち負かせるわ」とベッキーは笑って言いました。「村の人たちは自然、健康、そして宗教的なビデオプログラムを、方言と英語の両方で楽しむでしょうね。でも運営の認可をどこで取れるかしら？」

「政府、新しい総理大臣、サムエル・ヒンズ自身からだよ。彼のオフィスに立ち寄って、彼の秘書から詳しいことを聞いてこなければならないね」

その秘書はデイビッドに、「あなたは、全部の村の指導者たち及び村民の署名を集めなければなりません。彼らがあなたの申し出を望まなければ、あなたの要望は検討されないでしょう」と教えてくれました。

１ヵ月後デイビッドは、カイカン周辺の区域にある８つの村の村長あるいは首長全員、そして宗教指導者全員との集会の手はずを整えました。彼はテレビ局で何をするつもりかを説明しました。彼らは注意深く聴きました。「もしみなさんがこれを望むなら、この書面に署名しなければなりません」

立ち上がった最初の人、英国国教会の司祭がペンをとって言いました。「私は、アドベンチストテレビをここにほしいと署名する最初の者になりたい」

それがきっかけとなり、他の聖職者たちが続きました。すぐに教師たちと村の首長たちが加わりました。そこにいた皆がその請願書に熱意をもって署名をしました。

デイビッドは何ページにもわたる署名を持って、総理大臣のオフィスに行きました。彼はそのような満場一致の承認を予期していませんでしたが、デイビッドは医療と教育の働きの影響が信頼をもたらし、態度の変化をもたらしたことを知っていました。署名した人々は１つの規定を加えました。「われわれは、このテレビ局を、

デイビッド･ゲイツあるいは彼が承認する者が運営の責任を持つという条件で認める」

福音を広めるこれらの祝福の真っ最中、サタンは人々にとって命取りの武器である蚊を向けて、彼の憎しみを示しました。またマラリヤが伝染し、カイカンだけではなく、周囲の多くの村々を襲いました。３週間に３回デイビッドの家族は熱、悪寒、頭痛、吐き気で寝たきりになりました。デイビッドはプラスモジウム原虫から回復しましたが、次にベッキーが、蚊帳の中にどうかして入り込んだ１匹の蚊から感染しました。彼がまたすぐに３日熱マラリヤ原虫にかかりました。薬を飲んで彼が回復し始めると、ベッキーがまた病気になりました。村の家族は全部このような形で苦しみました。ひとりがよくなるとすぐ、家族の他の者が病気になりました。なんとかしなければなりません。

マラリヤ対策の役人がふたり、カイカンで３週間過ごし、100 人以上の患者の手当てをしました。それにもかかわらず、家族相互の感染が続きました。デイビッドは緊急資金を求めてアドラと連絡をとりました。患者を複数の薬で手当てすることは難しかったので、高価だけれども１回で効果のあるメルホキンと呼ばれる薬を、彼らは選びました。それは１回の処方で複数のタイプのマラリヤを一掃します。アドラカナダとアドラオランダが資金を承認したので、村人全員が同時にこの薬を飲むことができました。さらなる予防措置として、ハンモック用の特製の蚊帳を詰めた船荷が２つ、厚生省から届きました。地元の人々が訓練を受け、材料が提供されたので、ハンモックスタイルの蚊帳を作ることができました。

アメリカ先住民業務省が、デイビッドに殺虫剤と植物油と共に、それを家に噴霧する機械を貸してくれました。油は噴霧後、壁に殺虫剤を確実に付着させておくためのものです。その殺虫剤を噴霧すると、ゴキブリ、虫、そして蚊は死にました。毎日人々は壁やテーブルに死んだ虫を見つけました。希望で満たされ、村人たちはこの三重の手段で深刻なマラリヤの脅威が絶えることを祈りました。

デイビッドはアラウ村に飛んで、ほとんどすべての住民がマラリヤにかかったことを発見しました。伝染病は終わらないのでしょうか？デイビス記念病院の医長フェイ・ウィティング･ジェンセン医

師はデイビッドと共にアラウに飛び、全住民の集団治療を個人的に監督しました。その結果は大成功でした。アラウはその後、他ではまだ伝染が続いていた間、マラリヤの症例がひとつも報告されない唯一の村になりました。

多くの病人たちに注がれた愛のこもった手当ては、多くの人に霊的成長という結果ももたらしました。デイビッドはほほ笑みました。「私たちはきっと、人の心に奇跡を起こす働きで神様を忙しくさせたに違いない。もうすぐ私たちの小さな飛行機の操業３ヶ月認可の期限が切れる。その頃、奥地で働くボランティアたちがもっと到着することになっている」。デイビッドは一息ついて天を見上げました。「神様、私たちはあなたを待ち望みます！あなたはきっとちょうど間に合うように、解決してくださることでしょう」

いつものように、神の子たちを喜ばすことを喜ばれる、頼りになる神様は期待に応えてくださいました。６月 11 日デイビッドは民間航空のオフィスから１本の電話を受けました。「あなたのセスナ機の飛行認可はもう３ヶ月更新されました」

デイビッドはその喜びをベッキーと分かち合い、それから彼が考えていた必要のことを話しました。「僕は、神様がふさわしい人々に、航空機整備士としてまた専門のパイロットとしてボランティアとなるように印象づけてくださるときに、僕の仕事を助けてくれるように願っている」

ベッキーは確信をもって、「神様はご自分の時にかなって与えてくださるわ」と彼に言いました。彼女はいつでも信仰をもって話します。「神様は私たちの信仰を完全なものにするために、私たちを天の待合室に留めおかれるのではないかしら？でも今、デイビスインディアン実業学校に負債がないのがうれしいわ。それに来週、宗教センターと図書館の鍬入れ式をするのよ。私たちの杯はあふれ出ているわね」

「本当にそうだね」とデイビッドは言いました。「神様がガイアナのためのご計画の新しい展望を開かれるたび、僕たちはいっそうのチャレンジに日々立ち向かう。神様が次に何をなさるのか楽しみだよ」

19 章

神様により前進

ジョージタウンから戻り、デイビッドは滑走路から自宅へと急ぎました。坂道を走り下り、彼はドアから、「ベッキー、どこにいるの？神様はまた感動的なことをしておられるよ！」と呼びかけました。

階段からおりてきた彼女は、彼を抱きしめキスをしました。「あなた、倒れる前に座ってちょうだい、私聞いているから」と彼女は言いました。

「民間航空がカマラングに所有している滑走路の隣にある大きな航空標識の塔について話したのを覚えているかい？あのね、その塔の空いてる場所を、テレビ放送のアンテナを設置するために貸してくれるそうだ。神様は僕に、カマラングのためのテレビ放送局の認可を取ることを総理大臣と話し合うため、申請書を送り、面会の約束を求めるように強く印象づけてくださった」

「それで、どうなったの？」

「総理大臣は 45 分遅れて着いた。警備員が僕らを金属探査機で調べて武器を持っていないか検査した。やっと彼らは、ウィンストンと僕を護衛して、総理大臣のオフィスへ連れて行ったよ。机の脇に立って、彼は何かの書類をいじくりながら怒っているようだった。顔を上げずに彼は声を上げ、『君たちはどうしてここにいるのかね？』と言った。彼は三度繰り返して問いただし、その都度声が大きくなった。僕らは彼が一息つくまで黙っていたよ」

「『あなたにお会いする特権をいただき、大変感謝しております』と僕は思い切って言った」

「彼は、『おしゃべりはやめてくれ。君たちは私に何を望むのかね』と言った」
「僕はウィンストンに、『僕が祈っている間に君が話して』とささやいた。ついに総理大臣は顔を上げ、椅子を指さし、『座りたまえ』と命じた」
「いきなり彼は僕らの間を歩いて、警備員に『今すぐ、常設秘書をよこせ』とどなった。その短い瞬間に僕は、『神様、私たちは困っています。どうかご介入ください。ガブリエルを、あなたの力ある聖霊を、彼の無情な態度を変えるのに必要なものを何でもお送りください』と祈った」
「まあ、なんていう迎え方でしょう！」とベッキーは意見を述べました。
「常設秘書は、入ってくるとウィンストンを見て、『あなたの国籍はどこですか』と尋ねた。『私はガイアナ人です』と彼は答えた。彼は、『そしてあなたは？』と言って、僕を見た。僕は『合衆国です』と言った」
「『現在のあなたの在留資格は何ですか？』彼の命令的な口調は総理大臣と同じだった」
「『私は、1年の就業許可を得まして、２年目を更新し、２年近くガイアナにおります』と僕は言った。それから僕は総理大臣の方を向いて、『閣下、あなたはご存知だと思いますが、私はアラウで家が燃え落ち、賃借人たちが何もかも失ったときに、その家の建て替えのことであなたの奥様とご一緒に働いたことがあります』と言った」
「神様の御霊と天使たちが、その部屋に平和を持ち込むために一所懸命働いていたに違いないわ」とベッキーは言葉を差し挟みました。
「その通りだよ、ベッキー。まるでだれかが明かりのスイッチを入れたみたいだった。彼は座って、頭をかかえて、少なくとも1分は動かなかった。彼は頭を上げて、『今日君たちが来てくれてとてもうれしい。私は君たちの働きについてよく聞いている。君たちのために何ができるだろうか？』と言った。

彼は別人みたいだった。イエス様が僕らの祈りに答えてくださったんだ。その時から僕ら４人はガイアナについて、その奥地の必要、またその地域のためにどんなタイプのテレビ放送局がうまくいくかについて、あれこれ心置きなく話をした。彼らはいくらかの技術的な懸念に触れたが、ガイアナで働いた僕らの経験を話したら興味を示した。まるで古くからの友だち４人が、親しいおしゃべりをしに集まっているみたいに感じたよ」

「態度が変えられたのね、なんという奇跡かしら！神様のご臨在だけが悪天使を追い払うことができるんだわ。総理大臣はたくさんお話しなさったの？」とベッキーが尋ねました。

「ああ、僕らは彼の冗談や、ワラマドング、そしてパルイマへとカマラング川をカヌーでさかのぼった逸話を聞いて笑った。僕は、僕らが政府の人たちとどれほど緊密に働いてきたかを強調し、僕らの医療飛行機伝道はすべて必要ある人々へのサービスであって、彼らがどの教会に所属しているかは関係ないということを保証した。だれもが等しく医療ケアにあずかれる、とね。僕らは少なくとも45分は話していたよ」

「彼らはこの新しいテレビ局を支持するかしら？」とベッキーが尋ねました。

「ああ、彼らはふたりとも、認可と支持が得られるだろうとの確信を表していた。彼は、翌日内閣と会議をすると約束した。そして、『明日君たちは答をもらうだろう』と言ったよ」

デイビッドは続けて、「僕らは帰る前に、彼らに祈ってもかまいませんかと聞いた。彼らは同意したよ。僕は神様に、重要な責務にある彼らを祝福し、彼らをご臨在と保護で囲んでくださるように、またその仕事における知恵をお与えくださるように祈った。彼らは感謝しているようだった」

「デイビッド、その経験は私に、時はとても短いと告げているわ。神様は、ガイアナの他の地域にもっと速く入って行くのを望んでおられると思うの」

「そのとおりだ。僕らが周波数管理機構（米国連邦通信委員会に相当するもの）と連絡をとったとき、その人は言ったんだ、『総理大臣がちょうど電話をしたところです。私たちはあなたがたが要望

したテレビ局の認可を与えます』とね。彼は、僕らがブラジル国境近くの町レセムに２つ目のテレビ局を建てるつもりがあるかと尋ねた。ガイアナにおける唯一の宗教的テレビ局、この放送伝道は幾千という家庭に届くことだろう」

「本当に神様は、祈りに答えてくださるのね」と天を見上げて、ベッキーは言いました。「君にもっと話すことがある、ベッキー。知っているように、神様は僕らの友人、電気技師のダン・ピークに、テレビ局設置の仕事を僕と一緒にボランティアでするようにと強く印象づけられた。ネット'98 シリーズのためにあつらえたものから２つの衛星放送アンテナを得ようとしているうちに、彼は技術的なことでいくつかはっきりさせる必要があって、周波数管理機構に立ち寄ったんだ。そこで彼は、彼らが内閣から、局の認可を僕らが取る件に手をつけるようにすでに指示を受けた事を知った」

「驚きだわ！ガイアナで事がそんなに早くうまく運ぶのはめったにないことだもの」

「聞いてくれ。彼らは、僕らがチャンネル７を使えると言ったんだ。僕らは民間放送の周波帯に近いのでそのチャンネルが欲しかった。ずっと安価だしね。それに第七日安息日の七を意味することも気に入ったよ」

「10 月に始まるネット'98 について話してくれる？ジョージタウンのどこに２つのサテライトアンテナをつけるの？」

「ダンは、僕がその据え付けをするのを助けるためにも来てくれるんだ。僕らは１つをウィンストンが出席するスミルナ教会に、もう１つをリンデンの教会に置くつもりだ。両方の教会ともネット'98 のダウンリンクサイト（衛星からの通信を受ける場所）になる準備をしている。スミルナは予想される訪問者たちのために、教会で大きなテントを用意した。彼らは戸毎訪問をして、興味を持ったたくさんの人たちを見つけた。神様の御霊が、ネット 98 の伝道を通じて、この地域で大きなことをなさるにちがいない」

その時からデイビッドは、カイカン周辺の８つの村へ医療や開発援助の必需品を提供しながら、多忙な飛行スケジュールを始めました。フィリッピ村から、デイビッドの居ない間にその村の８人がマ

ラリヤで亡くなくなったという悲しい知らせが届きました。彼は、パルイマの第２学校を建てるための材木を切るのに使う、４台のチェーンソー用の備蓄燃料とオイルを新たに輸送しました。彼はまた、カマラングテレビ局の建物の建築が始まり次第使うために、きちんと重ねて置いてある資材の中に材木があるのも見ました。

しかしデイビッドは深刻な問題に直面しました。木を切り出す人の労賃を支払うのに、７月分のお金しかないことがわかったのです。８月分と９月分の一部の労賃支払いに間に合うものをどこから得ようか？きっと、以前に度々介入してくださった神様が、十分な資金を与えてくださるだろう。彼は祈り、待ちました。しかし何も起こりませんでした。

20 章

犠牲への召命

デイビッドは、是非とも合衆国へ行ってくる必要がありました。出発日が近づいてきます。献金は、収支を合わせるのに必要な額にはほど遠いものでした。ペンを取り、彼は負債のリストを書きました。８月と９月の労賃の支払いに 1500 ドル必要でした。飛行機燃料に 1,000 ドル、カマラングのテレビ局の屋根材と建築資材に 1,500 ドル、そして第２のネット'98 サテライトアンテナと受信機を設置するために 1,000 ドル。

もう一度彼は天の財務官に助けを求めました。「神様、私はまた困っています。現金は 2,000 ドルしかなく、少なくともあと 2,000 ドル必要です。1,000 ドル加わるだけでも、当面の労賃と資材の問題は解決するでしょう。そうすれば、町で燃料と衛星放送受信機の支払いをするまで、あと２、３日はもちます。今は木曜日の午前中です。金曜日は銀行取引最後の日で、私が合衆国に出発する予定は日曜日の夜です。私はあなたのお助けがどうしても必要です。窮地はあなたの大いなる機会です」

神様は以前、書類かばんに現金を入れることで緊急資金を与えてくださったことがありました。デイビッドは確信を抱き、2,000 ドルを持ってジャングルの奥深く 200 マイルのところにあるカイカンへと飛びました。そこには銀行はなく、現金で数千ドルを得る可能性はありません。彼は、神様がもう一度、眠っている間に書類かばんにあと 2,000 ドルを入れることで、必要資金を与えてくださるだろうということをまったく疑いませんでした。

カイカン着陸後すぐ、ひとりの鉱山労働者が彼に近づいてきました。

「どうか私をジョージタウンに連れて行ってください。妻がひどい病気なので、私は一緒にいてやらねばなりません」
「お気の毒ですが、私は日曜日までジョージタウンに飛ぶ計画はありません。でも、明朝あなたをカマラングまでお連れしましょう。そこであなたは民間航空の便を見つけることができますよ」
彼はその夜、必要な資金について何の心配もせずにぐっすり眠りました。翌朝、彼は高揚した気分で礼拝を始め、エリヤとやもめの物語に再び感動しました。心の中で彼は、必要が満たされたこと、夜の間に神様が書類かばんの中に入れておいてくださったと「わかっている」増えた 2,000 ドルのことで主を賛美しました。
感謝と賛美の祈りを終え、証拠を数える時が来ました。神様が奇跡的に 200 ドルを 1,050 ドルと入れ換えてくださった前年のことを思い出し、デイビッドは昨日の 2,000 ドルが今度は 4,000 ドルになっていることを確信し、期待しました。彼は数え始めました。「100 ドル、200 ドル、300 ドル、400 ドル、1,000 ドル、1,500 ドル、2,000 ドル」。彼はもう一度数えましたが、2,000 ドルしかありません。
「どうしてあなたは私にこんなことがおできになるのですか、神様？」と彼は尋ねました。「あなたは、私が、今月最低限度の出費をまかなうのに必要な額の半分しか持っていないことをご存知です。私はどうやって 2,000 ドルを 4,000 ドルに増やしたらいいのでしょうか？」
気が動転し、がっかりして、デイビッドは、神様に失望させられたように感じました。。頭に血が上り、「天の父なる神は、われわれのために無数の道を備えてくださるが、われわれはそのことを何も知らないのである」（各時代の希望中巻 50 ページ）との約束を忘れていました。
ちょうど 1 年前と同じように、デイビッドは静かにささやく小さなみ声を聞きました、（あなたが持っているものを使いなさい。）（それが問題なのです、私は持っていません！）と彼はいらいらして、ひそかに考えました。

毎日神様と会話をするのに慣れていた彼は、神様は祈りをお聞きになり返事をくださるだろうと、一息つきました。待つ間に、目が脇のベッドの上にあるノートパソコンに行きました。

（先週あなたのコンピューターを 2,000 ドルで買うという申し出を受けなかったか？）と、その声は彼の思いの中でしきりに言い続けました。

デイビッドはパルイマの学校の一番新しいボランティア教師パム･ニッケルが、ノートパソコン無しで到着したことを思い出しました。彼女は同じものを買ってきてくれないかと彼に頼みました。そこで、彼の出発日に彼のコンピューターは彼女のものになると決めました。彼は合衆国に着いたらすぐ自分用の新しいものを入手することにしました。パムは同意し、彼に 2,000 ドルの小切手を渡しました。

「けれども神様、あなたは、過去 15 年間私がノートパソコンを売り買いする時には、買い換えるだけのために注意深くお金を貯めてきたことをご存知です。私はコンピューターなしでは仕事ができません。電子メール、報告、デジタルイメージ、ウェブページの開発、経済の記録、何もかもに使っています。コンピューターなしでどうやって仕事ができますか？」とデイビッドは抗議しました。

再びデイビッドは、気に入らないその考えに心を留めました。（神様は私の考えに同意なさらないのだろうか？）自暴自棄になって、彼は大声で祈りました、「神様、私の祈りを聞いてください。私の仕事にとってコンピューターがどれほど重要か、あなたはご存知のはずです。労賃のために私のコンピューター用のお金を使うべきだなどと、あなたがおっしゃりたいはずがありません。コンピューターなしでは、私は不自由な身となり、まったく途方に暮れてしまいます。これが、あなたが私にしてほしいことであるとはっきりと私に証明してくださらない限り、私はコンピューター購入用の『聖別資金』を使うことはできません」

すぐさま、（あなたは自分が痛みを感じるほどにささげるつもりがなくて、あなたに資金を送るために犠牲を払うことを他の人たちにどうして期待できるか？）との考えが頭の中によぎりました。聖霊が彼に話しかけていたのでしょうか？

精神的ジレンマに加えて、彼が長年かけて大切にしてきた聖書の数々の約束が全部つながって、次々と素早く頭にひらめきました。「与えよ。そうすれば、･･･人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」（ルカ 6:18）。「わたしの神様は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たしてくださるであろう」（ピリピ 4:19）。「あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをしてくださるであろう」（テサロニケⅡ5:24）。「あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」（ルカ 21:4）。「神様は喜んで施す人を愛してくださるのである」（コリントⅡ9:7）。

デイビッドの頭の中の葛藤は、ほんの少しの間、激しくなりました。それから明け渡しの平安が来ました。ひざまずいたまま、彼は神様に屈服しました。「わかりました、神様。私は納得しました。請求書の支払いに私のコンピューター資金を使いましょう。一番緊急の必要にちょうどの額です。もう１台のコンピューター購入に関しては、あなたに信頼します。みこころなら、何とかしてあなたは私にそれを与えてくださるでしょう」

デイビッドは、自分の息子を犠牲にするように求められたアブラハムのような感じがしました。その明け渡しは彼の感情をかき乱しました。決心と共に平安が訪れましたが、コンピューター無しで働き、暮らすことを考えて、小さな失望感がありました。

すぐさま彼は、コンピューター用の小切手を現金にするため、ジョージタウンの銀行に飛ぶ計画を立てました。彼はあの鉱山労働者に、すぐに滑走路に来るようにとの伝言を送りました。喜びにあふれて、その鉱山労働者は叫びました、「夕べ私は久しぶりに神様に祈りました。私は、妻を慰めるためにジョージタウンに行く方法を、どうにかして備えてくださるようにお願いしました。こんなに早く神様が答えてくださるとは驚きです」

「その同じ神様が、私が今朝祈っていると、私の心を変えて、私は行きたくはなかったけれども町に戻るようにさせられたのです」

ジョージタウンに着陸し、彼らは空港で共に祈り、デイビッドはその鉱山労働者にロジャー・モネウの「祈りへの驚くべき答え」と

いう本を贈りました。神様はデイビッドの損失感を喜びに置き換えてくださいました。彼が従う決心をしたことで、他の誰かの祈りへの応答となる役割を彼が担ったからです。おそらく神様は、みわざのために同じような犠牲を払うように他の人の心を動かすために、彼の見本をお用いになるのでしょう。

彼は銀行で小切手を現金にし、いくつかの建築資材を買い、急いで空港に戻りました。飛行機のそばに、ふたりの患者が奥地へ戻るために待っていました。デイビッドは飛行機に燃料を積み、乗客のベルトを締めてから、電子メールをチェックしなかったことを思い出しました。

彼は、自分のノートパソコンを持っていなかったので（それを日曜日にパムにゆずった）、エアタクシーのオフィスに駆け込み、電話線につなげて、電子メールをダウンロードしました。彼は急いでいたものの、入ってきた 18 のメッセージの件名をざっと見る時間をとりました。「資金」という件名の父親からのメールが彼の気を引きました。

彼は急いで読みました。

> 息子よ、母さんと私は昨夜、ガイアナでなされている働きの緊急性に関して、神様から強く印象づけられた。私たちは、そこでの神様の働きの必要を満たすために犠牲を払うようにと駆り立てられるのを感じた。私たちは 4,000 ドルの小切手を切った。ガイアナのお前の口座にすぐ入金されるだろう。父

神様は、またやってくださった！みわざのための資源供給に介入なさったのです。今度はデイビッドの書類かばんにお金を入れることはなさいませんでした。その代わりに、神様はより大きな奇跡をなさいました。彼はデイビッドの心を変え、彼の両親の心を、「犠牲の祭壇にすべて」置くように駆り立てられたのでした。デイビッドは、自分にコンピューターを買い換えるお金がなくなったのと同様、彼らにはもう予備の現金はないことを知っていました。今、神様は犠牲への呼びかけをして彼らに信頼することにより、彼らふたりを祝福なさいました。神様は、デイビッドが自分のコンピュータ

ーをささげたように、真の意味での犠牲を払うことからくる喜びを彼ら両者が受けることをご存知でした。神様の祝福は、与えることを受けることへと導き、それはもっと与えることへと導くのです。ご自分の従順な子らを通して働くことによって、神様はその資源を倍増なさいます。

デイビッドは歩いて飛行機に戻りながら、神様を賛美しました。「私は最高の幸福を感じています。あなたは、私が一番必要としているものをささげるように私に求めるほど、私を信頼してくださいました。疑いもなく、あなたはなおも、あなたの時に、あなたの方法で、私の必要を満たしてくださることでしょう。いつの日か、あなたは『私のこころの願い』をかなえてくださるでしょう。すべてをゆだねる全き信仰によって働ける特権を感謝します。今日のこの単純な行為が、世界中の人々にとって、すべてをあなたにささげる完全な献身をする励ましとなりますように。私の尊きお父様、私はあなたを愛します。そしてあなたはおできになるということ、あなたはあなたご自身のために与えてくださることを確信します」。神様の資金の与え方に心を熱くして、デイビッドはすぐ、4,000 ドル全額を学校運用に充て、建築労働者の数を倍にする決心をしました。

合衆国に着き、デイビッドはコンピューター無しで数日を過ごしました。

彼は、まるで薬物の禁断症状を体験しているように、自分を見失い、不自由で、裸にされたように感じました。その間に、彼は父親のコンピューターで、アメリカ中央支部の総理、イズラエル・レイトからの電子メールを受け取りました。

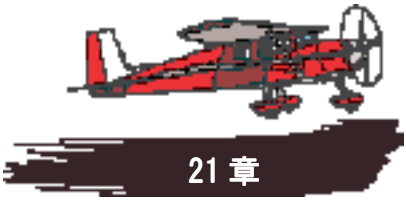
「私は、あなた個人のためにいくらかの資金を集めました。それであなたに衛星携帯電話を買おうと思います。あなたはそれを役立ててくれると思います」

数日後、（きっと総理は、携帯電話以外の物を買うのを認めてくれるかも知れない）という考えが彼の心に浮かびました。デイビッドは総理がオフィスにおらず、ブラジルで年会に出席していることを知りました。そこで次のような電子メールを送りました。

「携帯電話をくださるというご親切を感謝します。ところで、その代わりに私にノートパソコンを買わせていただけませんか？」

答：「親愛なる友よ、また霊感を与えてくれる人よ、そのお金はあなたのものです。それを使ってあなたが最も必要だと思う物を何でも買うことができます」

デイビッドは大喜びしました。神様は、贈り物をより良いものに置き換えてくださいました。彼が売ったものより高速のノートパソコンです。私たちには神様のために犠牲にするものなど本当は何も無いのだ、と彼は思いました。神様は、いつでもより良いものを与えてくださいます！



21 章

テレビ伝道の奇跡

デイビッドは、放送事業に彼の関心をひきつけた、1993 年のまさにその出来事をはっきりと覚えています。テネシー州チャタヌーガのシアーズ店のテレビ売り場を歩いていたその時、突然彼は、当時カレッジデイル SDA 教会の主任牧師だったゴードン・ベイツ博士の聞きなれた声を聞きました。彼はテレビで、デイビッドの親友で級友のステファン･ラフからインタビューを受けているところでした。主題は、当時進行中だった、テキサス州ウェイコにおけるデイビッド・コレシュとブランチ・ディビアン教団に対する政府の包囲攻撃のことでした。SDA 教会とそのカルトがつながりを持っているという誤報を、間違って放送した日の前日、デイビッドは、ナショナルパブリックラジオを聴いていました。世界総会は迅速に動いてその事態を正そうとしましたが、デイビッドはまだ胃のくぼみに感じた無力感を覚えていました。彼は誤報のキャンペーンを通して、一般大衆がいかに早く一集団に偏見を持ち得るかということを見たのでした。

さて彼は、ベイツ博士がその誤解を明らかに解くのを見て、興味をそそられました。デイビッドは、（神様は、ステファンがテレビ局で近年責任ある仕事をしていたので、彼を用いることがおできになったのだ）という思いにふけりました。

突然、人生を変えるような考えが彼の頭の中に深く焼き付けられました。（危機を取り扱うのにもっとも効果ある方法は、前もって準備することだ。いったん危機が起こってから始めるのでは遅すぎる。）

（主よ、もしあなたが放送ネットワークを立ち上げる機会を私の前に示してくださるなら、私は逃しません）とデイビッドは心の中で決意しました。

ガイアナの総理大臣の、最初のテレビ局への支持に促されて、デイビッドはジョージタウンに局を建てる認可を求めることに決めました。政府の答は？強硬な「ノー」でした。彼は数ヵ月後にもう一度頼みました。なおも答は「ノー」でした。その理由は同じでした。「われわれはこの町にそのような種類のテレビ局は欲しくない」

再びデイビッドは神様に知恵を求めました。再び（あなたが持っているものを使いなさい）という答がやって来ました。

「私はネット'98 のテープを持っています。しかし民間テレビを使うには費用がかかります。どうか行くべき道を示してください」

間もなく、合衆国のある女性が彼に電話をかけてきました。「ゲイツ兄弟、あなたは何か特別な必要について祈っておられますね。神様はあなたに電話するよう私に強くお勧めになりました」

彼は返事をしました、「私の祈りの課題を人に話すことはめったにないのですが、もし神様があなたに勧められたのであれば、私が神様にお願いしている特別な要望をお話しましょう。私たちは、２つの教会で衛星を使ってネット'98 の放送をし、良い反応を得ました。私は今、神様は、私たちがジョージタウンの地域のすべての人にそれを放送することを望んでおられるという印象を強く受けています。政府の役人は私たち自身のテレビ局を運営する認可を拒んでいます。そこで私は民間放送でそれをしたいのです」

「その費用はどのくらいかかるのですか？」

「ガイアナのテレビは割と安いのです。トリニダードでは 10,000 ドルくらいでしょうが、ここではたった 3,000 ドルです」

「私が持っているのがちょうどその額です。私は明日あなたに 3,000 ドル送りましょう」

デイビッドは急いでチャンネル 13 と連絡をとり、1999 年 3 月 19 日から始めて 10 週間、週に３日ネット'98 を放送するように手配しました。そのシリーズはすでに合衆国では終わっていたので、デイビッドは皆にメールして、残っている聖書、小冊子、一般向け教会出版月刊誌サインズ、封筒、返信用カード、聖書研究用テキスト、

テキストガイド、パンフレットなどを求めました。彼は、「それらをイリノイ州アンナの私の父宛に送ってください。そうすれば彼はそれをガイアナへ転送してくれます」と書きました。デイビッドは合衆国中から 1,000 ポンド近いもの（450 kg余り）を受け取りました。フォークリフト２台分のこれらの献げ物は、税関を無関税で通過しました。カンファレンス本部と密に働き、地域教会のすべてが必要な品を受け取りました。

ほとんどすべての教会員がその準備に加わりました。牧師夫人たちがスタッフとなり、電話のホットラインで、人々の要望に答えました。牧師や長老たちは祈りのチームと訪問者歓迎チームを組織しました。若者たちは個人の家々や公共の場所にパンフレットを配布しました。大新聞が日曜版に広告を掲載しました。チャンネル 13 は 10 週にわたり、無料の広告スポットを放送しました。神様はラジオでの広告も祝福してくださいました。それは多くの視聴者の注意を引き、無料の資料を求める要望がたくさん届きました。

バプテストとペンテコステ派の牧師たち、あらゆるキリスト教団の人々、ヒンズー教徒やイスラム教徒でさえも、彼らが長い間探していた真理を見つけたと言いました。政府の役人や銀行家たち、その市の上流階級の人々や教育ある人々が、無料の本や聖書研究を求めてホットラインの番号に電話をかけてきました。多くの人たちが、「このシリーズのスポンサーはだれですか？ドワイト･ネルソンの話しぶりが気に入りました」と質問してきました。

彼らは、「合衆国から来たグループです」という答を聞きました。

ネルソン牧師が安息日をテーマとして話したとき、ジョージタウンのセブンスデー・アドベンチスト教会は準備ができていました。彼らは、テレビでなされた、地元の教会へ出席するようにとの招待を受け入れた多くの訪問者を歓迎しました。ひとりのペンテコステ派の牧師は、学んだことに深い感銘を受け、「私は長年牧師をしていますが、安息日について聞いたことがありませんでした」と言いました。彼がこれらの聖書の真理を自分の教会で示すと、その教会の人々は、アドベンチストの伝道者オズモンド・バプテスト兄弟に、訪問して直接、安息日について話をしてくれるように要望しました。

ネット'98はガイアナにたいへんな影響を与えました。多くの人たちが、そのような質の高いプログラムを放送してくれたことに感謝する電話を、テレビ局のマネージャーにかけてきました。

この頃、デイビッドとベッキーは、合衆国のひとりの親友から、彼らにとって衝撃的な、心を傷つけられるような電子メールを受け取りました。それは批判と非難に満ちていました。その批判は当たっているのでしょうか？問題のある人々に神様が手を差し伸べようとされるとき、しばしば親しい友人を用いることを知っていた彼らは、これらの批判を、当を得ているかもしれないとして受け止めることにしました。

ひざまずき、目に涙を浮かべ、デイビッドとベッキーは神様に彼らの弱さを告白しました。デイビッドは祈りました、「尊いお父様、あなたは、この伝道奉仕で始まった多くのプロジェクトに対し、ある人たちが批判的であることをご存知です。私たちもまた、あなたが私たちにゆだねられた数々の機会に驚いております。これはあなたの働きであって、私たちのではありません。私たちにとってとても愛おしい、すべてのプロジェクトを手放します。私たちはこれを失望からではなく、信仰から出る行為としていたします。私たちはガイアナでのみわざをすべてを、あなたに完全にお渡しします」

「そうです、愛する神様」とベッキーが祈りに加わりました。「私たちへのあなたの召しを、あなたは改めて是認することがおできになります。さもなくば、仕事をすべき他のだれかをあなたは見つけることができると、私たちは信じています。この２年間、月毎に私たちの負うリスクが大きくなればなるほど、頼りになるあなたに私たちは驚かされてきました。神様、私たちはあなたほど多くのものを与えることはできないとわかりました。私たちが他の人々に与えれば与えるほど、あなたからもっと多くをいただきます」

デイビッドが言葉を挟みました、「神様、私たちは２年前、月に200ドルの予算で始めましたが、今年はそれよりも30倍から40倍大きい月々のプロジェクトにいつも献身してきたことは、あなたがよくご存知です。私たちは『少しのものでも、それが天の主への奉仕に賢明に用いられる時、それは与える行為そのものによって増し

加わる』（各時代の希望中巻 371 ページ）という真理を経験いたしました」

ベッキーは祈りを次のように閉じました。「主よ、あなたを賛美し感謝します。あなたは『私たちが持っているものを分け与えなさい、そして私たちが与える時、キリストは私たちの欠乏が満たされるのをご覧になる』（教会への証 6 巻 345 ページ）ということを教えてくださいました。けれども、あなたがはっきりと示してくださらなければ、私たちは合衆国の家に戻ります。私たちはあなたのみこころに反することはしたくありませんので、このつらい決心をいたします。アーメン」

デイビッドとベッキーは、聖霊が彼らに新たな献身をするように招いているのを感じました。ひざまずいて、互いの体に腕を回して、彼らは、神様がガイアナへの彼らの召命を改めて是認する何か特別なことをしてくださるように嘆願しました。

まさにその夜のこと、セブンスデー・アドベンチストの牧師でカーク・トーマスという名の人が、デイビッドに電話をかけてきました。「私の家主があなたに会いたいと言っています。彼は 12 チャンネルテレビの持ち主です。彼の奥さんのワシントン夫人は、ネット'98 の影響もあってバプテスマを受ける決心をしました。子供の時から彼女とその家族は、アドベンチストのメッセージを知っていましたが、教会を去ることに決めたのでした。彼女とその夫は、ドワイト･ネルソンが聖書の真理を伝えた方法に好印象を持ち、あなたとの関係を発展させたいと言って来たのです」

デイビッドは、その招待を喜び、彼らが将来の放送のために無料あるいは低コストの代替案を申し出たいのではないかと期待しました。トーマス牧師は、２日後にデイビッドが彼らを訪問する手配をしました。

ワシントン家族は、トーマス牧師とデイビッドを彼らの美しい家に歓迎しました。彼らがそよ風の吹くベランダで、座ってオレンジジュースを飲んでいると、ワシントン氏が身を乗り出しました。

「私どもはチャンネル 13 で見たことを感謝しました。妻は最近アドベンチストになりました。いつか私もおそらく、彼女と同じ信仰を選ぶと思います。私たちは、このテレビ局を霊的なものを提供

するという目標を考えて設立しました。ただ神様の介在を通して、私たちはこのテレビ局を得ました。アドラと協力しているあなたがたの働きのこと、飛行機を使った伝道や医療の働きをしていること、奥地で教育に関わっていることを、最近聞きました。さて私たちは、あなたがたが最近放送界に入ってきたのをよく知っています。妻と私は、あなたがたに提示したい特別なことがあります。私たちは、神様が、このテレビ局の所有権を50%あなたに与えたいと思っておられると信じています」

言葉を失い、デイビッドの頭の中に、ジョージタウンにテレビ局を建てる認可を得ようとして1年間努力したけれども、うまくいかなかったことが駆け巡りました。神様は、「私を待ち望め、デイビッド。時が来れば、あなたにテレビ局を全的に運営させるのは、私にとって難しいことではない」と言っておられたのでしょうか？

ワシントン氏は続けて言いました。「私はテレビ局の管理全部をあなたにおまかせしたい。あなたの働きを前進させるのにふさわしいと思うような使い方をしていただきたい。私が関わるのは、局が法的、政治的その他の思わぬ障害に会わないようにするだけにしておきましょう。私の目標は、このテレビ局が放送を続け、その潜在的可能性を十分に発揮させることです」

ワシントン夫妻はふたりを局に連れて行きました。「２階建ての家全部を使えます。あなたが見て一番よいと思うゲストルームを、スタジオあるいはプロダクションセンターとして使えるでしょう。局を運営拡張するにあたり、あなたがたの経済方策は何ですか？」

「私たちの理念は、ただ神様の支援に頼るということです。私たちの運営すべてにおいて、毎月の運営と資金の増加を神様に全く頼ります」

「それで満足です！」と彼は強調して言いました。「局を受け取って運営してください」

デイビッドは、この驚くべき知らせをベッキーに話すのを待ちきれませんでした。「神様がもうひとつの奇跡を働いてくださったところだ。君は２日前の僕らの祈りを覚えているかい？なんと、神様はこの伝道への明らかな召しを改めて是認してくださったばかりか、

テレビ局を僕らにくださることでそれを確かなものとしてくださったよ」
「私にはわからないわ。そんなことがある？」
「神様は、ワシントン夫妻に、資産すべてを含むテレビ放送局の全的運営を、ここで神様の働きをし遂げるために、僕らの手に渡すようにと強く印象づけられたのだよ。明らかに神様は、福音を広めるため多くの時間を放送事業に使うように意図しておられる」
「でも誰がそれを運営するの？」
「それには、僕らがしてきた経験をはるかに超えたレベルのボランティアスタッフと資源を要するだろう。本当にこれは神様のサイズの仕事だ。なぜならその成功の栄誉は、神様だけが得ることができるのだから。僕らは神様がなさることについて、今まで持っていた限界と思われる枠を全部放棄しなくてはならない」
「まあ！体中に鳥肌が立つ思いだわ。あなたはこの仕事がどのくらい高くつくか、多くの人にはどれほど不可能に見えるかにかまわず、受けることにしたの？」
「そうだよ、ベッキー。僕らは、僕らが仕える神様は無限だということを直に経験して学ばなくてはならない。僕らは、前方にある困難な時代において神様が必要を満たしてくださることを望み、前進すべきだ。彼らの申し出が決定的になる前に、僕らは、運営上考えるべきことを論議し、運営と拡張のための経済プランを出すためにワシントン夫妻と数回の会合を持つことになる」
「私は、サタンがこのことでかなり怒っているのではないかと心配だわ、デイビッド。彼はこの局が神様に使われるのを防ごうとして、最大限のことをするでしょうね。ワシントン夫妻が、すべてのことを神様に頼るという私たちの理念を理解し始めたので、サタンが疑惑という戦いを挑み始めるのが心配だわ。神様が天からの光でワシントン家族を取り囲み、サタンの悪の企みから彼らを保護してくださるように祈る、祈りのパートナーがあらゆるところに必要よ」

22 章

無限

ガイアナにおける神様の恵みの奇跡についてのその良い知らせは、カリブ海と南アメリカで、国から国へと広がって行きました。教会指導者や教会員からの要望が流れ込んで来ました。「助けてください。神様があなたを通してなさっていることを、私たちがどのようにして始めたらよいのか示してください。」

「神様は僕らに、限りなく前進するべき時が来ていると告げているのではないだろうか？」とデイビッドはベッキーに尋ねました。

「私たちは知恵を求めて祈らなくてはならないわ。きっとこれは、私たちが合衆国へ行ってくる時だという、神様の呼びかけかもしれない。私たちと一緒に、神様の特別の指示を求めて聖書を調べ、祈ってくれるように、両親に頼みましょう」と彼女は提案しました。

合衆国に戻り、デイビッドは家族に状況を伝えました。「ちょうど、僕らの小さな２座席の辺境飛行機が、ガイアナ西部での奉仕を始める扉をすみやかに開いたように、カリブ海と南アメリカの至る所で働くには長距離飛行機が必要になります」

幾日かの間彼らは聖書を調べ、祈り、大きな経済的決断のことで悩みました。この選択は、彼らが将来どのように働きリスクを負うかに、深刻な影響を与えることになるでしょう。ついに平安が与えられました。神様は、彼らに、イリノイにあるゲイツ農場の一部を売った資金を運用して、双発エンジンの小型飛行機を購入する資金の一部にするようにという強い印象を与えられました。デイビッドの両親はいつも協力的で飛行機購入のために、さらに隣の土地の一部を売ることを申し出ました。孤立した地域と諸国との間で、人や

器物を安全にすばやく移動させる飛行機が必要でした。デイビッドは神様がお選びになると思われる飛行機を捜し始めました。
彼は、ロバートソン短距離離着陸装備があって、特別に機首部にも荷物が積めるようになっているパイパー社のツインコマンチが在る所を突き止めました。驚いたことに、彼が見つけた航空機は彼がケンタッキーで何年も前に飛行したことのあるのと同じものでした。交渉の間、何度も何度も、その譲渡契約は無駄に終わるように見えました。ある時、家族はすべてを止め、祈るためにひざまずきました。「神様、あなたは将来をご存知です。もしこれが、私たちが使うようにあなたが取り分けておかれた飛行機でなければ、譲渡契約がだめになるようにしてください」
数分のうちに電話が鳴り、その飛行機の持ち主は、「あなたの購入価格を受け入れましょう。おいでになってその航空機を点検し、テスト飛行をしてください」と言いました。
デイビッド、父親、そしてアンドリュース駐機場の整備主任ブルックス・ペインは、その飛行機を点検するためにカリフォルニア州サンホゼへ飛びました。彼らが言った気がかりな項目は全部、その大きな航空機機関が彼らの費用ですぐ処理してくれました。
この飛行機を購入する決断は、必然的に多大な負債を負うことを意味しました。「僕らが初めて小さな飛行機を購入した時と同じような決断の経験をしているけれども、リスクの程度はずっと大きい」とデイビッドは父親に説明しました。「この飛行機は75％の資金調達を要して、もしベッキーと僕、同じく父さんにも母さんにも、確信と平安がなかったら、決してその一歩を踏み出せません」
信仰によって彼らは再び祈りました、「必要とされている飛行機のためにリスクを負うことはあなたのみこころであると、私たちは信じます、神様。ローンを組んでから６ヶ月以内に負債が無くなるようにしてください。あなたはその金額と、またなすべきことをご存知です。あなただけがこれを解決することがおできになります」
彼らは６人乗りのみごとな航空機をミシガンへ飛ばし、カマラングのテレビ局のために550ポンドの放送機器を積み込みました。デイビッドは、放送の技術分野を率いるためにジョージタウンへボラ

ンティアとして行く、ダン・ピークとその妻シンシア、そして小さな娘ハンナと共にガイアナへと飛びました。
ワシントン夫妻を最後に訪問してからおよそ１ヶ月が過ぎました。
親しみのこもった挨拶を済ませて、デイビッドは話し合いを始めました。「先だって私たちが同意した理念を再考してよろしいですか？テレビ局の運営基盤を商業的利益には置きません。私たちは資金については神様に信頼します」
彼らが出した様々な意見により、デイビッドはすぐに、彼らがそういう取り決めをしようとしていたことを考え直していたことに気づきました。敵は彼らの焦点を世俗の理念、つまり伝道使命を果たすことにではなく、利益に当てるように働きかけていました。デイビッドは彼らの言うことを聞きながら、彼らが、福音伝道と対立しかねない儲かる番組を作ることを期待しようとしているのがわかりました。彼は給料のために働く雇用者から起こる問題、またボランティアたちが払わねばならない家賃の問題を予測できました。
「残念ですが、神様はそのような取り決めを喜ばれないと思います」とデイビッドは言い、重い心でその会談を終えました。神様だけが感じ方を変えることができ、また神様の栄光のために局が使われるのを防ごうとして懸命に働いている、目に見えない勢力と戦うことができます。
彼は、「お父様、すべてはあなたの力と恵みにかかっております。天の理念に気づくようにワシントン家を助けてください。その理念は、必ず必要を満たしてくださると頼りにできるお方として、神様を見ることから生まれます」と祈り続けました。
デイビッドは、自分がその下で働いている信仰理念を書いた３ページの文書を用意しました。彼は、資金をプロジェクトに投入するという彼の今までの提案すべてが、利益ではなく、もっぱら伝道を追及することにかかっている理由をはっきりと述べました。それから彼は、ワシントン氏に電話をして、翌日の午後４時にもう一度面会する約束をしました。１日中、デイビッドと彼の友ウィンストンは一緒に、また個人的に、みわざのために神様ご自身が介入してくださるように祈りました。彼はまた、両親にこの危機に関する彼の祈りを電子メールで伝えました。

神様がなおも責任を負っておられることを思いながら、彼らはワシントン家に平穏な気持ちで集まりました。けれども彼らは、どれほど予断を許さない状況であるかを認めて、身が引き締まる思いでした。実に彼らは、キリストとサタンの間の大争闘における、もうひとつの出来事に直面していました。

ワシントン夫妻がその３ページの文書を読んでいる間、ふたりは黙祷を続けました。ワシントン氏は読みながら、特定の行に下線を引き、そのたびに「なるほど」とうなずきました。

彼の妻は読み終えると、次のような説明をしました。「先の木曜日に私はウィンストンを家に招き、なぜ私たちが利益追求の会社としてテレビ局を維持しようと決めたかをお話しました。私たちに収入をもたらすだけでなく、そこに滞在するボランティアスタッフのための家賃も支払うのです。でもウィンストンが、あなたの信仰の背景にある経歴を説明したとき、私たちは神様の奇跡的な導きの物語を聞きながら驚いてしまいました。

金曜日は１日中、私たちがとった立場のことで落ち着かない感じがしていました。私は職場から夫に電話をして、私の気がかりを話しました。私たち二人とも、神様は、局で得る私たちの商業上の利益の件は撤回するように、私たちの目を覚ましておられるにちがいないと判断しました。神様から、足を踏み出して、この運営における信仰理念を受け入れるようにと強く印象づけられました。率直に申し上げて、私たちはまったく信仰によってテレビ局を運営するという考えに、少々恐れを抱いています。けれども、神様は資源供給をしてくださると私たちが信じていることも認めます。私たちの人生における神様の力を経験したいと思います」

ワシントン氏が言い足しました。「私たちはまた、あなたがたに建物全体を家賃無料で使っていただくことに決めました。あなたがたは、最小限の維持費だけを支払うことになるでしょう。テレビ局は完全に伝道を目的として運営されるでしょう。確かに神様は、資金のことで問題を持つことはないでしょう。私たちは、神様がどのようにして製作のための資源供給をなさるかを見守ろうと思います。神様が局の電波を強め、中継器を用いて他の町々へ拡大してくださると信じます」

デイビッドとウィンストンは喜びの歌を歌いながら車を運転し、帰ってきました。「ウィンストン、前よりもっと信任を得て、プログラムが軌道に戻ったね。神様は驚くほどの介入をなさった。神様の御霊だけが心と思いを変えることができる。おお、祈りの力よ！主のための霊の戦いでまたひとつ勝利だ！」

新しい飛行機がカリブ海に着いてから数週間以内に、デイビッドとダン・ピークはグレナダ、ドミニカ、アンティグア、そしてトバゴへ行き、アドベンチストテレビ放送局の設置計画を立てるために教会指導者たちと政府の役人に会いました。そのテレビネットワークは拡大して、今日カリビアンファミリーネットワークとして知られているものへと発展しました。

神様は忠実に、新しい飛行機の毎月の支払いを続けるためと収支バランスが十分にとれる資金を供給してくださいました。ガイアナでその働きを開いた小さなセスナ 150 は、ツインコマンチに関する巨額の負債の半分を支払うために売られました。

デイビッドがテレビ機器を積んでガイアナへ２回目の飛行を始めてすぐ、ツインコマンチの左エンジンのエンジンオイルが高温になりました。彼は一番近いテネシーの空港に着陸し、そこで、幾つかのエンジンのプッシュロッドタペットがひどく磨耗し始めており、エンジンじゅうに金属の削りくずをまき散らしているのを発見しました。

彼はベッキーに電話をしました。「僕らはがっかりするような逆戻りをしてしまった。エンジンをつけ直さなくてはならない。でも合衆国で起こったその緊急事態は、すばらしい空港で直してもらうという良い知らせでバランスがとれたよ。それが終わったら、前よりずっといいエンジンになるだろう。右エンジンも、飛行機が直って奉仕する前に、磨耗したタペット（注：内燃機関で, カムの運動を弁に伝える滑走棒）の点検を受ける。神様が支配しておられるのがわかるよ、神様だけが将来をご存知なのだから」

ガイアナの奥地では、上マザルニ区域のアメリカ先住民の人々が、福音を聞き、それに応答し続けていました。年間を通じて、５台のビデオプロジェクターが村々での連続５週間の巡回伝道集会に使われました。２年近く常時使用し、カヌーで、また徒歩で、熱帯地域

を移動しましたが、取り替えたのはプロジェクターの白熱灯が２つだけでした。３つの村が教会の建築を始め、他に２つの村が彼ら自身の教会を持つ計画を立てました。

ガイアナには９つの州があり、プロジェクターと飛行機による援助の働きは１つの州、上マザルニ地区だけで行われています。では、広大な、まだ足を踏み入れてない近接地域の必要についてはどうでしょうか。村長たちが、飛行機を使った医療伝道プログラムや伝道講演会を執り行うバイブルワーカーを求めてやって来ました。飛行機による援助や、専門パイロットや整備士そして医療従事者無しでは、要請は答えられないままです。悲しみでいっぱいになり、デイビッドは、「私の人生のほとんどを、宗教的不寛容のために新しい働きを開くのが困難で、また危険なところで働いてきました。ここではそうではありません。今開かれている機会はまもなく消えてしまいますか？父なる神様、神様を知りたがっているこれらの村々の請願を受け止めてください」と神様に訴えました。

テレビ局の資金調達に関するチャレンジは、飛行機が必要とした以上にずっと大きく浮かび上がってきました。神様は、小さな１つのテレビ局の建物とさらに大きな第２局という贈り物を可能にして、神様の力をはっきりと見せてくださいました。それらを通じて神様は、新たに２つの国で働きを開始する機会を与えてくださいました。神様の摂理は、もっと頼りになる能率的な双発エンジンの飛行機が新しい地域に入って行けるようにしました。しかし、まだ神様を知らない大多数の人々を、誰が来て助けるのでしょうか？

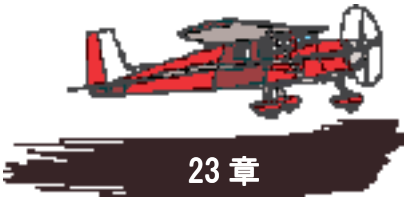
疑う余地のない確信を持って、デイビッドと彼のボランティアたちは、神様が与えようとしている祝福に協調した働きをする用意をしました。どうすればよいかわかりませんでしたが、彼らの目は神様を見続けました。

幾千という魂がイエス様の招きに応じるのを助けたこれらのめざましい働きはみな、サタンを怒らせ、死に物狂いにさせました。外部から攻撃しようとする彼の努力は失敗したので、彼は内部から分裂させようとしました。経験と影響力を持つある人が、ある集会でセブンスデー・アドベンチストのガイアナ教区は、ゲイツ夫妻、そして彼らのプロジェクトとの関係一切を打ち切るという提案をしま

した。その人は、この働きの目覚しい成功に脅威を感じたに違いありません。

すべての危機は、神様の前にあなたをひざまずかせる招きとなります。デイビッドとその家族はまさにそのことをしました。ユニオンと支部の管理者たちはすみやかに調停し、強力な仕事上の関係を回復する目的で別の会議の手はずを整えました。神様はなおも支配なさっており、その難関を突破させてくださいました。その会議で論議がなされ、各プロジェクトに関するよりよいコミュニケーションと調整のための、特別計画を決議しました。新しく選ばれた指導者たちが奥地で発展しつつあるプロジェクトを訪問することになり、その時が取り決められました。彼らはまずよく見て、そして神様の働きの各局面を知るために質問することができました。

聖霊の力により、兄弟たちは、神様の民はまだ十分ではない、十分に熱くはない、勇気が足りない、あるいはこの申し分のない機会をつかむのに十分なほどビジョンに満ちていないということに気がつき、目が開かれました。



23 章

吼えたける獅子

ジョージタウンの新しいテレビ局のために寄贈された、伝道用ビデオテープや専門機器を積んで、デイビッドはガイアナに向けて合衆国を発ちました。彼は、冬の寒冷前線のすぐ前を飛びながら、夜間はマイアミ、プエルトリコ、ドミニカ、グレナダ、そしてトリニダードに立ち寄り、その間ずっと高周波無線でイリノイの父親と連絡を保っていました。道すがらデイビッドは、神様がガイアナ政府に対して強く印象づけてくださり、彼の組織、ガイアナアドベンチスト医療飛行機サービス(GAMAS)に無期限運営の認可を与えてくれるように絶えず祈っていました。そうすれば GAMAS の飛行機は制約なしにガイアナで操業できます。

到着するとデイビッドは、ウィンストン･ジェームズから、「神様は、ガイアナに飛行機が到着するための道を備えておられる。民間空港部局は書類の準備をした。神様の介入を求める多くの祈りがささげ続けられている」と聞きました。。

本当に、「神様が何かの働きを達成するために道を開き、成功の確証をお与えになるときに、選ばれた器は約束された成功をもたらすために全力を尽くさなければならない。働きを推進するために示す熱心と忍耐に相応した成功が与えられるのである。神様は、神様の民がたゆまず努力して、その分を果たす時にのみ、奇跡を行うことがおできになる」のです（国と指導者上巻 228 ページ）。

デイビッドがガイアナにいない間、神の腹黒い敵は大いに活動していました。「偽りの父」は敵意を持つ人々を使い、運営のあらゆる段階で神様の働きを損なおうとしました。

まずサタンは、当てこすりでデイビッドの品性を中傷するやり方を知っている人を選びました。彼は、デイビッドが犯罪行為をし、異端を教えていると言って非難しました。第２に、これらの非難を掲載する新聞記事が現れました。第３に、その非難者はテレビ局の所有者であるワシントン家を訪れ、デイビッドの悪い噂のゆえに、そのプロジェクトを支援するのをやめる気にさせようとしました。その男は、自分こそがその局を与えられるにふさわしいという意見を述べました。けれども神様は支配しておられました。なぜなら、ワシントン夫妻は、彼らが聖霊の導きに従ってきたことに、以前よりももっと確信を持つようになったからです。

敵は、飛行機とテレビ局に関する法的手続きを中断させるため、神様の働きを邪魔する油断ならない方法を計画しました。しかし神様はなおも支配しておられ、サタンを物ともせず、ご計画は進行しました。祈りの力を知っていたので、デイビッドとその家族や友人たちは、神様の働きを彼が続けるときの安全を守るために、特別の天使たちを送ってくださるように祈り求めました。天に祝福され、デイビッドは、ガイアナ奥地一帯を３日間飛行し、そして民間航空路線で合衆国に行くというスケジュールを無事終えました。

たちの悪い噂は急速に広まりました。デイビッドが空港でチェックインすると、ひとりの特別警官が彼のそばに立ち止まり、非常にたくさんの質問をし、彼のかばん類を調べました。２時間の取り調べの後、彼は、神様がデイビッドに指導させて奥地で始めたプロジェクトに感銘を受けたようでした。それ以来デイビッドとその特別警官は親友になりました。

神様はどのようにして吼えたける獅子を静めたでしょうか。前に取り決めたように、デイビッドはガイアナ教会教区本部の人々を連れて、上マザルニ地区の各村に飛びました。彼らは自分たちの耳で、アラウ、カマラング、フィリッピ、カコ、ワラマドング、そしてカイカンの村長たちが表す感謝の言葉を聞きました。彼らはいっぱいになっている教会を見、患者たちが無料医療ケアや飛行機搬送をしてもらい、GAMAS によって命が救われたことを聞きました。彼らはいくつかの教会献堂式に参列し、パルイマのデイビスインディアン実業学校の宗教棟と図書館の献堂式に参加しました。それでもあ

る人は、まだデイビッドを誹謗する方法を探し、大声で、「献金で建てられたこれらの教会や学校を誰が所有しているのですか」と質問しました。

権威者であるひとりの村長が、賢い答えをして、デイビッド･ゲイツがそれらを所有しているという噂を止めました。「教会であれ学校であれ、アメリカ先住民のために建物が建てられる時はいつでも、その所有権は、その建設に資金供給した人のものには決してなりません。それは先住民に属します。ですから、土地の法によれば、これらの教会や学校はアメリカ先住民の所有です」。非難はぱったり止みました。

訪問者たちは、ビデオプロジェクターでネット'95とネット'98のビデオを見せながら村々を巡回した結果を見ました。彼らは、その年の３ヶ月間で前年1年間より多くの先住民が信者となったのを自分自身で知りました。霊的な成長を表すアメリカ先住民の温かい歓迎と熱意は、彼らに神様の導きと祝福を確信させたのです。どのような人間もそれだけのことを達成できるものではありません。地元また海外からのボランティアの働き人たちは、その献身した奉仕が受けるに値する十分な賞賛を与えられました。

教区からの訪問者たちは、地域の至る所で村の村長たちや地域の責任者たちが、GAMASがガイアナの隅々にまで自由に入って行けるように、内閣が無制限の飛行機運用を認めることを強く請願するのを聞きました。そのようにして、無料医療と搬送がガイアナの国中で実施できるのです。サタンの怒りが激しくなったのは言うまでもありません。彼は、認可が与えられればガイアナ奥地で福音が速やかに広がるための扉を開くことになるのをよく知っていました。

訪問者たちはデイビッドに賛同し、次のような請願で締めくくりました。「私たちは前進することをためらうべきではありません。『主は今に至るまでわれわれを助けられた』（サムエル記上 7:12）。もし何事か神様の目的のために成し遂げられるとすれば、それはこの絶好の機会に成し遂げられねばなりません」

デイビッドは、神様がさしあたり、獅子の吼えたけりを弱めてくださったことに感謝しました。しかしデイビッドは、彼とボランテ

ィア仲間は、非難する者たちのいやな吼え声をきっとまた聞くことになるだろうと警告している、第１ペテロ 5:8 を思い起こしました。

24章

神様に難しすぎることがあるだろうか？

ある安息日の午後、デイビッドとベッキーは、カイカンの自宅のベランダで共に腰かけて、思い出話をするめったにない機会を楽しんでいました。

「私はここで、そばを流れて行く川を見ながら、とても平安を感じるわ」とベッキーがデイビッドの手を握りしめて言いました。「私たちの小さなカイカン教会で礼拝できる安息日がうれしいの。彼らの歌と一緒にあなたがトランペットを演奏すると、人々の顔が輝いたわ。神様はあなたの上手なトランペットを、多くの訪問者を集会に惹きつけるためにお用いになってきたのね。

私は、この大事な人たちの間で神様に奉仕するこの特権を神様が与えてくださったことを、幸福に感じるの。私たちが今年、キリストのために人々の所に行くどんな機会も逃すまいと神様に誓ってから、神様は確かに私たちの献身を試されたわ」

「そうだったね。僕らが夢見たよりはるかに大きい神様のご計画に驚くよ。毎日神様は、前進するのが僕らの義務で、道を開くのは神様の働きだということを思い起こさせてくださる。そして神様がなさったことを見てごらんよ、ベッキー。デイビスインディアン実業学校は３年近く運営されてきたし、大人のためのバイブルワーカー訓練学校もうまくいっている。神様が訓練学校のために道を開かれた日を覚えているかい？」

「そのことを話してちょうだい」と彼女は言いました。

「８歳の子を持つ 35 歳の母親が僕のところに来て頼んだんだよ。『私、あなたの中等学校に来てもいいですか？』とね。僕は彼女にその余地はないと言いながら悲しかった。でも彼女は訴え続けた。

『私はいつも学校へ行くことを夢見てきました。今、ここに私たちの学校があります。どうか学校で勉強させてください』」

「それで神様は彼女を用いて、年配のアドベンチストの人々を招いてボランティアバイブルワーカーのための昼間の学校に参加させる、という考えをひらめかせてくださったんだ」

ベッキーはほほ笑みました。「でも彼らを指導する力量のあるボランィア教師はひとりもいなかったわね。もう一度、どうやって神様がその扉を開かれたか話してちょうだい」

シーラ・ロバートソン医師
エイダとセバスチャン･エドモンドと一緒に

「70歳半ばで引退した敬愛する医師、シーラ･ロバートソンが、この要望と同時にボランティアとして来てくれた。『どうか、私が奉仕できる最も孤立した村に連れて行ってください』。僕は彼女を連れてフィリッピまで20分の飛行をした。歩けば４、５日かかる距離だ。そして彼女に教えたよ、『ここに、毎日連絡をとるための小さな無線があります。必要ならもっと頻繁に使ってください』。僕は彼女をそこに残した。すると彼女は、神様のために驚くほどの働きをして、初めから終わりまで楽しんだ。ある日僕が彼女をちょっと訪問しにフィリッピへ飛行すると、彼女は先住民の成人や青年のためのバイブルワーカー訓練学校を開くという考えを僕に話してくれた。というのは、彼らはアカワヨとアレクナの方言を話すし、彼ら自身が先住民なので、村に入って行くのに政府の認可を必要としないからだ。僕は、僕も同じことを夢見てい

たが、そのプログラムを指揮する人がだれもいなかったと打ち明けた。
『私は遠隔の孤立した地域で働くのが一番好きです』と彼女は僕に言った。『パルイマはおよそ 600 人の大きな村です。でも神様が、それを率いるために私を必要とされるなら、嫌とは言いません』」
「卒業の時、９人のアメリカ先住民のバイブルワーカーの顔から発散していた熱心さを思い出すわ」とベッキーがつけ加えました。「教区の経験あるバイブルワーカーの個人指導の下でふたりづつ出て行き、７人はすでに未踏の地域で開拓伝道の働きを始めたわ。神様は確かにシーラ先生を通して働かれたのよ」
「ボランティア無しでは、僕らのここでの働きは不可能だっただろう。チームリーダー、指揮者として、彼らはそれぞれの分野を前進させ続けている。神様が今年、少なくとも 15 人の、その大部分は教師となる長期ボランティアを求める僕らの祈りにきっと答えてくださると思う。でも短期間のボランティアも大きな祝福を加えてくれるね」
「そうよ、デイビッド」とベッキーはほほ笑んで言いました。「ダコタアドベンチストアカデミーの生徒たちと校長先生がここになじむのを見るのは、なんとわくわくすることかしら。天使たちだけが、彼らがどんなに一所懸命に村の子供や大人たちと祈り、遊んだかご存知だわ。カイカンとアラウの間をグループの半分が移動するために、セスナ 206 で何回往復したことかしら」
「ローレルブルックアカデミーから来た大きなグループは、バービス川のほとりにあるキンビアの新しい学校の建築を大いにはかどらせてくれたわね」
「ベッキー、君はセブンスデー・アドベンチスト世界総会の副総理、フィリッピ・フォーレット牧師が、デイビスインディアン実業学校の新しいビデオ製作スタジオの献堂式を導いたとき、彼の存在がアメリカ先住民をどれほど励ましたか見るべきだったよ。僕らは、その地域の至る所で使う、教育や伝道用ビデオを方言でまもなく作り始めるのを期待している。学校の新しい健康科学棟の鍬入れ式のとき、インディアンたちがどれほど幸福そうだったかを見て、僕は感動した。それにカマラングのコミュニティテレビ局の献堂式でも

ね。まだ放送はしていないけれども、その局は建てられ、稼動に備えている。
　そうだ、ねえ君、神様がおできになることに限界はない。イセネル村に入っているシルベスター･ロバートソンとその同僚ジェームズ･エドウィンのような、新しいバイブルワーカーのことを考えると、200 人の村人たちが彼らを受け入れてくれたこと、そして三天使の使命の福音を喜んで聞いているということが、僕はうれしい。実際、先日シルベスターは僕に話してくれた。彼は毎週、地元の英国国教会の司祭と聖書研究をしていて、その司祭は多くの真理を受け入れているようだとね。セバスチャン・エドムンドとレイ・ヘイスティングはコーペナングで働きを開始した。そこの村人たちは、神様のみ言葉が彼らに開かれたとき、ふたりに必要なものを与えてくれた。新しいバイブルワーカーのグループが６ヶ月ごとに卒業して、いくつかの未踏の村々が福音を受け取っているんだよ。神様が僕らに、神様は資金調達をどうにでもおできになるという理念を刻み込んでくださって以来、すばらしいことが起こってきた。僕らの資金調達は、ただ神様への祈りを通して行われるのだ」
　「ねえ、デイビッド、あなたがとても一所懸命に働いていることを私がどう感じているか知っているでしょう。だけど、神様は、あなたが給与をもらってカンファレンスに雇用されるのではなく、ボランティアでアドラガイアナの監督としてカンファレンスチームの一員になる必要があることを、前からわかっておられたのね。私は、仕事の成功に不可欠なのは、確信によること、そして地域の教会の幹部の人たちと密に関係を持って働くことだと思っているわ。ジョージタウンアドラの事務所で働くあなたに補佐ディレクターがいたので、あなたは今年、新しい６カ国で自由にリーダーたちと働きに参加してきたわね」
　「『この働きが神からのものならば、その完成のためには、神が自ら資金を備えてくださる』というのは本当だ」（各時代の希望中 371）。
　数日後、ジョージタウンへ飛行したとき、デイビッドは地元登録されているセスナ 172 が売りに出されていることを聞きました。それは、彼がガイアナへ越してきて以来初めて売りに出された単発エ

ンジン航空機でした。彼は地元登録された飛行機を所有するこのきわめて重大な機会を逃すまいと決めました。空港で整備監督が彼に向かって走って来て言いました。「もし君が売り出されているセスナ 172 の購入を考えているなら、早く行動しなくてはいけないよ。もうすでに、他のふたりが持ち主とエアタクシー会社の CEO（経営最高責任者）に会い、それを買うと申し出ている」

「忠告ありがとう」と、デイビッドは空港の駐機地域を横切りながら叫びました。彼は声を出して祈りました、「主よ、どうか地元登録されたその航空機が他のだれかに売られないようにしてください。あなたは長年辛抱強く待っていた未踏の村々のことをご存知です」。走りながら、彼は、近頃話した合衆国の友人が、必要な時に使うための融通のきく資金として、相当な額を合衆国にあるデイビッドの銀行口座に入れておくと言ったことをありがたく思いました。

彼は、そのエアタクシー会社の CEO に電話をかけました。

「そのとおりです、ゲイツ機長」とその人は認めました。「他のふたりがその飛行機を買うと申し込みました。私は午後 4 時にあなたと会うことにしましょう。“早い者勝ち”というのが私の信条です」。そしてその CEO は電話を切りました。

デイビッドは時計を見ました。閉店時間前に銀行へ着くために 30 分ありました。タクシーを見つけようと外に走り出たとき、その朝の個人礼拝の時に読んだ言葉が彼に指示を与えました。「神の働きは、すばやく見、正しい時に力強く瞬時に行動する人を必要とする」(ゴスペルワーカー p .133)。

15 分後彼は、途中まで乗せてくれるタクシー運転手を見つけました。道すがら彼は、別のタクシーが時間までに自分を会社まで乗せてくれるように祈りました。彼は、ポケットに頭金を入れて CEO のオフィスに行くことにしました。

なおも神様に語りかけながら、彼は祈りました。「主よ、あなたは私が働いてきた所ではどこでも、経済的信頼を得るように私を祝福してくださいました。私は銀行の出納係たちの名前を知っています。外国の銀行から送金された資金を受け取るには時間がかかることがあるのを、あなたはご存知です。あなただけが、私が多額の外国の小切手を現金にしようとするとき、その出納係に好意ある応対

をする気持ちにさせることがおできになります。これを早く処理してくださることを感謝します」
　彼が銀行のカウンターへと歩いて行くと、ひとりの親切な出納係がほほ笑みました、「こんにちは、ゲイツさん。どういたしましょうか？」
　「この個人的な小切手をすぐに現金にしてくださいますか。重要な約束があるのです」
　彼女はそれをざっと見ました。「上役から必要な署名をもらって、すぐに現金を持って戻ります」。ほんの数分で、彼女は彼に 1 万ドルの現金を手渡してくれました！
　「本当にありがとうございます」とデイビッドはほほ笑んで言い、別のタクシーを捜しに急ぎました。空港へ戻って彼は、そのエアタクシー会社の主任パイロットであるひとりの友人にそっと話しました、「僕は、ポケットに頭金を入れて約束した面会に来ているんだ、言い値より 5000 ドル少ない値段を提案しようと思っている」
　ところが、購入に関心ある人が他にふたりいるので、少ない額を提示して交渉することはできないことがわかりました。即座に、その主任パイロットは社長 に電話をしました。「ゲイツさんがここに頭金を持って来ています。あなたはこの飛行機が、奥地での医療の仕事に役立つことを知っていますね。多くのアメリカ先住民が彼の医療航空機サービスのおかげで生きています。彼の低い申し出価格を受け入れませんか？」
　「ゲイツさんに面会に来るように言いたまえ」と社長は答えました。
　デイビッドは社長室に足を踏み入れました。「社長、ガイアナ奥地の人々には、彼らの必要に役立つもう 1 機の飛行機が必要なのです。ここにセスナ 172 の頭金があります」。デイビッドはその現金を彼の机に置き、話を続けました。「私は、希望価格より 5,000 ドル安い提案をしようと思っていましたが、他のおふたりもその飛行機に関心があることを知りまして･･･」
　「私はあなたの申し出を受け入れます、ゲイツさん」と社長は口を挟みました。「私は売値を下げるようにすぐ命じましょう。明日残りの分を電報為替で送ってくれればけっこうです。私はあなたの

機敏な行動を高く評価します。あなたが明日まで待ったら、きっとその飛行機を手に入れ損なったことでしょう」
　社長は手を伸べて、デイビッドの手を握りました。「ご配慮、本当にありがとうございます」とデイビッドは言いました。「私は、GAMASを確かにコントロールしておられる、私の天の父の導きの下で働くことをお約束いたします」。デイビッドは感謝を述べてほほ笑みました。
　社長は、答えて言いました。「私は、これまで4年間ガイアナであなたがしている仕事に大変興味をもっておりました。あなたは、アメリカ先住民の利益のために開かれた機会に対して、すばやい行動をとられました。私は、この売渡契約は、ガイアナの福利のために最善の選択に違いないと確信しています。あなたがガイアナ人を助ける限り、たとえ彼らがアメリカ先住民であっても、私はあなたの味方です」
　デイビッドは社長室を去り、天の財務官と状況全体を論議するために、引っ込んだ場所で立ち止まりました。「神様、気は進まないのですが、残りの必要資金同様、頭金も100パーセント調達しなければならないことを、あなたはご存知です。私はその飛行機購入の資金を借りるとき、長年の友人に90日間と頼みました。神様がじかに介入してくださらなければ、その支払いはできないことがわかっています。けれども、私の義務は前進することだと信じます。あの飛行機はあなたのみわざの進展にとって不可欠ですから、あなたの誠実なご導きに安んじ、その資金調達のことであなたを信頼できます。道を開いてくださること、そしてあなたの大宇宙の中のこの小さな場所で、あなたと組んで働ける特権を与えてくださっていることを感謝します」
　翌朝デイビッドは新しいセスナ172で、1週間続く多忙な飛行を始めました。燃料と必需品を学生宣教師たちに運びました。福音の働きを始めるアメリカ先住民のバイブルワーカーたちを、彼らの村に降ろしました。セスナ172は数名の病人を病院へ運び、ジョージタウンで亡くなったひとりの女性の遺体を、カマラングの故郷の村で葬るために運ぶこともしました。

広大なジャングル上空を飛びながら、彼の心に平安と喜びがあふれました。神様は、祈る彼をみ言葉で励まし、勇気で満たしてくださいました。

「いたるところで障害や困難に直面するでしょう。その時それらに打ち勝つという確固とした決心を持たなければなりません。でなければ障害や困難があなたを打ち負かすでしょう。そしてもし何か目的を果たそうとするなら、それは最善の時になされなければなりません。秤のごくわずかな傾きも見極め、即座に物事を決定すべきです」（福音宣伝者　133,134 ページ）。

この指示に従って行動してきたことを確信し、彼は今、神様の応答を見ることを期待し、わくわくした気持ちで待っていました。デイビッドは長い遅延は天使を疲れさせることを知っていました。神様のタイミングは長い時間を必要としないはずです。

10 日もしないうちに彼は、ある寄贈者から、ローンの支払とベネズエラのための新しい飛行機を考えて、追加預金をするために十分な資金を送ったという情報を受け取りました。

なぜベネズエラが選ばれたのでしょうか？何万人もが亡くなった 1999 年のカラカスでの悲惨な地滑りのための、アドラ救援物資の配布において、クリスチャンの若者たちがすぐに行動を起こしたことがありました。政府の役人たちは、これらのクリスチャン青年たちが正直で親切であるのをよく見ていました。今、扉が開かれ、必要のある地域がセブンスデー・アドベンチストの助けを求めてきていたのです。

ベネズエラの教会指導者たちは、デイビッドに伝言してきました、「医療面で孤立している地域を援助する方法を話し合うために 30 人の村長たちと会うとき、どうか私たちと同席してください。ガイアナのアメリカ先住民の人たちが川向こうの友人に、ガイアナアドベンチスト医療飛行機サービスから受けた祝福を話しました。これらの現地の指導者たちが、ここベネズエラの住民の間でも同じようなサービスを設けてほしいと、私たちに頼んできました。そのプロジェクトへの村長たちからの支持がとても多いので、私たちはあなたの助けとアドバイスを必要としています」。「私ができることで

したら何でも、喜んであなたがたと一緒にいたしましょう」とデイビッドは返事をしました。
「もし神様が、アメリカ先住民の人々に手を差し伸べるもうひとつの扉を開いておられるなら、私たちは神様の指示の下で前進しなければなりません」
デイビッドはカナダ、中央アメリカ支部、そしてカリブ海ユニオンのアドラディレクターたちと会い、ベネズエラのための飛行機入手の準備のための指導をしました。彼はまた、ボランティア指導者が必要だということも強調しました。交渉の間ずっと彼は、（神様がより大きな隣国ベネズエラを助けるために、この小さなガイアナを用いようとして選ばれるのは何とすごいことだろうか）と考えていました。
ガイアナに戻ると、彼は喜びにあふれて、ベッキーにこのすべてを話しました。短波無線を用いて、彼は彼女に連絡をとりました。「神様ご自身が、ガイアナとベネズエラ両国の恒久的福利を与え始められた。ニルグアのアドベンチスト大学のボランティアサービスへの熱意を知るために、君がそこにいたらよかったのにと思ったよ。ユニオンは今、大学卒業生が皆、卒業後の最初の 1 年を教会の伝道奉仕のためのボランティアをするためにささげるように誘う計画を立てている。もしその考えが、世界中のカレッジのキャンパスに影響を与えたらどんなことが起こるだろうね」
「ねえ、あなた聞いて」とベッキーが答えました。「モーセの『神は人のように偽ることはなく、また人の子のように悔いることもない。言ったことで、行わないことがあろうか、語ったことで、しとげないことがあろうか』という言葉以上に、そのことをはっきり言っているものはないわ。民数記 23 の 19 よ」

24 章

神様はまた働かれた

2001 年は、人が桁外れの問題と呼ぶような新しいチャレンジをもたらしました。地元ガイアナのボランティアたちは、習わしから離れて神様を見るように変わっていきました。彼らは、神様がなさる問題解決は奇跡だということを知ったからです。神様は、「あなたがたに将来を与え、希望を与えよう」（エレミヤ 29:11）と約束しておられ、みわざのあらゆる面を支配されることを彼らは信じました。

最初のチャレンジは、局の電波の強さを最大限にもっていくための伝達装置を作り上げるという、大きな技術的必要を満たすために、ダン・ピークがひとり苦心していたときにやって来ました。彼はその上、無線通信と局の運営も切り盛りしていました。ダンは不平を言いませんでしたが、デイビッドは、局の運営を担うことのできる若いカリブの専門家を求めて祈り始めました。これはダンが自由に技術的な必要に集中できるようになる一方で、本部の地元色を強めることでしょう。

神様の応答はまもなくやって来ました。トリニダードのカリビアンユニオンカレッジでデイビッドの学生だったエスター・セデノが応じました。アンドリュース大学からビジネスマネージメントの卒業学位を得て、彼女はトリニダードへ帰省する前に、宣教師また教師としてアラウの村で 1 年近くすでに奉仕していました。ジョージタウンでの必要に気がつき、彼女はデイビッドに、神様は、彼女が戻ってきてマネージャーとして奉仕するように導いておられるのがはっきりわかったと言いました。彼女の機知と技能はすぐにチーム全体からの尊敬と支持を得ました。エスターは、トリニダード・ト

バゴのテレビプロジェクトを管理していたジャッキーとペーター・スミス夫妻を通して、管理サポートを受けました。ジャッキーはいつでも喜んで手伝い、ガイアナへのいくつかの旅行をし、エスターが留守のときは臨時の本部責任者を務めました。神様はまた祈りに答えてくださいました。

デイビッドもダンも、神様が、パルイマにあるデイビスインディアン実業学校(D.I.I.C.)での、新たな危機を解決できるボランティアを持っておられたことを知りませんでした。ある金曜日の朝、デイビッドは、ひとりの引退牧師と図書館司書であるその妻を滑走路で下ろしました。この年配のボランティア夫妻は、D.I.I.C.の初めての図書館を整えるため、またバイブルワーカーを教え、祈祷週を執り行うためにやってきました。その金曜の午後、日没の少し前、だれかが、水源の流れが止まっていることを見つけました。それは1950年代以来、その地域の水源となっており、レイン山から来ています。このまま水源の水が止まってしまえば、川の水を料理、飲用、そして入浴に使わなければならなくなったことでしょう。

キャンパスの建物全部へ水を送るパイプ
作業中のデイヴィッド・ホーシック

しかし神様はこの問題を前もってご存知でした。神様は、2001年1月から3月まで、D.I.I.C.のためにその技能を提供するためにカナダのオンタリオから来ていた、アドラのボランティア技師デイビッド・ホーシックにヒントを与えました。水の流れが止まった後、日曜の早朝に、ホーシックは水源への水が最初に流れ出てくる大きな岩まで、急な坂道を半マイル（800m）歩きました。彼は泥や岩くずが貯水タンクを一杯にして、山から学校へと流れ下る水の

パイプを詰まらせているのを発見しました。学生に手伝ってもらい、彼らはプラスチックの貯水タンクをきれいにし、それを持ち上げ、そのあたりを 2 フィート（約 61cm）掘り下げて、タンクを低くしました。それから彼らはコンクリートの緩衝ダムを作りました。水がよどむのを防ぐために、彼は、タンクにいつも水をおよそ 18 インチ（約 45cm）貯めておけるような位置に排水パイプをつけました。

ホーシックは、その水源では、雨が降らない年には発展していく学校に間に合わないだろうということに気がつきました。ひとりの年老いた村人が彼に話しました。「わしはあんたを、この水源の 400 フィート（約 122m）上方にあるもうひとつの水源まで連れて行ける。そこには巨大な岩から流れ落ちる小さな滝がある」

その可能性に興奮して、ホーシックは学生に手伝ってもらい、その山にセメントを運び上げ、滝の下にコンクリートの集水池を作りました。彼らはその池を金属板で覆い、岩くずや小動物の侵入を防ぎ、口径４分の３インチの黒いプラスチックパイプを取り付けました。茂っているジャングルの植物を切り払いながら、水が最初の水源へほとんど垂直に 50 フィート（約 15m）流れ落ちるようにしました。今では、水は２つの水源から２インチ（５ｃｍ）のプラスチックパイプを流れて、山のふもとにある 1,000 ガロン（約 3.8t）の水槽まで行きます。学校の歴史の中で、これまでこの水槽が一杯になったことはありませんでしたが、今では量と水圧が増して、水槽は一杯になり、およそ５時間のうちにあふれ出てきました。学生たちは溝を掘り、あふれ出た水を学校の畑へと導きました。水量が増えて、構内のどの建物もパイプから流れ出るきれいな水を得ることでしょう。命の水であるイエス様は、ご自分の子らに十分の供給をしてくださいました。

天からのこの奇跡的な贈り物のことで神様を賛美しながらも、デイビッドは別のとても重要な文書に注意を向けなければなりませんでした。最初の２年間彼は、GAMAS の飛行機を一時的な認可で運営してきました。それから最後通告が来ました、「これ以上一時的な認可は出せません。あなたがたの飛行機は、政府が永久認可を与えるまで、離陸できません」。奥地にデイビッドが飛行できるただ

１つの方法は、セスナ 206 を 1 時間約 250 ドルで、ツインアイランダーを 1 時間 350 ドルで借りることでした。奥地への必要を満たす飛行をするたびに、850 ドルから 1,200 ドルの費用がかかります。

良友ウィンストン・ジェームズに心配を打ち明け、デイビッドは説明しました。「GAMAS がこの国でずっと飛行機を使った伝道プログラムを公式にやっていくのには、どうしてもガイアナ政府からの認可が必要だ」

「君は、首相がパルイマへ、そして国の大統領がカマラングへ最近訪問したことで、私たちの認可申し込みが関心の的になったことがわかるだろう」とウィンストンは答えました。「ジャグデオ大統領との面会の約束を要請しなかったのかい？」

「ああ、したよ。教団本部と共に、僕らは 2,000 年 10 月２日月曜日午後４時に彼と会った。僕らは、嘆願書と一緒に多くの心からなる祈りをささげるためのマスタープランを用意した。奥地一帯の全部の教会が特別な祈りと断食の期間を持つと誓った。４時に彼らは教会のベルを鳴らしたので、村人すべてがしていることを止め、その面会の間、神様のご臨在があるように祈ることができた」

「すばらしい！」とウィンストンは答えました。「僕らは『いと高き者が、人間の国を治めて』（ダニエル 4:17）おられることを知っている。神様は彼らの祈りを聞かれた。その面会のことを話してくれたまえ」

「僕らはジャグデオ大統領と人事担当局の有力な局長ドクター・ロンチェオンに見せるために、過去４年間の詳しい報告書をカラーで用意した。僕らはベン・カーソン物語“ 才能ある手”というきれいな本を 1 冊、奥地での子供医療事業で僕らと一緒に働いている大統領夫人にさし上げた。ジョージタウンの教会も神様のご臨在と力とを祈り求めた。僕らみんなの目は神様を見ていた。僕らはその面会の間、はっきりと神様のご臨在を感じた。なぜなら聖霊が、ひとつひとつの質問に僕らが答えるのを助けてくださったから。大統領は報告書を見終わった後、『私は、このサービスは奥地の多くの孤立した村々にとって大きな助けであると確信する。GAMAS が国中で医療航空機プログラムを運営する正式認可を受ける手続きをすぐ始めよう』とはっきりおっしゃった。

その面会の場を去りながら、僕らは、『あなたがたを召された方は忠実であって、それをなさる』ということを実感したよ」

「だが、デイビッド」とウィンストンが言葉を挟みました。「その面会は去年の 10 月だった。君たちの飛行機は両方ともまだ空港に停まっている。どうしたんだい？」

「サタンが、大統領のおっしゃったことを妨害あるいは遅らせるために油断のならない方法を引っ張り出した。サタンの企みに協力して官僚機構が、政府機関や省庁のおびただしい手続きを要求している。まず、彼らは、軍の手続きが済むまでは認可は出せないと言った。僕らは幾度も軍と一緒に働き利益を与えてきたので、それはひどく遅れることなしに認められた。間もなく僕らはその認可を受けたと、省から連絡があった」

「第２に、だれかがセスナ 172 の売渡契約の請求書の文言に説明の必要があると文句を言った。すぐに僕らは作業にとりかかり、24 時間以内に、彼らを満足させるようにすべて変更した。何週間過ぎても、まだ手間取っているので、僕らはまた電話をした」

「第３の異議は、『あなたがたは、セブンスデー・アドベンチスト教会に対する GAMAS の支持関係を証明する必要がある』ということだった。僕らは、その文書は書かれてあって、彼らのファイルにあることを彼らに思い出させた。さらに手間取った後で、彼らはそれを見つけ満足そうだった」

「『２日後にまた来なさい、そうすればあなたがたの認可は用意できているだろう』と彼らは約束した。ところが僕らは、この遅延ゲームにサタンがどんな新しい障害物を振り上げようとしているか知らずに、待った。最後に僕らが受け取った言葉は、認可のための書類処理は終わり、承認のために全部まとめて内閣に行くとのことだった。そこで停滞したのは、セスナ 172 は、GAMAS の名前で登録された新しい検定証の交付と、飛行機の耐空性検定証の再交付を受けなければならないということだった。神様に感謝するよ、ゆっくりだが着実にはかどっているのがわかる」

３月半ばにやって来る国政選挙で、デイビッドは、時は短いと知りました。何百人もの村人たちが断食して祈りました。一時的運営

認可の期限が切れた小さな赤い飛行機は、いまだに最後の承認を待って地上に置かれたままです。

選挙のちょうど 11 日前、デイビッドは希望を失い始めました。けれども神様は、朝の個人礼拝で、マタイ 14:24、25 から彼に話しかけてくださいました。「ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。イエスは夜明けの４時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた」。デイビッドの心は平安で満ちました。神様は、認可はぎりぎりの瞬間に出されると語っておられる、という確信を彼は感じました。

2001 年３月８日木曜日の朝、民間航空の社長がほほえみながらデイビッドを迎えました。「内閣が、GAMAS にガイアナでの運営に全面的承認を与えましたよ。この５年間のあなたがたの忍耐が報われました。ここに、ガイアナのどこにでも飛行できる認可証があります」

次の安息日、デイビッドは小さな赤い飛行機で飛んで、パルイマの滑走路に着陸し、それからカイカンに着陸しました。大喜びの村の子供たちや大人たちは、賛美し、祈り、そして歌うために、セスナ 172 の周りに２つの大きな輪を作りました。喜びにあふれて、デイビッドは祈っているデイビスインディアンの友人たちへの感謝を言い表しました。

「私たちは打ち勝ち難いと見える困難に対して戦っているように見えましたが、あなたがたは、神様の約束への信仰を通して大きなことを期待しつつ、神様に嘆願し続けました。私たちが御名に栄光を帰すことができるようにと神様に最高の求めをするとき、神様はお喜びになると確信します。サタンのもたらす困難や遅延は５ヶ月にわたり、ガイアナでの私たちの飛行機を使った救援の働きを妨げました。私たちは、神様は依然として、今もなお人々の事情をコントロールしておられるのを知っています。今は、なぜ長い遅延があったのか理解はできませんが、その長い待機の間、神様が恵みを与えて、私たちが神様に目を留め続けていられるようにしてくださったことを賛美します」

それからの３日間、ゲイツ一家が合衆国へ旅行をする前、デイビッドはひっきりなしに飛行機を飛ばしていました。彼はボランティ

アたちの必要品を運び、医療の必要な患者たちを拾い、訪問者たちを運び、薬剤のことで飛び、新しいチェーンソーを配達して建築を加速させ、ガイアナの地区７と地区８に燃料を運びました。牧師の支援の必要が絶対にあると感じて、教区の牧師が GAMAS によって２日間奥地に飛行機で入ることを志願しました。パルイマとカイカンの間で、彼は長老たちに按手を施し、８つの結婚式を執り行いました。牧師がその地区にいると聞き、バプテスマを受けたいとカイカンまで歩いてきた 25 人の人々のように、４つのバプテスマ式がそれぞれ予定されました。教会員たちは GAMAS の飛行機が希望、喜び、そして祝福を奥地にもたらし続けることができるのを喜びました。

少し後のことですが、新たにある深刻な面倒を引き起こしている技術的な問題を話し合うために、ダン・ピークはデイビッドを横に引っ張って行きました。

「ワシントン夫妻がチャンネル 12 を寄贈したとき、彼らの要望の１つは、僕たちがそのチャンネルの電波力を最大限にすることだった。伝達装置の増幅器を作ったが、うまく動かない。率直に言って、僕には問題を見つけられないんだ。もしこれをすぐに動かせなければ、３万ドルする伝達装置の購入を考えなければならないかもしれない」

突然ダンは、放送電子機器に関してとても頭の切れるひとりの友人を思い出し、彼に連絡することに決めました。数週間は可能だと言い、その友人はやって来て、その機械をとても一所懸命に見てくれました。すぐにもその局の電波力は最大限になるに違いないと思われました。その友人は部品を求めて合衆国に旅行をし、仕事を仕上げるために戻ってきました。彼は修理した増幅器をテストした後で、伝達装置を入手するようにとの勧告を含む、新しい必要品のリストをデイビッドに渡しました。彼らは振り出しに戻りました。

局を管理することになってから 18 ヵ月、彼らはまだ電波が弱い状態で送信していました。この時にダンと彼の家族は、ダンが放送に関する技術的な経験を増やせるように、合衆国への帰国を決めました。期待は高かったのですが、信用性は損なわれていきました。その危機を神様に解決していただかなければなりません。

最初は個人的に、それからグループで、デイビッドは、局のことでの心配を理事会に打ち明けました。「新しい伝達装置を購入するための資金を奇跡的に与えてくださるように神様に頼むことは構わない。だが僕は、放送の技術的な面に焦点を当てていた間に、番組作りのいくつかの分野で、私たちは神様の期待に背いてきたのではないかと思う」

「私たちが放送するすべてはキリストの栄えとなり、私たちの明快な存在意義を反映しなければなりません」。厳粛な思いで理事会はひざまずき、この弱点を告白し、新たに変える方向の上に特別な祝福を求めました。

その誓約に伴い、大きな戦いを繰り広げている両サイドが即座に行動を起こすべく準備をしました。次の２日間、デイビッドが国外に出ている間に、外部勢力がテレビ局を理事会の監督からもぎとろうと企てました。内部の経済情報を用いて、これらの人々は、必要とされる高価な新しい伝達装置を買うのに十分な資金は、管理権の引継ぎをしない限り、手にできないだろうと主張しました。見たところ偶然のようであって、実は明らかな神様の摂理のうちに、デイビッドはそれぞれの危機に機先を制することができました。

神の手が支配しておられるのを見て心が喜びでいっぱいになり、また理事会が定めた方向に安心し、デイビッドは確信を持って、必要な伝達装置を購入するにあたって急を要する資金を主に求めました。24 時間以内に、半ば引退した夫婦がデイビッドに、彼らの退職金をその機器を購入するようにささげますと連絡して来ました。神様の約束がデイビッドの耳に鳴り響き続けました。「彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、彼らがなお語っているときに、わたしは聞く」(イザヤ 65:24)。

急いでガイアナに戻り、デイビッドは局の日常運営の監督を自分でやり始めました。神様が与えてくださった新しい伝達装置は、明らかに、局の働きにおける信用と威信を取り戻す助けとなりました。ワシントン氏の助けで、技術者たちが３ABN と AGCN、そしてすぐに参入するセイフテレビに、新しい衛星ダウンリンク（通信衛星から地上への信号の送信路）を組み込むために雇われました。テレビ局の伝道活動に合わせて、デイビッドは、局によって提供される

聖書研究や文書配布の仕事をするバイブルワーカーチームを発足しました。テレビ２での情勢は再び軌道に乗りました。

何ヶ月か前に、デイビッドはベッキーに告白したことがありました。「GAMAS の永久的運営認可を受けたとき、僕らが別の挑戦に向き合うと考えたことがあるかい？神様の祝福が増して責任も増すようになった。僕はすでに多方面に手を広げすぎてしまった。長期間献身する、パイロットやその他指導者としての資質のある円熟した人々がいなければ、ガイアナ奥地での進展は挫折するだろう」

「あなたは正しいわ、デイビッド。でも神様がお送りになったボランティアたちのことを考えてみて。ジョージタウンのボランティアとして、テレビ局のすべての技術的な事態を処理したダン・ピークとその家族、パルイマの D.I.I.C でリーダーになってくれたドクター・シーラがいなかったら、あなたは何を成し遂げたことかしら」

デイビッドは彼女をさえぎりました。「村の学校で教えているような地元のボランティアたちのすばらしい働きを忘れてはいけないね。D.I.I.C.はテネシーのサウザンアドベンチスト大学の学生宣教師たちがいなかったら続けられなかった。彼らに加わって、ほかの国々、カナダ、ドイツ、フランス、スロバキア、トリニダード・トバゴ、ボリビア、それにオレゴン州からボランティアが来ている。学期の間全部で 14 名のボランティアだ。彼らは、なんと素晴らしい献身を見せてくれたことだろう！ジョージタウンには飛行機整備の見事なチームもある。でも今僕らは、時間、家庭、家族、そして国の都合を犠牲にして GAMAS のチームに加わって献身しようとする、辺境パイロットが必要なんだ」

「問題を主にもって行くわ。困難を挑戦とし、遅延を信頼と忍耐を発達させる時として、それらを神様にゆだねることのできるボランティアを選んでくださるように主に求めるわ。主が、神様にすべて明け渡せば、たとえ欠点があっても、神様の力によって、神様の栄光のために勝利者になることを人々に強く印象づけてくださるでしょう」

そう言って、ベッキーは自分の聖書を取りに寝室へ行きました。

しばらくしてから、彼女は階段を駆け下りて来て、デイビッドを抱いて声を上げました、「神様は答えをくださったわ。モーセが管理の仕事が多すぎて重荷を感じたとき、主が 70 人を集めるようにおっしゃったことを覚えている？神様は言われたのよ、『わたしは下って、その所で、あなたと語り、またわたしはあなたの上にある霊を、彼らにも分け与えるであろう。彼らはあなたと共に、民の重荷を負い、あなたが、ただひとりで、それを負うことのないようにするであろう』。これは民数記 11:17 よ。神様はこの瞬間に、飛行するという重要な仕事を助けるために足を踏み出して志願する、献身したパイロットたちを備えておられるに違いないわ」

ベッキーの確信に励まされて、彼らはひざまずき重荷を主にあずけました。

数週間後、デイビッドとベッキーは、卒業生の集いで話をする予定になっていた、サウザンアドベンチスト大学に向かいました。彼が知らなかったのは、大学が彼をその年の最も傑出した卒業生に選んだばかりだということでした。大学の教会の礼拝説教をすることになっていたデイビッドは、体育館が中年の退職者たちでいっぱいになっていることに気がつきました。空いた座席はありませんでした。人混みから離れたところで、オーヴィル・ドネスキーとゲーリー･ロバーツというふたりのパイロットが、デイビッドの説教の中で言ったこと聞いていて、大きな感銘を受けました。

ゲーリーは航空機医事伝道者一家の中で育ちました。今は正規の看護師、専門パイロット、それに整備士である彼は、医療の働きに焦点を当てた航空機伝道プログラムに導いてくださるように神様にずっと祈っていました。聖霊は、GAMAS が彼の祈りへの答であると語りかけました。彼はやはり正規の看護師である若い女性と会う約束をしていました。彼は彼女に、ガイアナ奥地の未踏の地域でのパイオニアに召されたと感じたことを話しました。

デイビッドは 13 年前に、メキシコでオーヴィル・ドネスキーの兄弟と一緒に飛行したことがありました。オーヴィルとその妻オーディルもまた、７歳のアンドリューと３才のクリスティーナという子供と共に、ガイアナでの飛行機を使った伝道の働きに加わることを考えるようにと、神様の御霊に励まされるのを感じました。これ

は彼らの立派な、家を売り、オーヴィルは、テネシーのカレッジデイルにあるマッキーベイキング会社で高収入を得ている技師として研究に従事する仕事を止めることを意味しました。そのような思い切った生活スタイルの変化に、危険を冒して乗り出すことを恐れたけれども、彼らは信仰によって前進を始めました。

オーヴィルの家族共々、ゲーリーとオーヴィルはデイビッドと一緒に飛行しながら、ガイアナで2001年２月の大部分を過ごすために旅費を自ら支払うほど、強い献身の念を感じました。ペルーのプカルパの飛行場でクライド･ペーターズからの招待を受け入れて、彼らはジャングルサバイバルの集中訓練課程をとりました。オーヴィルとゲーリーは、ブラジル横断徹夜飛行のためのツインコマンチの副操縦を交代でしました。彼らは、数時間休憩をとるため、そして燃料補給のために、ボリビアに着陸しました。ペルーのプカルパにその夕方到着したときの彼らは、ガイアナでの飛行機を使った伝道のために、神様がどのようにしてもうひとつの扉を開かれるのか知りませんでした。

ペループロジェクトのパイロット、アルバート･マリンが、彼らに会って言いました。「来て、僕らの最初のセスナ182辺境飛行機『J.J.エイキン』を見たまえ。故障したギアの修理の最中で、新品より頑丈になるだろう。僕らは今、第２機を飛ばしており、神様の誉れと栄光のために『J.J.エイキン』を使うことに興味を持つ買い手を祈っているところだ」

オーヴィルはデイビッドにささやきました。「彼は、僕たちがガイアナのために買うセスナ182を探しているのを知っているはずがないですよね」

デイビッドは頭を振りました。「彼が知るわけがないよ」とささやき返しました。「神様が何かを特別にひそかに用意しておられるのかな？」

何日かの内に、価格が設定され、売渡契約が承認され、その飛行機がガイアナで神様の働きを続けることに、仲間全員が興奮しました。資金の半額が支払われ、飛行機が渡されて数ヶ月の内に残りの半額が支払われることになりました。

オーヴィルとゲーリーは2001年の夏に、GAMASのボランティアチームに加わる決意をしました。デイビッドとベッキーは合衆国へ戻る飛行機に乗る直前に、彼らに話しかけました。オーディルを抱きかかえたオーヴィルは、その心を開きました。「私たちはイザヤ30:21の神様の約束を疑うことはできません。『また、あなたが右に行き、あるいは左に行く時、そのうしろで「これは道だ、これに歩め」と言う言葉を耳に聞く。』私たちの必要をことごとく与えてくださるという神様の約束を思い起こすと、神様の平安が心にあふれます。不安でふるえながら私たちは、私たちを導く神様のみ手を頼みとして、パルイマのD.I.I.C.の近くにあるカマラング川の岸に粗末な家を建てることにしました。私たちは航空機伝道プログラムの役割に一端を担い、D.I.I.C.で管理上の責任を助け合って共に負う特権を与えられています。いつの日か間もなく、だれもがあらゆることを神様にまったく信頼しなければならなくなるでしょう。私たちは今学び始めることを選び、神様が私たちのために何をしてくださったかを分かち合う機会をとても喜んでいます」

ゲーリーはその通りだとうなずきました。「ガイアナへの訪問は、神様が私を、急速に発展しているこのガイアナでの働きを支えるために招いておられる、という確信を確かなものとしました。私も決心しました。オーヴィルは地区７に設立された働きを支えるために新しいセスナ182を、私は地区８で働きを開拓するために、新しい短距離離着陸装備が整っている、近頃手に入れたセスナ172を飛ばすでしょう。神様にすべて支えていただくという理念に、私たちも身をゆだねます。

同時に私たちは、兄弟たちと共に働き、神様の教会と使命に忠誠を尽くします。私は、今は神様の力と恵みのことを何も知らない大切な先住民たちの救済に向けて、意義ある貢献をするために一致して働きながら、神様の民に加わる可能性にわくわくしています」

その後すぐ、デイビッドは、バービス川ほとりにあるキンビアの新しい学校で働くローレルブロックアカデミーのグループを連れてきた、ワーレン･マクダニエル２世からの伝言を受け取りました。ワーレンとその妻ジョディは、彼らの９歳の娘テイラー、６歳の息

子ワーレン３世と一緒に、キンビアの新しい学校バービスアドベンチストアカデミーを率いる決意をしました。
　デイビッドはベッキーの手を握ってささやきました。「僕をとても勇気づけたのは、オーヴィル・ドネスキーとワーレン・マクダニエルがふたりとも、大会社のとても収入のある高い管理職の地位を、神様に従うために捨て、家族と一緒に、ボランティアとして未知の世界に入って行くのを目撃したことだ。全時間の専門のボランティア宣教師になるのは、火あぶりの刑に処せられるようなものだ。徹底的な犠牲に驚いて、人々は見に来る。彼らはそうして、『犠牲者』の顔じゅうに書かれている神にある喜びを見ることができ、同じ経験をしたいとの願望に染められるようになるのだ」
　喜びにあふれて話ができずに、ベッキーは頬を流れ落ちる涙をぬぐいました。
　デイビッドは続けました。「ガイアナのすばらしいチームを得て、僕もまた、島々に行き渡るカリビアンネットワークの増大する必要に注意を向けることができた。おお、僕は君に、僕らの良友で長い間教団の協労者だったセントルシア出身のギルバート･ジュニア・フランシスコが、僕らのカリビアンファミリーネットワークのチームに会社秘書として加わったことを話すのを忘れていた。神様は僕らへの約束を守っておられる。神様は僕らがぜひとも必要としていた助けを与えてくださった。僕らは、すべてを祝福としてくださるように神様に信頼しながら、主の奉仕のためのボランティアを志している神様のみ手の中の器にすぎない」
　うやうやしく頭を垂れて、デイビッドは声高く祈りました。「どうか、愛する父よ、私たちの目はあなたに向いております。あなただけ、心と動機を読めるあなただけが、これからも続けて、献身した働き人の心を、ボランティアとなるように動かすことがおできになります。あなたは、『キリストの御名がまだ唱えられていない所に』(ローマ 15:20)　行くために、この世の便宜を、そうです、命さえも喜んで犠牲にしようとしている心をご存知です。私は飛行機、テレビ局、学校、そして医事伝道の働きに伴った恵みの奇跡を喜びます。都会でテレビによって福音にあずかっている幾百万という人々とまったく同じように、これらのいとしいアメリカ先住民もあ

なたの子供たちです。あなたは始めたことを完成なさるという保証を感謝します。ヨシュアのように、私たちはあなたの約束に頼ります。『強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない』（ヨシュア１:９）。あなたの聖なる御名をほめたたえます。アーメン」

付録

デイビッド・ゲイツとの会話

質問．デイビッド、宣教師になるためには何が必要ですか？
答え．成功する伝道奉仕にとって一番不可欠な要素は、神様との親密な関係であり、それと共に、神様があなたを伝道奉仕へと導いておられるという確信です。働きの中で困難が生じるとき、召命感を持つことが必要不可欠です。それが人を、奉仕に召してくださった神様に心配事を投げかけて、問題の解決を神様に求めるように導きます。ある人たちは若いときからその召命感を感じており、またほかの人々は人生経験の間に、あるいは外国の現場を訪れているときに感じます。

質問．それには特定の性格、あるいは特別の技能が必要ですか？
答え．すべての人は興味、素質、気質、性格の多様な組み合わせで生まれてきます。これらは自己鍛錬と教育を通して向上し仕上げられるための原材料となります。神様はあらゆる能力、才能、技能、それに性格にふさわしい場所を、ご自分の働きの中にお持ちです。この原則を理解し受容することが、他の人々を受け入れることができるために、またチームとして共に働けるために欠かせません。

マタイ 14 章、またマルコ 6 章の 5 つのパンと 2 匹の魚の奇跡に教えられているように、私たちは、主から直々に、「あなたがたの手で食物をやりなさい」(マタイ 14:16)と命じられていることを認めなければなりません。私たちが所有しているものすべてを神様のみ手に 100％置かねばなりません。そうすれば神様は、私たちが差し出したものを受け取り、それをご命令を推進するに十分なほどに増やしてくださるでしょう。マタイ 25 章のタレントの使用についての明快な教えもまた、この原則をいっそう強化しています。それらを使いなさい、さもなければ失います。

仮に、日本とその文化があなたの興味を惹きつけたとします。あなたの関心は主からの賜物であり、育まれるものと仮定して、その関心を主に感謝し、あなたの意志を神様にゆだね、神様が他のご計画をあなたのために持っておられるなら、いつでも介入してくださるように求めるのです。しかし、障害が必ずしも神様の承認の証拠として必要ではないことを覚えてください。それらは克服せねばなりません。その間にも、あなたは文化についての書き物を読み始め、また日本語の勉強を始めているのです。その国への短い伝道旅行計画、あるいはそこで1年間、ボランティアとして奉仕する計画を立てることができます。前進するにつれ、あなたは開かれ始めている機会という戸口を見つけるでしょう。そうするときに、常にあなたの意志を日々あなたの天の父に服させることを覚えながら、歩みを続けるのです。そのうちに、自分は日本での全時間の宣教師、または日本に関する専門家だということがわかるでしょう。もちろん、別の国、たとえばアラスカが、神様があなたに望んでおられる所であれば、そうとわかるでしょう。

神様はあなたをどのように道案内してこられましたか？あなたに従うべき原則を与えることで、すなわち、あなたが現在持っているタレントに責任を負い、イエス・キリストのためにそれらを増やすという原則を与えることによってです。あなたには、意志を日々神様に明け渡し、み言葉の研究をするという習慣があるので、神様のみこころに従っているかどうかを疑問に思って、心配し続けるべきではありません。神様は、必要であればいつでも踏み込んで介入することができるのは確かで、喜んでそうなさいます。あなたが喜んで従う限り、前に向かって行動し、神様の導きを確信し、夜はよく休むことができます。

質問．教育的備えに関するあなたの意見はどうですか？

答え．まず、今日の世界において組織は、機会に対し柔軟にすばやく反応することができるように、できるだけ少ない管理層を持つことを必要としているということを言わせてください。その原則はただビジネスに当てはまるだけでなく、神様のみわざにも当てはまります。

私は、あなたがあなたの生来の興味や能力を見極めて、あなたが自然に楽しんで能力を発揮できる分野での教育を求めることを勧めます。あなたがしたいと思う奉仕の現場にいる人を訪ねて、彼らから助言をしてもらいなさい。

私が本当に強調したいもうひとつの分野は、宣教師であるということは、かなり色々なことができなければならないということです。ですからひとつの分野での専門家となる代わりに、訓練を多様化し、働きの様々な必要を満たす技能の組み合わせを求めるよう勧めます。何でも屋は、前線で良い働きをします。何かを専門にすることは、大学という職場にとって、また専門性を要する奉仕の分野のために博士号を要求される科学者にとっては良いことです。けれども、多様な勉学の分野での訓練を受けていることが、前線一般での働きにはもっと大切です。

地元の文化と言語は、あなたが手を差し伸べようとしている人々と理解し合うために絶対に不可欠です。いったんあなたが働こうとしている国を見極め、神様が戸を開かれたら、そこがあなたが行く所であるとの確信を得て、まるで自分の国であるかのようにその国を受け入れるのです。あなたの頭脳をあたかも地元の人のように考えまた話すよう訓練し、発音のなまりを自分のものとするように努めなさい。あなたは北米人、あるいは他の国出身であるかもしれませんが、あなたがある国を受け入れるときは、それが自分の国であるかのようにその国のことを話すべきです。たとえば、私がガイアナにいる時には、私は、「私たちガイアナ人は、美しいわが国を誇りとしています」と言います。私は意図的にそうします。私はガイアナ人ではありませんが、私はその国を自分の国として受け入れたので、そこにいるときには、私はその国のことを自国であるかのように話すのです。そしてあなたが彼らの一員であると思われ、人々が「あなたは私たちのひとりだ」と言うとき、それは名誉であると覚えてください。それはただちに、人々の心に触れ、あなたの影響力を築く地位をあなたに与えます。

とりわけ航空機伝道の分野においては、パイロットは少なくとも民間パイロットのライセンスと最低 500 時間の飛行経験の証明書を持っている必要があります。計器飛行には特に 1,200 時間が推奨さ

れますが、最低 500 時間です。航空機整備訓練は大変重要です。たいていのパイロットは自分で整備しなければなりません。すべての国がそれを要求せず、実際ガイアナでは、他の誰かに整備してもらうことが要求されます。しかし整備士であれば、自分の使う飛行機をよりよく手入れすることができます。

パイロットはただのタクシー運転手のようなものではありません。私の意見では、彼らはまず宣教師なのです。飛行機は彼らにとってあちこちへ行く手段にすぎません。彼らはまた正規の看護師、免状を持つ経験を積んだ看護師、あるいは救急医療技師など健康管理の訓練を考慮すべきです。そしてカウンセリング、実業的な技術、伝道に関する教育――これらすべてがパイロットには重要です。なぜなら、飛行して行くべき場所にひとたび着くと、彼らはすぐそこの事態を処理しなければならないからです。

質問．どのようにして奉仕すべき伝道活動現場を選ぶのですか？
答え．

伝道活動の現場を選抜する方法にはいくらか多様性があります。たとえば、パウロのような人たちのために、神様は特別に彼をマケドニヤへと召されました。彼はそれまでは、そこに行くことを考えていませんでした。ですからある人たちは特別の地域への特別な召しを受けます。けれども、大多数の人にとっては、そういうことはありません。

私は、神様が関心を植えつけられると信じています。ある人たちは中国だけを夢見て、中国に行きたいと思います。彼らはその言語が好きで、中国への情熱を強めるばかりです。他の人は南米へ、他の人はアフリカへ。あなたの内で大きくなる願望や情熱が何であれ、私はそれが主からのものであると信じます。ですからそれが、伝道活動の現場を選ぶときに、まず最初に見るべき地域となるでしょう。あなたはどんな地域に興味がありますか？あなたの関心がある大陸、地域あるいは国を見極めなさい。その国の歴史、地理、文化、言語になじみなさい。あなたが行きたい地域に、ボランティアの建築グループに同行し、あるいは何であっても、行きたい地域に旅行しな

さい。地元の教会指導者と親しくなりなさい、なぜならあなたは彼らの傘下で働くことになるのですから。知り合いになり、親しくなるためには、1年間ボランティアとして奉仕するのはすばらしい、強力な方法です。あなたが教会本部の人、牧師、教会指導者や地域の指導者、同様に教会員も知っていれば、その決心ができる根拠を与えてくれるでしょう。信頼され、頼みとされ、地元の働きに価値ある貢献ができるなら、そこがあなたの働き場所であると、ほぼ保証できます。

質問．どのようにして生活費を得る手段を選ぶのですか？

答え．宣教師として働く間の、経済的必要を満たす正しい方法はひとつではありません。ある性格の人は、すべての経済的見通しが立っている状況の中で、より落ち着きを感じます。ただ最小量で、あるいは資金の保証なしで喜んで身を立てる非常に柔軟な人たちがいます。ほとんどの人たちはその中間のどこかに当てはまります。

神様はあらゆるタイプの計画で働こうとしておられます。けれども、神様はたいてい、人が未知のことで神様に信頼することを学ぶように、快適な場所の外に彼らを置かれる、ということを承知してください。宣教の奉仕はいつでも、人が前進するにつれ、神様のみ手の中に置かれているに違いないという非常に多くの驚きでいっぱいです。そしてもちろん、いつか間もなく神様の民は、だれもがすべての人間的支援が断ち切られる立場に追い込まれるということを忘れてはなりません。次に述べるのは、海外で働いている間の個人的必要を、宣教師が満たすために使われるいくつかの方法です。

教団雇用。ある人たちは、予算が当てられている海外での地位の必要に合致する専門性また技能を有しています。これら有給の地位は、世界総会そして支部の秘書室を通して調整されます。その地位はわずかであって、たいていプロの専門家のためです。

自給組織。これら後援者のいる組織では、宣教師候補者が手にできる固定給があるかもしれません。ある機関は、候補者に、実際に働きに着手する前に彼ら自身の生活費を集めるよう求めます。これらのタイプの組織がおおむね必要とするのは、教会を発足させるための全般的な事柄から技術的専門的にわたる仕事をする人たちです。

個人自給。ある有望な宣教師たちは、海外で働いている間の彼らの必要をまかなうのに十分な個人資金を利用できる状態にあるかもしれません。他の人々は、海外で働く間、職を得て彼らの必需品をまかなうために彼らの技能に頼るかもしれません（自らを支えるために天幕つくりをしていたパウロのように）。毎月一定額をまかなうための資金源が、家族、友人、あるいは他の教会員から来ることもあるでしょう。教会信徒たちが、全時間ミ宣教師あるいはボランティアとしての個人を後援することがしばしばあります。

神様の援助。この急進的でスリルのある方法は、私たちの必要への供給を神様に全的に頼ろうとします。それが本書で言わんとするところです――私たちが神様のための働きに集中している間、必要のすべてを供給する神様の能力と意欲。この聖書的な方法はマルコ 6:7-13 及びルカ 10:1-11 に見つかります。そこでイエス様は、弟子たちをふたりずつ、手に何も持たせずに遣わしました。彼らの必要を供給することを神様に頼って、彼らはただ出て行きました。ルカ 22:35 で、彼らが戻って来たとき、イエスが彼らに何か不足があったかと尋ねると、彼らは「何もありませんでした」と喜んで答えました。

ジョージ・ミューラーやハドソン・テーラーのような人たちは、神様の供給能力に信頼したことで今日有名です。犠牲を通して彼らは確信を持って前進し、神様は約束なさった通りになさいました。神様はご自分の栄光の富の中から彼らの一切の必要を満たしました。「あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをして下さるであろう」（第 1 テサロニケ 5:24）。

一番驚くべき現実は、神様の子らは皆、彼らが選ぶ経済的プランが何であれ、いつの日か、すべての人間の助けが切られるとき、神様の支援計画を受け入れざるを得なくなるということです。私はほとんどの人にとって、これが一番厳しい試練であり、多くの人がそのテストを通過しないだろうということを疑いません。

この美しい原則の元で生きることを今選ぶ人たちは、彼らのために現される神様のみ手を見ることでしょう。彼らは将来の諸事件に確信を持って向き合い、初めてそのような信頼を学ばざるを得ない人々にとってすばらしい励ましとなるでしょう。

もしあなたが伝道奉仕へ召されていると感じるのであれば、私はこの本が、まだ選べる間に、あなたが天の援助という原則を経験する励ましとなるようにと望みます。あなたは「見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない」（イザヤ 59:1）ということを発見するでしょう。

?

質問．地元教会の指導者や政府の役人との関係に関してアドバイスがありますか？

答え．まず、彼らの受け持ち区域で教会の働きを運営し保護する地元教会の指導者の責任を認めてください。できるだけ彼らにあなたの計画を調和させ、柔軟でありなさい。あなたの所属する伝道本部、あるいは教団やユニオン本部との密接な仕事関係を育ててください。彼らの伝道達成を助けるために、あなたができる最善は何であるかを見定めるため、本部への個人的な訪問をしなさい。名前を知るだけでなく、顔なじみになりなさい。そして文化や展望の違いが、宣教師と地元本部との葛藤を生じるかもしれないことを認めてください。勧告を与えようとするその国の一般信徒の霊的成熟を見極めることもまた大切です。

警告の言葉ですが、エレン･ホワイトの勧告や教団の運営指針に反するにも関わらず、神様がするようにあなたを召されたことを含め、彼らの現場で何もかも細部に至るまで綿密に管理しようとする指導者がいるかもしれません。この管理様式はストレスをもたらすでしょう。そのようなときには、絶えずあなたの事情を主の前に置き、あなたが信頼する人たちの勧告を求めてください。

最も重要で決め手となる運営分野は、経済に関わることです。あなたは寄付してくれた人々に情報を提供し続ける責任があります。あなたのプロジェクトに関する経済情報は、経済的な寄付をしてくれた人々のためにとっておくべきです。寄付者でない人に信用のおける収入源や経済情報を与えよという圧力に抵抗してください。他方において、ユニオンや支部による折々の会計監査を許すのは適当であり、また信用を維持することになるでしょう。

政府に関しては、ある国は腕を開いて宣教師を歓迎する一方で、他の国は疑念と敵意をもって見ます。国民から、また他の宣教師から彼らの態度と価値観についてできるだけ多くを学びなさい。いつでも政府役人への待遇は、最高の尊敬をもってしてください。一般的な原則として、必要以上に買って出ることなく、彼らの要求する情報だけを役人に与えてください。これは自国政府の大使館や領事館も含みます。そしてあなたの力の範囲内でできるだけ多く、また神様のみ旨との調和の中で、法律と要求に従ってください。

政治運動や政治団体に関しては、完全に無関係であるようにしておくことが重要です。どんな意見も表現してはいけません。私たち外国人また使命をもつ宣教師にとって、政治的なことに関わるものではありません。

質問．家族や母国の支援者との接触を保つことについてはどうでしょうか？

答え．もしあなたに、母国で祈ってくれており、そしておそらくはあなたを経済支援している教会家族やグループがあるなら、あなたの挑戦や進展の情報提供をし続けてください。あなたの困難や失望について正直でありなさい。しかし否定的な面に焦点を当ててはなりません。楽観的でありなさい。もしあなたが問題に言及するとしたら、祈りによってそれらを解決する神様の力に焦点を当ててください。もし神様がすでにその困難を解決してくださったなら、それを賛美の報告としなさい。

あなたが書いたことは、伝道現場に戻ってくることを覚えてください。ですからあなたが何を言うか、また報告の中でどんな態度を伝えるか、注意してよく考えてください。あなたの母国への感化は伝道活動現場以上に大きいかもしれません。神様があなたのために介入されるとき、人々に、働いておられる神様を見させなさい。

できるかぎり科学技術の利点を活用してください。コンピューターや電子メールはコミュニケーションを助けるでしょう。デジタルカメラは電子メール写真を、寄付者や地元の指導者に送るのに使えます。また寄付者にお礼の手紙を送るのを忘れてはなりません。地

元の支援者やボランティアもまた、あなたからの感謝の言葉を聞く必要があります。

最後に、話をする約束をできるだけ多く受け入れなさい。あなたが他の人々と神様の祝福を分かち合い刺激を与えるとき、かえってあなたが祝福されるでしょう。

質問．神様の働きでの成功をどのように測るのですか？

答え．神様は、地上でみわざを行うことで神様のパートナーとなるように人々を召しておられます。私たちは自分の性格、文化、言語、技能、才能、そして資源を、神様の支持の下で使われるように、神様のみ手に置かねばなりません。働きの成功は、神様だけにかかっているのではなく、大部分私たちの選択にかかっています。国と指導者上巻 229 ページからのこの引用文を聞いてください。「神が何かの働きを達成するために道を開き、成功の確証をお与えになるときに、選ばれた器は約束された 成果をもたらすために全力をつくさなければならない。働きを推進 するために示す熱心と忍耐にふさわしい成功が与えられるのである。神は、神の民がたゆまず努力して、その分を果たすときにのみ、奇跡を行うことがおできになる」

神様は概して不正な運営、資金の誤用、ビジョンの欠如、利己主義、不注意、怠慢、不本意な犠牲、管理のしすぎや愛のない態度があるときにはご支配なさいません。多くのプロジェクトが、神様が任命なさらなかったからというのではなく、私たち自身の過ちや硬直のために失敗します。ですから、自分の弱さを告白し、神様の指示に無条件に従うという私たちの責任は、どれほど大きいことでしょう。ここにもうひとつの引用文があります。これは各時代の希望中巻 111 ページからです。「もしわれわれが自分自身の考えにしたがって計画すれば、主は、われわれをわれわれ自身の誤りの中に放置される」

成功を測る多くの標準があります。けれども、みわざにおいては成功を決めるのは私たちの責任ではありません。私たちの責任は、死にゆく世界に神様の愛を反映して、彼らを再臨に備えさせよという、神様の召しに忠実であると見ていただくことです。ほかには何

も大切ではありません。団体、建物、飛行機、機器、資産、富、影響力、学校あるいは教会ではありません。世は普通これらを標準として、その成功を決める測りに用いますが、私たちは、それらはただ使命を達成するために使われる財産に過ぎないということを認めなければなりません。

私たちが神様の働きのための諸計画を練るために集まるとき、イエス様がなさったことや教えたことに従うことを私たちの一貫した目標とすべきです。「人の心を動かすにはキリストの方法だけが真の成功をもたらす」(ミニストリーオブヒーリング 115 ページ)。マタイによる福音書には次のことが含まれています。使命の説教、病人のいやし、死人のよみがえり、悪霊を追い出す、空腹なものを養う、渇いた者に水を与える、旅人を世話する、裸の者に着せる、病人や獄にいる者を見舞う、すべての国民を弟子としてバプテスマを施す、キリストが命じたことをすべて守るように教える（マタイ 10：6-8；25:35,36；28:19-20 を見てください）。

神様はセブンスデー・アドベンチスト教会に、この終わりの時代のための非常に特別なメッセージを与えておられます。それはすべての人のためのメッセージですが、特に、すでに神様を知っているけれども、理解すべきことが何かわかっていない神の子たちのためです。敵は、イエス様の中に啓示されたような、神様の愛と正義のご品性を攻撃することに集中しているので、私たちは、神様についての真理、神様の律法、神様の品性、そして間もなく戻られるイエス様のためどう備えるかを、私たちの生活の中にあらわすために召されています。

質問．宣教師であることについてあなたが持っている決定的な考えは何ですか？

答え．海外伝道は本国伝道ほど大きくないかもしれません。神様は今なお生きておられ、ご自分の子たちの必要を満たすことができ、また喜んでそうしてくださるということをぜひとも聞く必要のある人たちが、本国にいます。神様があなたのためにしてくださったことを他の人に話すことは、最も大切なあなたの責任です。

忠実な家令であることは、神様が祝福し続けるために絶対必要です。忠実な活動をしているからといって、それが金銭管理の悪さの言い訳にはなりません。

教会の会衆が海外宣教師や海外プロジェクトの後援にじかに関わろうと決心すると、たいていは母教会での献金を増す結果となります。伝道活動に動かされる教会は成長する教会です。賢明な教会牧師は、自分の会衆に伝道プロジェクトを採択するように励ますでしょう。

単に冒険を求めるのでなく、神様の召しを確信して行動してください。

神様の約束を文字通り信じ、それに沿って行動してください。そしていつも、神様は「ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう」（ピリピ 4:19）ということを覚えていてください。「天の父なる神様は、われわれのために無数の道を備えてくださるが、われわれはそのことを何も知らないのである」（各時代の希望中巻 330 ページ）。

資金不足も含め、未知の様々なことに向き合って前進することで、リスクを負う意欲を培いなさい。十分な資金なしで前進するときに、恐れを感じることは差し支えありません。けれども、そのような場合は、ひざまずき神様の前に数々のみ約束を置き、ひとつひとつ要求しなさい。神様の平安があなたを満たしたなら、行動に移りなさい。

成功するために、そのプロジェクトがいつまでも続く必要はないということを覚えていてください。あるプロジェクトは、それが続けられなくなるまでのごくわずかな期間だけ、働きの機会が与えられています。プロジェクトの閉鎖が失敗とは限りません。失敗を恐れてはなりません。むしろ、やってみようとしないことを恐れなさい。

あなたに扱える持ち札でゲームをしてください。もしあなたが理想的な状況を待っているなら、あなたは決して行動することはないでしょう。その状況がどれほど困難に見えても、神様に従って前進しなさい。弟子たちが、たった５つのパンと２匹の魚で大群衆を養

うように求められたことを覚えていてください。彼らは、その任務を果たすにはその資源では不十分だと見えたので、従うのは不可能だと言い争うこともできました。彼らは従うことで、「私たちは、私たちが持っているものを分け与えなければならない。そして私たちが与えるとき、キリストは私たちの欠乏が満たされるのをごらんになる」（教会への証６巻、345 ページ）ということを証明しました。

人は物よりずっと大切です。組織の最も価値ある資源はそこにいる人々です。あなたと共に働く人々の面倒をみなさい、そうすれば彼らは責任を持って事物を引き受けることでしょう。

神様は今日もあなたに問いかけておられます。「あなたの手にあるそれは何か」（出エジプト記 4:2）と。それを用いなさい！

ミッションパイロット
　デイビッド･ゲイツ物語

著者　アイリーン・ラントリー
訳者　留美子ジョンソン･井深光子

原作版発行　Pacific Press® Publishing Association

発行　赤城山学園
　〒371-0246　群馬県前橋市柏倉町 4192
　電話（027）283-6315
　ファクス（027）283-6973
　E-mail　info@akagaku.net
　ホームページ http://akagaku.net/